
とある世界の異世界目録? 魔法のある世界

とある異世界の管理人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある世界の異世界目録？ 魔法のある世界

【コード】

N3601Q

【作者名】

とある異世界の管理人

【あらすじ】

とある世界の異世界目録の続編？です。

今度は魔法のある世界へ

プロローグ

そう、これはあの戦いから何年もたった頃だった。

シヴァが黒幕として事件の幕は降りた。

彼 神崎十夜は最高神の座に着いた。

最高神と言っても、特に仕事は無い。

また彼の妻達 神崎美琴、神崎秋沙、神崎五和、神崎淡希も
最高神ほどではないが、かなりの地位に居た。

彼女達も不老不死の神になったのだ。

そして、修行をして神崎十夜以外の誰にでも勝てるようになってい
た。

「……………十夜さん。ある世界へ言って来てください」

「急に何でだ？アテナ」

彼女はゼウスの娘、アテナ。最高神補佐だ。

「急には在りません。美琴さんや秋沙さん。五和さんに淡希さんと話し合って決めたことです。」

「だからなんでだ？」

「美琴さん曰く、もう一回青春を味わって来い。だそうです」

「んじゃ、そういうことだから」

「十夜君」

「い、言っ来ててください」

「じゃあね。“転移”」

「げっ」

そこに居たのは彼の妻達であった。

そして俺はまっさかさまに落ちていく。

「可愛い女の子たくさん連れて帰ってきなさい」

最後に美琴が言った言葉は悪魔のささやきにしか聞こえなかった。

そして俺の意識は瞬く間に闇に落ちていった

第一話 出会い

【Touya side】

ここはどこだ？

そう問えば十人中十人が上空と答えるだろう。

ここは上空8000m。

そして俺はただ今、重力に従って絶賛落下中だ。

俺はここに俺を落とした妻達とアテナに少しばかり怒りを覚えた。

何せん寒いし、空気が薄い

帰ったらお仕置きしやろうと心に誓い、こうしてても何も始まらない

いので上空10m地点まで転移することにした。

上空10m地点に着いたとき、下で何か騒動があるのに気が付いた。下は街だった、洋風な建物が立ち並ぶことからヨーロッパだと軽い憶測ができる。

俺は騒動のほうへと顔を向けた。

目を凝らしてみると、そこには十字架に結び付けられた金髪の少女が、村人らしき人と、神父に囲まれているのが分かった。

神父は村人達に向かって叫んでいた。

「この悪魔を焼き殺して見せましょう！！」

と、村人達はそれに答えるかのように焼け！！殺せ！！などと叫んでいる。

俺がこれは魔女狩りだと気づくには余り時間が必要なかった。

俺は純白の翼を出すと急降下して少女の前に降り立つ。

「おお、神がこの地に降りられたぞ。私達の目撃者の行いがよかつたためだ」

などと神父は叫ぶ。

周りの村人も叫びだす。

俺は後ろの少女をチラッと見て神父に言い放った。

「こんなか弱き少女をよつてたかって……神はこんなこと
あ望んでねえんだよ!!」

俺は指を神父に向け何千度もある炎を放った。

神父は見る見るうちに灰と化していった。

村人達は怯えだした。中には逃げ出すものさえいた。

俺は後ろへ振り向き少女の体を眺めた。

それは悲惨なものだった。

いろいろのところが焼け、いろいろなところに痣ができていた。

そして顔は腫れ、軌道も安定していなかった。

しかし、息はある。

俺は少女を十字架からはずし、抱え、飛んだ

上空10mくらいまで来たところで、町を見下ろし

「燃え盛る聖なる炎よ この悪しき町に浄化の炎を
Flame
of purification」

町は一瞬にして炎に飲まれ、灰と化した。

俺は近くに森を探して、そこへ飛んだ。

腕に抱えている少女を気に掛けながら。

森に降り立つと俺は

「創造

開始!!」

木造の家を作った。

そして中に入り、ベットに少女を寝かせる。

すると驚いたことに、彼女にあった傷はほとんど治っていたのである。

それより驚いたのは彼女があけた口から見えた鋭い牙であった。

彼女は吸血鬼か吸血鬼の真祖なのだろう。

だからあんな目にあっていたのだろう。

俺は何か嫌な気持ちに囚われながらも台所へと向かい調理を始めた。

【Touya side out】

【E v a n g e l i n e s i d e o u t】

しまった。

私としたことが人間に捕まってしまった。

熱い 熱い 焼けるように痛い

死にはしないだろう。そういう体なのだから。

しかし、いつの間にか熱さはなくなっていた。

代わりに訪れたのは温かさ。

何かに包まれるような温かさだ。

これはなんだろう？何でこんなにも温かいのだろう。

でも、すぐにこの温もりは消えるだろう。

体がだるい。

この温もりの正体を見るべく目を開けようとしたが、目蓋が重く開かなかった。

なんだろう、この胸の中に広がるような気持ちは

やがて思考ができなくなりかけていた。

もう少し休もう、そして力を取り戻そう

ふいにいい匂いがした

体のだるさは取れている。

目蓋も開く

ここはどこだろう

木造の家みたいだ。

窓から木がたくさん見える

どうやら森の奥みたいだ

思考に浸っていると不意に人の気配を感じた。

「ルンルンルン あっ、目が覚めた？」

私が見上げたその先には180cmくらいの身長的美形の男が立っていた。

「貴様何者だ。それに此処は何処だ」

「何者っていわれてもなあ。俺は神崎十夜。ここは君が居た町の近くの森。君が危なかつたから連れてきたんだ」

男は土鍋を私が寝ているベットの横のテーブルに置いた。

そして中から何かを取り出しお椀によそり私に差し出す。

「君の名前は？」

私は差し出されたお椀を取ると一口食べてみた

うん、いける

「私の名前はエヴァンジェリン・A・K・マクダウエル。なかなかいけるなこの食べ物」

「エヴァンジェリンか……その食べ物はおかゆって言うんだよ」

温かい、そんな気がした

「何故十夜は私を助けた？」

「何故って………エヴァンジェリン、君の正体を知っている、からじゃ駄目かな」

「なっ!?!」

私はすぐさま戦闘態勢に入る

「そんなに警戒しなくても大丈夫だよ。」

ほら、と言いながら私に鋭い牙を見せてくる

「俺も同属。吸血鬼の真祖」

彼の言葉に私は胸の何処からか何かがこみ上げてくるような気がした。

そしてずっと堪えていたものが一斉にあふれ出しそうになった。

私の瞳から堪えているはずの涙が止まることを知らずに流れてくる。

十夜は私をそっと抱き寄せて、ぎゅっと抱きしめてくれた。

温かい。

そんな言葉が私の頭を駆け巡った。

彼となら・・・十夜とならどんな困難にも打ち勝てそうな気がする。

私は泣きながらも胸に密かに誓いを立てた。

これからずっと、十夜についていくと

【E v a n g e l i n e s i d e o u t】

【T o u y a s i d e】

エヴァンジェリンは泣き疲れ眠ってしまったらしい。

俺はエヴァンジェリンが眠っている間に調べていた。

ここは15、6世紀ころ

そしてこの世界は魔法先生ネギまの世界だと言つこと。

ネギまを呼んだのはずっと前で内容もほとんど忘れてる。

確か魔法があつた世界だと思つ

しかし、その魔法や技などは大体頭に入っている。

魔法は無詠唱や始動キ―を使う詠唱呪文などがある。

それにしてもネギまと聞くと幼なじみを思い出す。

これは俺がまだ何の力も持たないただの人間だつた頃。

俺には女の子の幼なじみが居た。

その幼なじみは幼稚園の頃から一緒でずっとボクにべつたりの甘えん坊だつた。

それも他に友達がいらないと思えるくらいに。

でも彼女にはたくさん友達が居た。

彼女は学校でも結構人気が高い美少女だつた。

その彼女とは中学校卒業以来会っていない。

俺は両親とともに両親の実家へ引っ越してしまつたんだ。

彼女とはそれっきり。

そんな彼女がはまっていたのが魔法先生ネギまだ。

別段オタクというわけでもない彼女はネギまだけにはまった。

毎週マガンを立ち読みしたり単行本を買ったりしていた。

俺はそんなことに結構つき合わされていた。

まあ俺の話は此処までだ。

外に何かが来たようなんでな

【Touya side out】

【Tyatya zero side】

ゴ主人ヲ守レナクテ

奴ラニヤラレテ

クツ・・・・・・・・!!

コレハゴ主人ノ魔力反応!?

急ガナクチャ

俺ガゴ主人ヲ助ケナクチャ!!

【Tyatya zero side out】

【Touya side】

そこに居たのは、緑色の髪の毛の人形だった。

こいつは・・・・・・・・・僅かながらエヴァンジェリンと魔力の繋が
りがある!?

急いで直さなくては・・・・・・・・・しかし、これだけの僅かな繋が
りでは

そう思いながら俺はエヴァンジェリンのいる部屋まで戻った。

「十夜……何処に行っていた？……チャチャゼロ!?」

「起きていたのか」

「それよりチャチャゼロは大丈夫なのか!?」

「……非常に危ない状態だ。エヴァンジェリンとの繋がりも時期に切れるだろう」

「そんな!? やだよ……チャチャゼロ!!」

涙を見せるエヴァンジェリン

「まてまて、人の話しは最後まで聞くもんだぞ」

俺はエヴァンジェリンの横に腰掛け、エヴァンジェリンの頭を撫でた

「えっ?」

「こいつを助けるには、こいつを人形から人間にしなければならぬ。その為にエヴァンジェリンとの契約は切れるだろう。それでもいいか?」

「……いい。だからやって。お願い……」

エヴァンジェリンが俺に向かって頭を下げた。

「……任せる」

俺はチャチャゼロを床に置き、神力を解放する。

「この者に命ある人の体を与えん 名はチャチャゼロ 我が命にて此処に命を宿せ!!」

するとチャチャゼロの体が光り輝き、光が収まるとそこには14〜5歳くらいの少女が横たわっていた。

「う……うん。はっ!?ここは何処だ!?ご主人無事だったか!!……!!知らない奴がいるぞ!!」

「………よかった。チャチャゼロ」

「ふむ、早く服を着せたほうがいいな」

俺は目を背けながら服を創造する。

今のチャチャゼロは素っ裸なのだ。

「あれ?ご主人が俺より小せえ………つてか片言じゃなくなつてる!?!」

「十夜に感謝するんだな、死にそうだったお前と私を助けてくれたんだからな」

「………てめえ……俺を元の姿に戻しやがれ!!これじゃあご主人を守れねえだろうが!!」

「………大丈夫だ。問題ない。お前の体は元から身体能力に特化してたからな、今までより力を発揮できるようになっ

てるよ。」

「それならいいけどよ」

まあこんな女の子に戦ってもらいたくは無いいけどね

【Touya aside out】

第二話 移動

【Touya side】

俺は二人が眠った頃、一人小屋を出た。

「近づいてくる数は30人弱・・・・・・・・町を潰したのはやり過ぎたかな？」

俺の展開しておいた結界に引っかかったのである。

「まあ、二人とも気持ちよさそうに寝てたしさっさと済ませてきま
すか」

俺はそういつて地被いてくる人物達の前まで転移した。

「貴様何者!？」

「お前達が探しているであろう人物だよ」

「なっ!？貴様があの町を……砲撃呪文用意」

『炎の精霊10柱。集い来たりて敵を射て。「魔法の射手・連弾・炎の10矢」』

たくさんの炎の矢が周りから飛んでくる。

「詠唱が遅すぎるんだよ。プラクテ・ビギナル光の精霊99柱。集い来りて敵を射て。「魔法の射手・連弾・光の99矢」」

俺の魔法の射手が敵の魔法の射手を貫通して相手を次々と倒している。

「プラクテ・ビギナル契約に従い我に従え炎の霸王。来れ、浄化の炎、燃え盛る大剣、ほとばしれよソドムを焼きし、火と硫黄、罪ありし者を死の塵に。「燃える天空」」

当たり一帯は燃え尽き、敵は跡形も無く消え去った

「……なんかプラクテ・ビギナルってダサいな。始動キ―考えようかな?」

「それならば私と同じ始動キ―を使えばいい」

上を向くと浮遊術で浮かんでいるエヴァンジェリンがいた。

「来てたのかエヴァンジェリン。それにチャチャゼロ」

「ああ、お前が出て行くのに気が付いたからな。それと私の事はエヴァでいいぞ」

「それにしてもおめえすげーぜ。俺でも魔法が使えるようになってるぜ」

「ああ、それよりエヴァの始動キーというのはどついつものなんだ？」

「いいだろう、見せてやる」

エヴァはフンと鼻を鳴らし此方を向く……えっ？

「リク・ラク・ララック・ライラック 来たれ氷精、闇の精。闇を
従え吹けよ常夜の氷雪。」「闇の吹雪」

俺は瞬時に詠唱を始める

「リク・ラク・ララック・ライラック 来れ雷精、風の精。雷を纏
いて吹きすさべ南洋の嵐。」「雷の暴風」

二人の中位魔法がぶつかり合う。

ドガガガガン

「ふー、危ねえじゃねえーかー!!」

「ふん、流石と言ったべきか。よし、私はこれから貴様についていくぞ。そしていつか……」

顔を真つ赤にさせて体をクネンクネンさせるエヴァ……..
なに？フラグ立てたっけ？

「エヴァ、置いていくぞ」

俺は一言だけ声を掛けて小屋に戻った。

結局、エヴァは付いてこず、帰って来たのは日にちが変わってからだった。

えっ？チャチャゼロ？もちろん俺と一緒に小屋に帰りましたとも。

【Touya side out】

【Evangeline side】

魔法使い襲撃事件の次の日、彼は突然こんな事を言い出した。

「そつだ暗黒大陸へ行こう」

「はあ？いきなりどうしたんだ？」

「いやね、ここにいてもすぐに襲撃受けるだろうからさ。まだ未開の暗黒大陸に行こうかなって」

なるほど。それなら確かに手間が省けるな。

「ふむ、分かった。では早速出発しようではないか」

「ああ」

私達は家を出て歩き始めた。

暗黒大陸に着いたのは、5年後だった。

何故こんなに掛かったかと言うと、地球のいろいろなところを旅しながら来たからだ。

そのたびの途中でも襲撃者に結構襲われていた。

しかし、その回数分十夜のバグさを思い知らされるのだ。

時には軍隊を指一本で潰したり、

時には精霊王と本気のガチバトルをして余裕で傷一つ受けず勝ってきたり、

まあ色々大変だったわけだ。

「おい、エヴァ〜早く来いよ」

それで今は大きな城の前にいる。

「ああ、今行く」

中には人の気配も生き物の気配もせず無人の城だ。

十夜曰く、いないなら勝手に使ってしまったとのことだ。

中に入ると、埃は被っているもののまだ新品同様なものや高価なものが沢山あった。

「ふむ、片付けるか」

十夜はそういつて右手を前に出す。

「現れよ精霊たち……すまんが掃除をしてくれんか？頼むな」

私には見えないがそこに居るであろう精霊に話しかける十夜。

すると回りは見る見るうちにきれいになっていく。

さすが精霊の力。

いつか私にも見えるときが来るのか？

【E v a n g g e l i n e s i d e o u t】

【T o u y a s i d e】

レーベンスシュルト城に入ってから早三百年。

あつ、レーベンスシュルト城っていうのは俺らが勝手に住み着いている城の事ね。

まあ三百年たったんだけど………

エヴァは地下の研究室に百年近く籠ったままだし、チャチャゼロは俺が作った別荘の中に居るモンスターを殺しまくっているし。

正直暇なわけだ。

なんか新しい魔法でも開発するか？

そんな事を考えながら、ソファアーに横たわっている俺。

チャチャゼロは向かい側に居る。

そういえばチャチャゼロが結構女の子らしくなったんだぜ。

俺としては良かったと思っっている。

「フハハハハハ！！ようやく完成したぞ！！」

「あん？今まで何してたんだエヴァ？」

「くっくっく、実は今までとある魔法を開発していたのだ。

「ふーん。」

俺はエヴァの答えに興味がなさそうに答える。

「貴様なんだそのやる気の無い返事は！！付いて来い、私の力を見せてやる！！」

「何？決闘？血が見れるなら私もいくわ」

まあチャチャゼロは中身はあまり変わっていないが………

はあ仕方ない。

「一回だけだぞ」

俺は重い腰を上げて、別荘へと入った。

「来い十夜!!」

「……………はあ。リク・ラク・ラ・ラック・ライラック 契約に従い、我に従え、氷の女王。来れ、とこしえのやみ、えいえんのひょうが」

俺は結構手加減した「えいえんのひょうが」を放つ。

それに対してエヴァは手を前に出したただだった。

「ハアアアアア!!! 掌握!!!」

すると「えいえんのひょうが」はエヴァの体の中に吸い込まれていった。

「フハハハハ。これが闇の魔法だ!!! いくぞ!!!」

エヴァが襲い掛かってくる。

確かに今までよりも格段にパワーがあがっている、

「それが闇の魔法か……………リク・ラク・ラ・ラック・ライラック 契約に従い我に従え炎の霸王。来れ、浄化の炎、燃え盛る

大剣、ほとばしれよソドムを焼きし、火と硫黄、罪ありし者を死の塵に。「燃える天空」 固定、掌握！！」

俺の体に赤い炎が纏われる

「なっ！？私が二百年掛けて開発した魔法を一回見ただけで……
……どれだけ規格外なんだお前は」

なんか呆れられた気がする。

でもこの魔法にはまだ開発の余地がありそうだな……
……やってみるか

「なあエヴァ」

「何だ？」

「俺日本に行こうと思うんだけどお前行くか？」

実はこの前、文献で呼んだ神鳴流に興味を持って遊びがてら技を盗みにいこうかと考えていたのだ。

「当たり前だ。私はお前がいくところなら何処へでも行くぞ？」

「それはそれで困るのだが……分かったいくか」

「すまぬが一週間くらい待ってくれんか？レーベンスシュルト城をリゾートに移したいのでな」

確かに……今まで住んでたこの家を簡単に手放すのは惜しいな

「あゝめんどいからエヴァちょっと出てくれない？」

「？何をするつもりだ？」

「いやね、こうやったほうが早いと思ってな」

パチン

俺が指を鳴らすと城は大きな魔方陣で囲まれその姿を一瞬にして消した。

「なっ！？何処へやった！？」

「そこそこ」

俺が指差したのはエヴァのリゾートのダイオラマ魔法球だ。

その中にはさっきまで目の前にあったレーベンスシュルト城が入っていた。

「もう、何も突っ込まんぞ」

「ああ、そうしてくれ。俺も自分の人外さには呆れてるからな」

そして俺たちは日本へと向かった

【Touya side out】

第三話 神鳴流（前書き）

どうも、つい先日？禁書目録の初回限定版を買った作者です。

フィギアや絵は良かったんですが……もう少しストーリーを長くしてもらえたらなっていう願望もありました。

でも、きっかりとバトルをやりこんでいます。

それでは第三話どうぞ

第三話 神鳴流

【Touya side】

京都に………来たぜ!!

てか、すでに着いてから3年近くたって居るんですがね………

まあそんなことは些細過ぎて今はどうでもいい。

そんなことより今は目の前に居るデカブツをどうにかしていただき
たい………

G y a a a a a a a a a a a a a a ! !

そう、俺の目の前にはリョウメンスクナノカミが居るのだ。

そもそもなんでこうなったのやら………

それは約3年前のことだった。

「たのもー!!」

俺は京都についてすぐ、神鳴流を教えているであろう総本山へ向かった。

エヴァは街を見て回りたいたって途中で分かれた。

「なんだい君は？」

出てきたのは優しそうな爺さんだった。

しかし、とても強い。歩き方などからそれが分かる。

「俺は神崎十夜。道場破りをしに来てやったぞ」

「ほう、お主がお……噂とは違う男じゃのう」

「どんな噂かは知らんが、早く決闘させる。俺は木刀しか使わん。俺が勝てたら神鳴流を俺に教える」

「?神鳴流をかのう。神鳴流など無くてもお主は十分強いだろうに」

「ああ、そうだな。でも……俺は全ての力を手に入れ神々の頂点に立つ男だ。手札が多くて困ることは無い」

「ふおっふおっふお。あい、分かった。どっからでも掛かってくるがいい」

お爺さんは真剣を抜き、構える。

一見、何も考えていないように見えるが隙がまったく無い。

最初から飛ばさないと勝てそうに無いな……

「……行くぞ!!」

俺は神速で間合いを詰める。

爺さんはそれに気づいたのか、一閃してくるが俺のほうが早かった。

「遅い!!秘剣・燕返し!!」

俺は急所を少しはずして、三回切りつける。

そして再び間合いを取る。

ドサッ

「……ッ……ッ……やってくれるわい。流石じゃのう」

ザワザワ

「おい、あいつ師範を倒したぜ」

「師範は確か歴代最強だったはずじゃ……」

そんな騒ぎ声が周りから聞こえてくる。

「はは、最初から神速使ったからなあ。まともに戦ったら負けてたな。しかもあの時よく分かったな。首元掠めたぞ」

「ほっほっほ、感じゃ。それでは約束どおりお主に神鳴流を教えるかのう。ただし」

「口外はしない。約束だ」

「うむ。それでは部屋に案内するぞ」

「ああ、そうだ。後一人金髪の女の子が来るが構わんよな」

「大丈夫じゃ。」

そんなこんなで俺は神鳴流を教えるもらうことになった。

そして、それから三年後。

俺は神鳴流を完璧にマスターして普通は教えてもらえない式之太刀まで教えてもらった。

なんでも「おぬしが生きている限り神鳴流は生き続けることができるからな」だそうだ。

そして禁術なども教えてもらった。

エヴァはというと師範の知り合いのおじさんに大東流合気柔術を習っているらしい。

そして………

「十夜、ちょっとこっちに来てくれんか？」

そういつて師範に連れてこられたのは、ある部屋だった。

その部屋は何十にも鍵が掛かっており、何かが封印されているようだ。

師範はその鍵を一つずつ丁寧に開錠していく。

そして中に入ったのは闇を渦巻かせている剣であった。

「これは妖刀ひなじゃ。そなたに預かってほしくてな」

「何故俺なんだ？他にも居るだろうに」

「この剣は昔、剣士に取り付いて神鳴流を全滅しかけたことがあつ

ての。お主に預かってもらいたい」

「……………断る。」

「……………理由を聞いてもいいかのう？」

「性格には今は、だ。俺がもっと強くなったらとりに来る」

そう、今の俺の腕じゃまだこいつを使いこなせないだろう

「何を言うんじゃ、たった三年で神鳴流の禁術まで完全にマスターした奴が……………門下生が聞いたらないで羨ましがるだろうな」

「はは、そうか「大変です！！師範代！！」……………何事だ？」

「どうしたのじゃ？」

「妖怪が……………リヨウメンスクナノカミの封印がとられました！？それで、外で暴れています！！」

「何じゃと！？これは大変じゃ、十夜行くぞ！！」

俺はひなに眼をやった。

ひなは俺を連れてけと言わんばかりに、怪しく黒光りしている。

「師範、ちよつとひなを借りるぜ」

俺はひなに手を掛け、鞘から引き抜いた。

ひなは俺を支配することなく、早く行こうとばかりに腕を動かす。

「……………なるほど、こいつも相当な戦闘狂の様だ。いいだろう、今だけお前の主となろうひなよ」

俺は外で暴れていると報告のあったリョウメンスクナノカミの元へと走りだした。

そして冒頭へ戻る。

「……………さっさとこのデカブツ倒して、帰るか」

G y a a a a a a a a a a a a a a a a ! !

俺はひなを構え、スクナを睨み付ける。

「行くぞデカブツ！！神鳴流奥義 滅殺斬空斬魔閃！！」

めっせつせんくうせんません

膨大な力が剣先に集まり、エネルギーを放出した。

ドガガガガガガガ

G y a a a a a a a a a a a a a a a a ! !

しかし、スクナにはあまりダメージが届いていない。

「………仕方ないか。門下生には見せるなど言われていたのだがな」

「構わん。やるのじゃ」

どこからか師範がやってきて俺にそう伝えた。

「ああ、言われなくても………神崎流奥義 殺滅天翔
破爛閃！！」
うはらんせん さつめつてんしよ

これは俺が神鳴流を改造して作った技だ。

まさかこんなところで使うとは思わなかったが………

ズガガガガガガガ！！

G y a a a a a a a a a a a a a a a a ! !

スクナに当たった瞬間、スクナの上半身半分が消え去った。

俺はひなを鞘に戻し、師範に返した。

「ひなです。それと早めに封印を。スクナは何度でも蘇るでしょう」

「うむ、すでに封印班が到着してるころじゃろう」

「……………それならまあ良いか。」

「さて、んじゃあ帰りますかな」

「そっじゃな」

俺たちは何事もなかったかのように、帰って行った。

さっきの技で山が一つ消えちゃったけど……………持ち主の人ごめんなさい

【Touya side out】

【Other side】

朝、まだ誰も目覚めてはない時間帯。

そこに四つの影があった。

「世話になったな師範」

「じいい、あの馬鹿師匠にもよろしく言っておけ。一応感謝はしている」

「ここの酒は美味しかったわ。また遊びに来るわね」

上から順に神崎十夜、エヴァンジェリン、チャチャゼロだ。

そしてその前に向かい合うようにして立っているのは

「ふむ、お主も免許皆伝じゃ。たった5年で免許皆伝するやつなど初めて聞いたぞ」

彼 神崎十夜の師匠である。

「俺たちはそろそろ行くな。稽古も怠らない。約束しよう」

「うむ、そうじゃった。お主に渡すものがある」

そういつて後ろに立てかけてあった縦に長い箱を持つ師範。

「何ですかそれは？」

師範はその箱を十夜に向かって投げつける。

「ッ!?!?.....なんですかこれ？」

十夜は飛んできた箱を受け取り、中身を見る。中に入っていたのは一振りの刀だった。

「それは“止水”という刀じゃ。お主の免許皆伝の祝い品じゃ。叱りと神鳴流の魂を刻み付けて来い」

「.....ああ、神鳴流最強の名に恥じないような使い

方をしてやる。それではな

「ああ、達者でな……………よ

最後に言った言葉は誰の耳にも届くことはなかった。

・ 十夜に神鳴流を教えた彼はいつたい何者なのだろうか……………

そして、これから数十年間。十夜の腰には止水があつたと言つ

【Other side out】

第四話 赤き翼 接触

【Touya side】

俺は師範と別れてすぐに、エヴァとも別れた。

正確に言うと逃げてきたのだが………

エヴァがあまりにもしつこいので行き場所は伝えず長距離転移で移動したのだ。

そして俺が転移した場所は魔法世界。

俺は魔法世界で隠れ家を探し、一日を一年の設定にした別荘に入り
武術や剣道の研磨をした。

そして、中では何年たったか忘れたが外では一年たった日に俺は別
荘から出てきた。

その後俺は賞金稼ぎをしながら、情報を集めていた。

俺はSランク以上の任務ばかり受けているうちに結構有名になったらしい。

しかし普段俺は黒い仮面を被っており顔を人に促したことは無い。何故なら、いつの間にか教科書に載るようになった俺の顔は見ただけで恐れられ討伐の対象になるからだ。

そして今、魔法世界では戦争が起こっている。帝国側と連合側に分かれている。

俺はどちらにも所属していない。しかし、応援要請はかなり来る。

しかし、その戦争はあまりにも不思議だった。全てがうまく行き過ぎていた。

そして俺は決心した。あの娘の顔を見てから………黄昏の姫御子　　アスナ・ウesperina・テオタナシア・エンテオ
フュシア、彼女の生きている意味を失ったような表情を見てから俺は、必ずこの戦争を終わらせアスナを助け出して見せると。

最初は何度話しかけても無視されていたが、毎日隠れて通うようになってから少しずつ話を聞いてくれるようになった。

そして先日やっと犯人の正体が分かった。犯人は「完全なる世界」アスナを使って世界を無に返そうとしているらしい。

ふぎけるなって感じた。人を物だとしか思っていない。確かに魔法世界の住人は作られ物かもしれない。それも半分以上の人間が。しかし今生きていることに変わりはないのだ。

俺は仲間を探すべく情報を集めた。

その結果、連合側に着いている「赤き翼」、もう一人は南で最強と言われている放浪の傭兵剣士「ジャック・ラカン」。この一人とグループだ。

俺はまず始めに赤き翼に接触するために行動を開始した。

【Touya side out】

【Nagasaki side】

今日はえーしゅんが日本の料理をご馳走してくれるらしいぜ。

俺腹減ってるから楽しみだな

「んっふっふっこいつが旧世界は日本の鍋料理って奴かぁ……………
じゃあ早速肉を〜」

「あっ！？ナギおまつ……………何肉を先に入れてるんだよー！！」

俺が肉を先に入れていたら何故かえーしゅんに怒られちゃった。

でも……

「トカゲ肉も旨いかのう？」

師匠も入れてるからいいか？

「いいじゃねえか、旨いもんから先だよ　ホラホラ」

ひよひよひ

俺は近くで騒いでるえーしゅんを軽く受け流し肉を入れる。

「フフ……詠春。知っていますよ。日本では貴方のような者を“鍋將軍”と呼び習わすそうですね」

「ナベ・シヨーグン!？」

「っ……強そうじゃな」

くっ……仕方がねえ

「わかったよ……詠春。俺の負けだ。今日からお前が鍋將軍だ。」

「全て任す。好きにするが良い」

師匠もどつやら賛成のようだ。

「んー……嬉しくないなー」

まったく贅沢言いやがって

「おお、何じゃこのソースうまいぞ？」

「ホントだ、うめえっ!？」

まじでうめえぞこれ!!

「これこそが日本の誇るしょうゆだよ」

「あと大根おろしですね」

「……ってかアル。なんでおめえそんなに詳しいんだ？
でもそれより

「これがしょうゆか、スゲエうめえっ!!」

「ナギ、お前は日本に来た時、寿司食ったろ」

「姫子ちゃんにも食わせてやりたいくらいの旨さだな」

「姫子ちゃん……?ああ、オスティアの姫御子のことじゃな?」

「まあ・・・戦が終われば彼女を自由にする機会も掴めるかも・・・です」

「その戦だが・・・どうも不自然に思えてならん」

ん？

「何がだ？」

「何もかもだよ。お前が言い出したんだろつが鳥頭 肉ばっか食うな」

鳥頭とは失礼ッ！？殺気！？

俺はすぐさま立ち上がる。

すると俺たちが居たところに大剣が突き刺さった。

俺はこぼれた肉を空中で全て取る。

「食事中失礼~~~~ッ。俺は放浪の傭兵剣士ジャック・ラカン！！
！いつちよやるうぜッ！！」

「何じゃ？あのバカは」

「帝国のつて訳じゃなさそーだな」

まったく誰だよ

「えいしゅ・・・むお！？」

俺の目線の先には鍋を被ったえーしゅんが!!

「フ……フフフフ……フ……食べ物に粗末にする奴は……」

「どーしたー来ねーのかぁー来ねーならこっちから……いッ」

キーン

「おほ」

「斬る!!」

俺が気づいたときにはすでに詠春はアイツの剣を斬りおとしていた。

そして再び切りかかったとき

キーン

「……………この勝負……預らせてくれないか？」

そこには黒い仮面を被った男（声から）が居た

【N a g g i s i d e o u t】

【Touya side】

ちょうど上を通りかかったらジャック・ラカンと赤き翼が交戦しているのが見えた。

俺はちょうどいいタイミングだと思い、その中間点に入った。

キーン

「……………この勝負……………預らせてくれないか？」

「貴様何者!？」

「……………お前、今話題になつてる最強の賞金稼ぎか？」

「……………ああ。どけサムライマスター」

「くっ、問答無用!! 神鳴流斬岩剣!!」

「ちっ 神鳴流斬岩剣」

ギィィィィギン

俺の剣は青山詠春の剣を簡単に打ち破った。

俺は青山詠春の首に止水を突きつける。

「お前じゃ俺に勝てないよ。」

俺は身に着けていた仮面を取る。

「貴方は！！最凶最悪の悪の魔法使いにして神鳴流を三年で取得しその上、我流の技も作り上げ京都を救った……………伝説の剣士……………神崎……………十夜……………」

「……………あのクソジジ……………次あつたらぶつ殺す。まあ、いかにも俺が神崎十夜。俺はお前らに話があつてきた。そこに居るジャック・ラカンもいいよな？」

「ハッ！？あ、ああいぜ」

……………怪しいな

「まあいい。俺はこの戦争を止めるためにお前らに協力を頼みに来た」

「……………ナギ。この方を赤き翼に入れてはくれぬか？」

「何だ？詠春、知り合いか？」

「いや、そういうわけではないのだがこの方は地球……………いや宇宙一強いお方もしれん」

そりゃ嬉しいね。

「俺は別に構わんけど……」

「ワシも構わん」

「私もです」

「よし、十夜、ラカン今日からてめえらも赤き翼の一員だ。俺について来い!!」

「俺もかよ!？」

「ところで詠春。聞きたいことがあるんだが」

「なんでしょうか？神崎様」

「そんなかしこまるな」

「つてか背中がむず痒くなるから止める。」

「ひなは今何処に？」

「……ひなは今、浦島ひなたさんという方がひなた荘というところで預かってくれています」

「ひなた!？あいつか……」

「知っているのか？」

「ああ、あいつ前に魔法世界に紛れ込んできやがったんだ。世界を旅しているうちにいつの間にか魔法世界に来ちまったんだってよ。」

まあいいか。後で様子を見に行くか」

こうして俺は赤き翼の一員となった。

これから終りへと進む戦争には一体何があるのか。

俺はまだ知らない

【T o u y a s i d e o u t】

第五話 いきなりすぎね!? 最終決戦

【Touya side】

あれから色々あった。

グレートブリッチを奪還したり、ガトウ・カグラ・ヴァンテンバ
グと高畑・T・タカミチ、クルト・ゲートルが仲間になったり。

そうそう、俺にも二つ名がついたんだぜ。

『スター仮面の黒騎士』や『ダークエンペラー闇の帝王』、『神を支配する者』、『パーフェクトマ絶対強
者』そして『ダークネス暗黒』この5つだ。

それにしても『神を支配する者』か……そのままだなおい

それに『^{ダイクネス}暗闇』って……………

まあ、今まで起こったのはそれくらいだ。

そして今、俺たちはガトウに呼ばれて本国首都に来ている。

「何だよガトウ。わざわざ本国首都まで呼び出してさ」

「あつてほしい人が居る協力者だ」

「協力者？」

「そつだ」

……………協力者？はて誰のことだろ……………ツ！？なるほどな。この魔力……………

「マクギル元老院！！」

「いや、わしちゃう。主賓はあの方じゃ。ウエスペルタイア王国……………アリカ女王」

コツコツコツ

「ん、いい女。アリカツつたけか？この後酒でもどうだ？」

「なっ！？ラカン！！」

詠春よ……………別にいいのでは？アリカだし……………

「気安く話しかけるな下衆が」

「あゝあ、おつかねえ。ガトウ、俺は帰るぞ」

俺は歩き出し、アリカの横を通ろうとする。

すると、腕を急に掴まれた。

「妾に挨拶もなしか、十夜」

「うっせー、俺はお前と馴れ合う気なんざはなから無いよ。そんな危険は冒したくないんでな」

俺がそういうと、アリカはすぐに俺の腕を放してくれた。

「たく、しゃあねえな」

「じゃあなアリカ（今夜12時、また来てやる）」

「……………ああ……………分かった」

A M O : 0 0

「約束通り来てやったぞ？」

「……………寂しかったのだぞ？あれだけ妾をからかって置きながら……………勝手にどこかに行きおって」

寂しい……………ねえ……………まてよ、

「お前、Mか？」

「何故そうなる!？」

違うのか……………

俺が意識を思考の海に落としそうになった瞬間、唇に柔らかいものが触れた。

チュッ

それはアリカの唇だった。

「妾は今でもお主の事を思っているのだからな!！」

アリカはそう投げ捨てて、どこかへ歩いて行ってしまった。

残された俺は

「もう少し自分を大切にしろよ、アリカ。」

自分の影へと沈んでいった。

その後も、俺はよくアリカに振り回され・・・・・・・・・・・・・・・・
・そうになったが、ナギに任せて逃亡を続けていた。

「はあああああ!!」

「てやつ!!」

キィィィン

俺は今、詠春と剣の稽古をしている。

「行きます、神鳴流極大雷鳴剣!!」

「のわっ!? 神崎流斬殺閃!!」

ギイイイイン ドガン

打ち勝ったのは俺の剣だった

「参りました。流石だな、歴代最強と言われただけのことはある」

「まあな。これでも鍛錬は怠ってないからな」

ズズンッ

「な、何だ!？」

「町のほうだな………ナギたちか。ほっておいても大丈夫か」

「そうだな。でも後で灸をそえてやらねばクツクツク」

こわいっす詠春さん

ナギが詠春にお叱りを受けたが、それと同時に証拠を見つけてきた
そうだ。

それで今日はガトウ、ナギ、ラカンがマクギルに会いに行っている
そうだ。

まったく、俺も連れてけよな。

そして次の日になったら俺らはいつの間にか反逆者。

まったく、あいつらは何をしたんだか？

まあ、楽しくていいけどねっと、当初の目的を忘れるところだった。

そして俺たちは秘密裏に会っていたアリカと帝国の皇女が捕まって
夜の迷宮につかまっていると言っことなので助けるために計画を練
っていた。

そして

ズドン ガラガラ

「よお来たぜ姫さん」

「遅いぞ我が騎士」

見事、助け出すことに成功したのだ……でも騎士って何よ？どちらかと言えばナギは魔法使いだろうに

「何だ、これが噂の『赤き翼』の秘密基地か！どんな所かと思えば……掘立小屋ではないか！」

「俺ら逃亡者に何期待してんだよこのジャリはよ」

「何だラカン、このちっこいのが帝国の皇女か？」

俺は言い争いをしているラカンと幼女（笑）の方へ向かった。

「何だ貴様ら無礼であるっ」

「へっへーん、生憎へラスの皇族にや、貸しはあっても借りはないんでね」

「何い？貴様何者だ」

はあ、めんどくせえ

「おい、ラカンそこら辺にしておけ。俺は『暗闇』。別名神崎十夜、悪の魔法使いだ」

「俺は『千の刃』ジャック・ラカン。」

「なっ！？お前らが『何こいつ無敵すぎてノーコメント』と『つかあのおっさん剣が刺さんねーんだけどマジで』だと言っのか！？」

「ちよまで、何だそれ初耳だぞ！！」

「俺もそんなの初めて聞いたぞ！！」

まあいいか

俺は皇女を肩車する。

………あっ

「皇女、お前の名前は？」

「むっ、妾の名前を知らんとは無礼なやつめ。しっかりと覚えておけ我が名はテオドラ・バシレイア・ヘラス・デ・ヴェスペリスジミアじゃ」

「ああ、テオね。よし覚えた。さて行きますか」

俺たちはアリカと話しているナギたちの下へと向かった

「じゃが……主と主の『赤き翼』は無敵なのじゃろ？世界全てが敵　　良いではないか。こちらの兵はたった8人。だが最強の8人じゃ。ならば我らが世界を救おう。我が騎士ナギよ我が盾となり剣となれ」

「やれやれ相変わらず、おっかねえ姫さんだぜ。いいぜ、俺の杖と翼あんたに預けよう」

ナギは方膝をつき、顔を下げアリカはナギの肩に剣　　『姫』を置く。

「ところで主らは誰が一番強いんじゃ？」

「そりゃなあ」

「ああ」

「「「「「十夜だろ（十夜さんでしょ）」「「「「「

「ナギじゃね？つて俺かよ！？」

「だつてなあ」

「なあ」

何だその意味深な笑顔は！！

「お主はナギやラカン以上のチートバグ……いや、改造データじゃからな」

「そんな酷い！？」

俺はどうやらバグでもチートでもなく改造データそのものらしい

【R a k a n s i d e】

長かった戦いも遂に終わりに近づいた。

俺の感覚からして、映画なら三部作。単行本なら十四巻分は行くであろう死闘の末、俺たちは遂にあいつら『完全なる世界』の本拠地を突き止めた。

その本拠地はなんと王都オスティアの空中王宮最奥部『墓守り人の宮殿』だった。

ぶつちやけラストダンジョンだ。

「不気味なくらい静かだな奴ら」

「なめてんだろ。悪の組織なんてそんなもんだ」

俺は気になったので十夜のほうを見してみる。

十夜はいつもどおり落ち着いた雰囲気で剣を眺めている。

まったくなんでそんなに余裕なんだか？

俺なんか体の疼きが止まりやしねえ。

【Rakann side out】

【Touya side】

「ナギ殿暗黒殿、帝国・連合アリアドネー混成部隊、準備完了しました」

「おう、あんたらが外の自動人形や召喚魔を抑えてくれりゃ俺たちが本丸に突入できる。頼んだぜ」

さて、俺も用意をしますかな？

「ハツ………それで、あの………ナギ殿暗黒殿」

「ん？」

「あん？」

「ササ、サインをお願いできないでしょうか。」

「おお？ああ、良いぜそれくらい」

「そ、尊敬しておりました」

まったく

「俺は尊敬されるような人物ではないんだがな」

俺はナギに渡された色紙に名前を書く
神崎十夜と………

「神崎………十夜さん？どこかで聞いたような………」

「そうだろうな」

俺は仮面を取り、顔を露にする。

「えっ……」

「驚いたか？俺は悪の魔法使いさ」

「い、いえ少しは驚きましたが噂とはまったく違う人だな」と

俺たちが話していると

「おい、十夜早くしろ。行くぞ」

ナギから声が掛かった。

「ああ、最初は俺がでつかいのぶっ放すぜ」

俺は魔力を解放させる。

「リク・ラク・ラック・ライラック 来たれ全土の神よ 全てを生み出し 全てを破壊へ導くもの この場を全ての力を持って終結させよ 神の裁き！！」

ズガガガガガガン！！！！！！

自動人形や召喚魔などを全て巻き込み、尚衰えを知らない。

時には雷に時には水に時には炎となり全てを破壊していく。

さあ、待っている今助け出してやる！！

【Touya side out】

【Serasu side】

すい

この言葉でしか言い表せないような光景が目の前に広がっている。

衰えを知らなかった攻撃はやがて収まった。

敵の数はいつの間にか五分の一にまで減っており、他のアリアドネ
ー騎士団も呆然としている。

十夜殿たちはいつの間にか墓守り人の宮殿へと向かったらしい。

私はいち早く我に返り、皆に指示を出す。

「十夜殿が敵の数を減らしてくれた!!!皆のもの続け!!!!!!」

すると皆も我に返ったようで

『おおおおおおお！！！！！！』

一斉に飛び出していく

【S e r a s u s i d e o u t】

【T o u y a s i d e】

俺らは俺の攻撃が止む前に、墓守り人の宮殿へと進入した。

そこに待ち受けていたのは白髪のアーウェルンクスだった。

「やあ「千の呪文の男」「暗闇」また会ったね。これで何回目だい？僕達もこの半年で君達に随分、数を減らされてしまったよ。この辺りでケリにしよう」

俺たちは一斉に飛び出していく。

俺とナギは一直線にアーウェルンクスへと飛んでいく。

すると不意に殺気を感じ、止水を構えると斬撃が飛んできた。

俺は止水で受け止める。

ギユイイイイイン

「つと……久しぶりだな。師範」

「のう十夜。今からでも此方に付かんかのう？」

師範は俺の眼をまっすぐ見て言ってくる。

「悪いな。俺は必ず助けるって約束しちまったんだよ。だから、たとえ師範であるアンタにだって刃を向ける。行くぞ師範……いや神鳴流初代当主。不老不死にして最強の剣士、神谷雷鳴……！！」

俺は止水を逆手に持ち替え突き進む。

「なんと……！そこまで知っておったか！？」

「俺を誰だと思ってやがる……！最強無敵の神崎十夜様だぞ……！はああああああああ……！！……！！見せてやる俺の最終奥義……！！」

「来るが良い……！！」

「神崎流最終奥義神雷帝鳴剣……！！」

ザザザザザザザザ

「くっ！！神鳴流決戦奥義 真・雷鳴剣！！！！」

ズシャシャシャシャ

地面が削れ、砂埃が巻き上がる。

砂埃が晴れるとそこにはボロボロになりながらもしっかりと自分の足で立っている師範が居た。

「ちっ、最終奥義を破られるとはな……………」

「いや、おぬしの攻撃は届いておったよ。ワシの……………負けじゃ……………」

師範はそういつて後ろへ倒れこんだ。

俺は静かに眼を閉じ心の中で合掌した。

「見事……………理不尽なまでの強さだ……………」

ちよつどナギたちも終わったらしい

「黄昏の姫御子は……………何処だ？消える前に吐け」

「フ……………まさか君はいまだに僕が全ての黒幕だと思っっているのかい？」

「なん．．．だと？」

瞬間、高威力の魔力反応を感じ取った。

目的はナギたちの抹殺

「ちつここからじゃ間に逢わねえ！！ナギ！！よける！！！！！！！！」

俺は腹の奥から大声で叫んだ。

しかし、そんな俺の努力もむなしくナギはアーウェルンクス諸共、攻撃を受けてしまった。

「ガハツ！！」

「ナ．．．ナギイツ！！」

「誰だ！？」

皆で攻撃が飛んできたほうを向く。

するとそこには全身黒ずくめの物．．．．．がいた。

「！？」

「いかんツ！最強防護！！」

皆、危険を察知したのか防御体制を取る。

俺も神力、魔力、王家の魔力を使い世界最強の盾を作り出す。

ドッ！！パキイイン！！ガガガガガ！！

しかし、無残なことにジャックは腕が両方吹き飛び、他の皆も血を流して倒れている。

今、立っているのは俺のみ。

ゼクトは比較的、傷が浅いようだ。

「ぐっ……バカな」

「まさか……あれは……」

スッ

敵の親玉は奥に進む。

「待てコラてめえっ！！！」

「任せなジャック」

そういったのはナギだった。

傷が酷いのに無理して立ち上がるとは………流石と言
うべきか。

「い……いけませんナギ！！その身体では」

「アルお前の残りの魔力全部で俺の傷を治せ」

「し、しかしそんな無茶な治癒ではッ」

「30分持てば十分だ」

「ですがッ……」

「ふふ、よからうワシも行くぞナギ」

「おもしれえ、俺も行くぞ。ちよっくらお仕置きをしなくちゃなあ」

「お師匠……十夜……」

「ゼクト！！十夜！！たった三人では無理です」

俺はそんなアルの言葉を無視して歩き出す。

「ここで奴を止められなければ世界が無に返すのじゃ。無理でも行くしかないからッ」

ゼクトも続いて歩き出す。

「ナギ待て！！奴はマズイ、奴は別物だ。死ぬぞッ！体勢を立て直してだな……」

「バーカ。んなコトしてたら間にあわねえよ。らしくねえなジャック。俺は無敵の千の呪文の男だぜ？俺は勝つ！！任せておけ！！」

ナギは瞬動を使い奥へと進む。

「十夜！！貴方ともあるう方が敵の力量を見間違えたのですか！？」

俺に話しかけてきたのは詠春だった。

「……………詠春。俺はあいつを見たとき思ったよ。仲間の
尻拭いは仲間でするもんだなとな」

俺も瞬動を使いナギの隣へと赴く。

墓守り人の宮殿最奥部

「くつくつく、来たか神崎十夜」

俺はしっかりと敵の親玉

始まりの魔法使いを見る。

「ああ、でも不思議だよな……俺が完璧に封印したつもりだったはずだが？」

「ああ、そうだな。だが、何の因果か無の世界へとたどり着いてな……世界を作り出し、この世界との融合に成功させたのだよ。そして世界の真髄について理解したのだよ。私はすでに神などではないのだよ」

「なんだよ……どういうことだよ十夜……意味が分からないぞ」

俺はナギのほうを見る。

「ああ、こいつは俺がかなり前に封印して完全消滅させたはずの破壊神シヴァだ。まあ、こいつが諸悪の根源って事だよ」

俺は手に持っていた止水をしまう。

「つまりこやつを倒せば全てが終わるのじゃな？」

「ああ。行くぞナギ!!」

俺は右手に神力、左手に魔力、右足に気、左足に妖力を集める。

「合成、無限力法！！究極の力」
アルティメット・パワー

俺の身体から莫大な力が漏れ出す。

「お前が強くなって居るのは見れば分かる。だが俺たちに勝てるかな？ナギ、俺が時間を稼ぐ！！お前は魔力を最大限に込めたパンチでアイツを粉碎しろ！！」

「おう！！」

俺は走り出す。

「テヤツ！！」

ドン！！バキッ！！ドガガガガ！！

目にも留まらぬ速さで攻防が続く。

「中々やるな、だがそれでは俺に勝てんぞ！！」

「分かっている！！」

シヴァが何かを呟いた後、シヴァの後ろにいくつも魔方陣が現れる。

そしてその中からいくつもの光線が飛んでくる。

ズギヤギヤギヤギヤ！！

「ハアアアアア！！」

「クツ！！チエストオオオオオ」

俺は光線を自分の力を放出し続け、全て弾き返す。

「どけ！！十夜！！」

どうやらナギの準備も終わったようだ。

俺はナギと入れ替わるように後ろへ下がる。

そして

ドッ！！

ナギの拳がシヴァの顔に入り、シヴァの顔が吹き飛んだ。

「フフ・・・フツッ！！ハハハハハハ！！私を倒すか人間、それも良かるっツ！！私を倒し英雄となれ！！羊達の慰めともなるっ」

シヴァはそういいながらまたしても魔法陣を増やしてきた。

「しぶてえ奴だぜ」

「まっただ」

「だが、ゆめ忘れるな。全てを満たす解はない。いずれ彼等にも絶望の帳が下りる」

ドギユウウウウン

シヴァは俺等に向かって光線を放ってくる。

「貴様も例外ではない!!」

ドンドンドンドンドンド

「ケツ、グダグダうるせえええ!!」

ナギはシヴァの身体に拳で殴りつけラッシュをする。

俺もそれに参加する。

「たとえ明日が滅ぶと知っていても、あきらめないのが人間だ。まあお前には分からんだろうがな」

ドンドン!!

「くつくつく貴様等もいずれ私の語る「永遠」「こそが」「全ての」「魂」を救い得る唯一の次善解だと知るだろう」

「人間を……なめんじゃねえええ!!!!!!!!!!」

ドガガガガガン

ナギは最後の力を振り絞ってシヴァを殴りつけた。シヴァは遙か遠くへ吹き飛んでいった。

「ふう、やっと終わったか」

ヘナヘナ

ナギは地面に倒れこんでしまった。

すると、光が溢れ出す。

「なっ!?まさか!?!あいつを倒すことが世界を無に返す術式を完成させる鍵だったと言っのか!?!」

(アル!?!聞こえるか!?!世界を無に返す術式が完成した!?!俺は何とか抑えてやる!?!そのうちに住民の避難を!?!できるだけ早く!?!)

(えっ!?はい!?!わ、わかりまし(案ずるな!?!妾が何とかしよう!?!自分ひとりで死のうと思うな愚か者が!?!)あ、アリカ様)

(.....わかった。頼むぜアリカ)

(うむ)

そうアリカが行った瞬間、ここを包み込むように術式が発動した。

反転封印術式が発動されたのだ。

「.....ゼクトは何処だ?」

「えっ?お師匠なら.....いない.....」

“武の英雄に未来を造ることはできぬ。貴様には結局何も変えられまい。.....人間は度し難い。英雄よ、貴様も我が2600年

の絶望を知れ。さらばだ……”

「……ぬっ……くっ……お師匠……師匠……
……師匠オオオオオオ……ッ!!!!!!!!!!!!!!」

そういつてゼクト……いやフェリウスはどこかへと消えてしま
った。

【Touya side out】

第六話 オスティア崩壊

【Touya side】

あの後、式典などが在ったらしいがばっくれさせてもらった。

そして俺は今、オスティアの真ん中に居る。

アリカが術式を使ったために、もうじきここは崩れ落ちるらしい。

俺はそれを全人口が非難するまで持たせるために、ここに居る。

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ！！！！

「始まったか……………」

俺は意識を集中させる。

そして、ナギやアリカの位置を把握する。

「……………」

『そなた達には世話になったな。さらばじゃ』

どうやら繋がったようだ。

俺はアリカが乗っている船とナギたちが乗っている船に干渉をし、通話を可能にしたのだ。

『陛下も御武運を』

「何お前らだけで話を進めているんだ？」

『なっ!?!この声は十夜か!?!』

向こうは大騒ぎだろう。なんせ俺の姿は何処にも見えないのだから。

『十夜てめえなんで式典ばっ「アリカ・・・何あきらめてんだ?こりゃ戻ったら尻叩きの刑だな」っておい!!聞けよ』

『・・・今妾にできるのは民を救う事だけじゃ・・・それ以外は何も出来ん。それに妾はもう戻らんかも知れ「尻叩き100回な。さて、ここで皆さんに問題です。今から俺がやることを当ててみてください。』なっ!?!十夜!!お主今一体何処に!?!』

「ヒントは・・・俺はオスティアを中心に居ます」

『なっ!?!』

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ!!

俺は神力を完全に開放する。

ドゴンー！

俺の居るところにはクレーターがいくつも出来る。

「さてと……我が真名が命じる。この空中都市をいま一度、空へ羽ばたかせるー！」

ゴゴゴゴゴゴ……

俺がそう叫ぶと、いきなりオスティアの揺れが収まる。

『十夜！お前……まさか』

くっ……きついな。神力が一気に持ってかれちゃった……慣れないことはしないもんだな。

「うるせえ……お前、は……早く住人の……非難を」

『十夜……うむ、妾に任せろー！』

……チツ、もって後、半日か……

3時間後・・・

クツ・・・思った以上につらいな・・・これでは持つかどうか・・・

『十夜！！住民の避難は終わった！！早くおぬしも非難を』

やっとか・・・

クツ・・・もう無理か・・・

「次元・・・転移・・・」

ヴォワン

ここは無の世界・・・何も無い・・・無の世界

そこに俺は居た

「流石に・・・きついか・・・」

このままだと完全に回復するのは十数年先か・・・

「我が真名において命ずる……複製せしめよ我が分身」

すると、俺のすぐ側に俺にとてもよく似た奴らが十人現れた。

「俺は、深い眠りに着く。……俺が居ない間世界を守ってくれ」

『御意に』

俺よりも力は劣るものの、一体一体がナギ以上の強さを持っている。

複製は世界のあちらこちらへと散らばっていった。

さて……俺も……寝るとするかな……

ガキイン

俺の体は凍りつき、深い眠りについた……

【Touya side out】

【Bunshins side】

我らは本体の分身

本体の命に従い、分身と感ずかれぬようにこの世を過ごそう。

旧世界へ三体、魔法世界へ七体が向かった。

さて、行くとするかな

【Bunshins side out】

【Other side】

アステティア崩壊から、数日後、アリカは父親殺しの罪で監獄に入れ

られた。

死刑は二年後。

その間ナギたちは世界を回って、人々を助けていた。

だがそれは十夜の分身たちも同じことだった。

旧世界の分身たちは連絡のあったもののトコロへ行き、魔法世界の分身たちは賞金稼ぎや人助け、情報集めなどをしている。

神崎十夜、いやまだその名は広まってすらいない。

彼、『暗黒』は死んだこととされているが、このところではそのよ
うな噂は消えかかっている。

そして彼は、赤き翼の前へ再び姿を現した。

「よう、ナギ」

「と、十夜!?!」

【Other side out】

第七話 救出

【Touya side】

「で、この一年間何処で何をしてたんだ？」

俺はただ今尋問をされている。

ナギたちの目の前に、姿を現したのはいいが拘束されてしまったのである。

本当のことを言ってもいいのだが、そんなことをしたら本体の計画が台無しになってしまう。

本体は体は眠っていても能は起きている。

なので我々分身体に様々な指令を出してくる、いわば司令塔のようなものだ。

「ハハハ、アスナの情報集めだよ。さて、俺はそんなことよりナギ、お前に尋ねたいことがある」

「……………なんだ？」

ナギもある程度は予想をしているのだろう。

「アリカのことどうするんだ？」

「……………」

「お前に考えがあることは分かっている。だから別にどうこう言っつもりはねえ。だけど……………どうにか後悔しないようにやれ」

俺はそれだけ行って、自分にあてがわれた部屋へと言った。

俺がナギの目の前に再び姿を現してから約一年。

遂に今日は、アリカが処刑される日。

先ほどナギを見たが、どうやらナギの覚悟は決まったらしい。

俺は上空でその様子を見ている。

「魔獣うごめくケロベロス溪谷。魔法を一切使えぬ、その谷底は魔法使いにとってまさに「死の谷」。古き残虐な処刑法ですが……この残酷さをもってようやく、魔法世界全土の民も溜飲を下げることとなりましょう」

「ぺらぺらぺらぺらと……まったく、アリカが何をしたって言うんだ」

俺は一人呟いた、耳と目を魔法で強化しているためよく状況が把握できる。

「歩け!!」

「触れるな下郎。言われずとも歩く」

おお、おお、かっこいいねえ

さて、俺も行きますかな？

シュー

俺は羽根を広げて、アリカが落ちる前にケロベロス溪谷へと突っ込む。

しかし、俺の羽は消えない。

何故なら、この羽は神力で出来ているからだ。

といっても1分しか神力は使えんけどね。

ギヤアアアアアアアア！！！！

「うるせえ」

ドン！！ドゴツ！！バキッ！！

俺は魔獣を殴って殴って殴りまくる。

ドン

「大丈夫か？十夜」

「十夜！？何故貴様まで！！」

「大丈夫だ問題ない。さっさと姫様を連れてけ王子様」

ドン！！バキッ！！グシャッ！！

「ああ！！」

ナギはアリカを連れて走り出し、渓谷を抜ける。

「さて、ナギも脱出したみたいだし俺も……………指令か」

“アスナの情報を探するため、1、2、3は合流し情報収集せよ”

「了解つと」

俺は静かにその場を立去った。

【Touya side out】

【Naggi side】

あの後、結局十夜は帰ってこなかった。

そして何時の間にか死んだという噂がさらに広まっていた。

しかし、不思議なことに十夜の名前は『暗黒』でしか広まっていなかった。

十夜が裏で何かしているんだろう。

そして時が流れるのは早いもので1993年ついに俺はアスナを助け出すため、アスナの封印されている場所へ向かうことになった。

これまでにエヴァンジェリンとかいう奴が十夜のことを聴くためとか言ってる俺についてきたことがあったが、そいつは麻帆良に放り込んでおいた。

バリーイーン!!

俺がアスナの居るであろう場所まで行く途中、何かが割れる音がした。

「何の音だ？ツまさか!!」

俺は足に極限まで魔力を付加させ、思いっきり走った。

ドン!!

そして俺は扉を蹴破った。

「遅かったな、英雄」

【N a g i s s i d e o u t】

【Touya side】

俺はアスナの情報を突き止め、封印を解くことに成功した。

ドン！！

いきなり扉が蹴破られた。

そちらのほうを見ると懐かしい顔があった。

「遅かったな、英雄」

俺はそう言い放った。

「とう…….や…….?」

「十夜…….助けてくれてありがとう」

「いんや、約束しただろう?」

俺はすぐ側で寄り添ってくるアスナの頭を撫でながら言う。

するとアスナは気持ち良さそうに目を細める。

「さてと、俺はそろそろ行くがお前は どうする?英雄」

「ああ、俺も行く。ってか十夜てめえ戻って来いよな」

「ああ、悪いな。俺も色々やることがあったんでなナギ」

「そっか、そりゃしゃーないな。にしても十夜変わってねえな・・・
・・・って不老だからかわらねえか」

「まあな」

俺はナギと一緒に詠春達が居る港町まで転移した。

【T o u y a s i d e o u t】

第七話 救出（後書き）

ラブひな編はネギま編がひと段落着いてから、割り込ませる予定です。

第八話 アスナとガトウとタカミチと

【Other side】

ナギと十夜たち一行は、今港町に居た。

十夜は正体がばれないように30代ぐらいの老けた親父になっている。

しかし、顔立ちは変わらず30代になっても整った顔立ちをしている。

「いいか、左腕に魔力 右腕に気……………」

「左腕に魔力……………」

タカミチは魔法が使えない性質なので、今ガトウに咸卦法を教わっているのだ。

「右手に……………」

バチン！！

「うわっ!?!?」

どうやら失敗したようだ

「ダメだ、ダメだ。いいかタカミチ自分を無にする。そんな調子じゃ五年はかかるぞ」

「ハ、ハイ」

「・・・・・・・・・・」

そこに

「よお 姫様は今日も元気か？」

ナギ、十夜、詠春、アルが現れた。

「あつ、ナギさん。皆さんおはようございます!」

タカミチは十夜たちに頭を下げる。

「バーカ、タカミチナギさんはやめろっつってんだろ。ナギでいっつての」

「飯にすっか」

十夜たちはタカミチたちのほうへと歩みを進める。

「タカミチー何やってたんだ？」

そう問うたのは十夜だった。

「あ、いえっガトウさんに少し修行を……」

「左手に魔力……右手に気……」

「おおっ!?!……………」

「咸卦法かぁ」

なんとアスナは一度やっただけで咸卦法を成功させてしまったのだ。

「ハツハツハ抜かれたなタカミチ君」

「スゲースゲーさすが姫様」

「ああ、確かに一度見ただけで成功させるのはすごいよな、俺は出来たけど」

「お前と比べたら終わりだろうが」

ハツハツハ冗談だよと笑みをこぼしながら言う十夜

「これなら将来、良い魔法使いの従者になれますね」

アルがそういうとガトウがその話に乗っかる。

「ハハハ、譲ちゃんおじさんのパートナーになるかい？」

しかしアスナはフルフルと首を横に振る。

「ん？」

「……………十夜でいい」

十夜たちはその言葉にそれぞれ反応をする。

「プツ……………」

「おっ……………」

「げっ……………」

上からアル、十夜、ガトウだ。

「ククク……………」

「いーね、いーね。アスナがもう少し大きくなってからな」

「……………いつ？」

「なんであんだはそんなに全方位にモテモテなんだー！！」

「やっぱりおっさんはダメかーッ」

「アスナちゃん、タバコキライなんですよ師匠」

皆はそれぞれに言っ。

とても愉快的なメンバーだ。

【Other side out】

【Gatou side】

港町での出来事から数カ月後

ナギは公式では死んだ事となり、十夜もいつの間にか俺の前から姿を消していた。

そしてアルはナギの遺言だとかでどこかの学校へ行き、詠春は譲ちゃんを見て、娘に会いたい！！とかいって旧世界へ帰っちまった。

それで俺はタカミチと譲ちゃんと一緒に旅をした。

だが、この回想も長くは続かんだろう。

ここまで来る途中、魔物に襲われちまった。

MMの元老院の仕業だとは思うがな……………

「よおタカミチ、火いくれねえか。最後の一服……………って奴だぜ。」

カチツ

タカミチは俺の啞えタバコに何も言わず火をつけてくれる。

フーーーー

「あーーーーうめえ。さあ行けや。ここは俺が何とかしとく」

ふと譲ちゃんの顔を見た。

その瞳には涙が浮かんでいた。

「……………何だよ譲ちゃん。泣いてんのかい？涙見せるのは……………十夜の前以外で初めてじゃねえか？……………へへ、嬉しいねえ」

「師匠……………」

タカミチの顔も今にも泣き出しそうな顔だ。

本当、俺は幸せモンだな。

「タカミチ……………記憶のコトだけだよ。俺のトコだけ念入りに消し……………といってくれねえか？」

「な……何言ってるんスカ師匠!!」

「これからの譲ちゃんには必要ないモンだ」

俺は譲ちゃんの顔を見る。

「やだ……十夜も居なくなつて……ナギも居なくなつて……おじさんまで……」

きゅ

譲ちゃんは俺の手を静かに握る。

「やだ……うっ……」

俺はそつと譲ちゃんの頭を撫でてやる。

「幸せになりな譲ちゃん。あんたにはその権利がある」

ぎゅっ……

「やだ……。ダメ、ガトーさん!!!いなくなつちやだ……
……!!」

「……タカミチ……連れてけ」

タカミチは譲ちゃんの手を取る。

「……師匠……ありがとうございます」

タカミチはそれだけ言って、譲ちゃんの手を引いて歩いていった。

そして、タカミチたちが見えなくなり少し下ところで魔物が追いついてきた。

「さて、俺も覚悟をk「ダメ、ガトーさん!!!いなくなっちゃやだ……!!か……あんな表情もできるようになったんだな、アスナ。」あんたは……」

そこには小さな子供が居た。

そう、今の譲ちゃんと同じくらいの。

「さて、はじめるか。リク・ラク・ラック・ライラック 契約により我に従え、神の王 来れ、全てを無に返す滅撃。無限の高鳴りよ全てを喰らい尽くせ』完全消去』」

……

魔物たちは音もなく消滅していく。

「す、すごい……」

小さな子供は俺に近づいてきて、魔法を唱える。

「癒せ この者の命の源 オールキュア・ライト」

すると、俺の怪我が一瞬で治っていく。

「練金!!」

これだけでもびっくりなのに少年はさっきまでの瀕死状態の俺と同じ姿をした人形を作り出した。

「き、君は一体……」

「もう忘れたか？ガトウ・カグラ・ヴァンテンバーグ。戦友の名前を」

「まさか……十夜か？」

「ああ、さてお前には俺の作るグループ に入ってもらおう。」

「その は何のために作るんだ？」

少年 十夜は黙り、そして長い沈黙の後、口を開いた。

「 のためだ」

十夜はニコリとやさしい笑みを浮かべながら答えた。

「……俺も入れさせてもらおう“黒き翼”に」

【Gatou side out】

第九話 麻帆良学園

【Touya side】

MMの工作員に紛れ込んでいる分身の一人から本体を通して連絡が来た。

どうやら、ナギの息子の村を襲っているらしい。

俺はすぐに転移して、ナギの息子の村まで行く。

「どんなことがあってもお前だけは守る。それが死んだあのバカへのワシの誓いなんじゃ。誰か残った治癒術者を探せ……石化を止めねばお姉ちゃんも危ないぞい……」

「おじい……ちゃん……」

ちっ、遅かったか

「我が真名において命じる。このものの石化を止め、直せ」

シュワーン

「なっ！？石化が……解けていく……」

「起きてお姉ちゃん。お姉ちゃん……ねえおじいちゃんを治したみたいにおねえちゃんも直してよ!!!」

ナギの息子は俺にすがりよってくる。

ゴオオ

「来たか」

「すまない……来るのが遅すぎた……」

フードを深く被ったナギが俺らの目の前に現れる

ナギの息子は星のステッキをナギに向ける

「……お前……そうか……お前が……ネギか……
……お姉ちゃんを……守っているつもりか？」

「まさか……」

おじさんはナギを見て、驚きの声を上げる。

「大きくなったな……お、そうだ。お前に……この杖をやる
う。俺の形見だ」

「……お、父さん……?あう」

「八八八重すぎたか」

ナギは俺らのほうを向く

「久しぶりだなナギ」

「お前もな。死んだかと思ってたぜ」

「まさかあ」

「それとスタンじいさん……ネギを頼む」

「うむ、任しておけ」

「……もう時間がない」

「え？」

ナギは倒れている女の子を見ながら言う。

「ネカネは大丈夫だ。石化は止めておいた。後はその優しそうなお兄さんに治してもらえ」

ナギがお兄さんと言った事で気がついたかもしれないだろうが俺は今、大戦時の姿に黒いローブを深く被った姿だ。

「悪いな。お前には何もしてやれなくて」

ナギの体が浮かび上がる

「……お父さん？お父さん!!」

「こんなこと言えた義理じゃねえが……元気に育て幸せにな！」

「お父さ……お父……さん……お父さあ——ん！……！」

俺はネカネと呼ばれた少女の足を直し、早急にその場を立去った。

【Touya side out】

【Touya side】

能が体の目覚めを促してくる。

早いもので、外では約二十年が過ぎようとしていた。

こう考えると長い間眠っていたんだなとしみじみ思ふ。

さて、そろそろ起きなければな。

分身たちに指示を出していたとはいえ、世界のことを良くは知らないからな。

バリイイイン

俺を包み込んでいた氷が砕け散る。

『我ら本体の呼びかけに応じ参上した』

「ご苦労、分身たち。戻っていいぞ」

『御意に』

分身たちは次々に体へと取り組まれていく。

そのたびに、今まで以上に力が漲ってきて知識が増える。

「そうか、麻帆良学園にネギが来るのか……」

分身たちの中の一人に麻帆良学園から依頼が来ていた。

依頼の内容はネギ・スプリングフィールドの補佐として生徒になるということだ。

日にちは明日。

今から転移で行けば間に合う時間帯だ。

それでは行くのでしょうか。

【Touya side out】

【Akira side】

大変なことになった。

私は今日、亜子と裕奈と一緒に買い物に出かけてた。

そして帰り道、寄る場所があったので亜子と裕奈と分かれて用事を済ませてから一人、学生寮に帰ろうとしていたら変な二人組みの男に絡まれてしまった。

「いいじゃねえか、ちょっとくらい遊ぼうぜ」

「や、止めてください。早く帰らないといけないんで……」

二人の男のうち一人は私の腕を掴んで無理にでも連れて行くところ。

「やだ、話して……」

私は手を振り解こうとするが男と女。

男のほうが力が強いに決まっている。

「ほら、行くぞ」

「ちょっと、お尋ねしたいのですが……」

私達に話しかけてきたのは私より少し年上そうな男の人だった。

【Akira side】

【Touya side】

転移してきたはいいが、道が分からずうつらうつらしていたら女の子に絡む二人組みの男が居た。

女の子はどう見ても嫌がっていた。

「どうすっかな……」

来て早々問題を起こすのはどうかと思ったが、背に腹は変えられず

男達に話しかけた。

「ちょっと、お尋ねしたいのですが……」

「あんだてめえ、怪我したくなかったらさっさとどっか行っちまいな」

男は手をブンブン振りどっか行けという。

「いえ、どう見ても嫌がつてる女の子を無理やり連れて行こうとするクズどもが居たので何してるのかなと尋ねようと思っただけなんです……クズどもには答えられないか」

俺はクズどもを強調して言い放つ。

予想通り一人の男は怒って殴りかかってくる。

俺はそれを指一本で止める。

「何ですか？俺に喧嘩を売ろうとは……いい度胸してんじやねえか!?!」

俺は指一本で止めた拳を離し、相手の腕を掴み背負い投げの要領で投げ飛ばす。

「ほら、そのクズもやるなら掛かって来い。来ないならそのクズ連れてさっさとどっかいきな」

「てめえ、さっきから言わせておけば!?!」

男はポケットを探り、ナイフを取り出す。

それを持って突っ込んでくる

【Touya side out】

【Akira side】

「危ない!!」

私はいつの間にか叫んでいた。

男がナイフを取り出して男の人に突っ込んで言った。

しかし、男の人は私のほうを見てニッコリ笑い、男のナイフを持っている手を蹴り上げナイフを吹き飛ばし、そのまま空中で回転しながら男を横に蹴飛ばす。

私は自分の顔が赤くなっているのに気づいた。

何時からだろう、ニッコリ笑みを向けられたときからかな

「君、大丈夫？」

男の人はいつの間にか私のすぐ側までやってきていた。

「あっ、はい。あの、助けてくれてありがとうございますございました」

「気にしなくていいよ。それじゃあ気をつけて帰ってな」

男の人は踵を返して立去ろうとするが私は静止の声をかけていた

「あの!!……………何かお礼を……………」

「うーん……………お礼ね……………」

すると男の人はパツと閃いたようにこっちを見て、

「学園長室って何処？」

と聞いていた。

私はすぐ近くまで来ていたので案内した。

すると男の人はありがとうとだけ言って走り去ってしまった。

「あっ、名前……………聞いてないや……………」

【Akira side out】

【Touya side】

俺は助けた女の子に案内され学園長室まで来た。

「お久さ〜ジジイ」

「ぬっ！？十夜殿か、来ていただけなのか。」

「ああ、でよネギが来るってのは本当なのか？」

俺はジジイに問う

「ああ、本当じゃよ」

「……………MMの元老院どもの仕業か」

「ぬ…………グググ」

ジジイの反応からして本当のようだ。

やっぱりあいつらは野放しには出来ないな。

「十夜殿には悪いがまた明日、来てもらえんか？ネギ君たちもその頃には到着してるじゃろうし」

「たち？他にも来るのか？」

「うむ、ネギ君の義姉が二人な。」

「ふう〜ん。じゃあまた明日来るわ」

俺はそういつて影へと沈んだ。

………寝場所どうしよう？

【Touya side out】

第十話 編入！！

【Touya side】

一日を影の中で過ごした俺は再び、学園長室へ来ていた。

認識阻害をバリバリに掛けている。

「で、ネギは何処のクラスの担任になるんだ？」

「うむ、麻帆良学園女子中等部2・Aじゃ」

「そうかそうか……って女子中等部！？俺にそこに入れて
！！」

「うむそついう事になるかのう」

ニッコリとしながら言うジジイ。

ああ、やべえ刀でぶった切りてえ

「ひょっ！？」と、十夜君！！その手に持っている刀は何じゃ！？」

「あ？ああ、ちょっとジジイの後頭部を斬って見たくなっただけだ。気にするな」

「なにそれ！？ワシ怖い」

俺はジト目でジジイを睨む。

「オッホン、では編入という形になるが良いかな？」

「って、待ちやがれ！！せめて教師にしろ！！このクソジジイ！！」

「いや……せめて三日前に言ってくれんとワシ変えられないな」

こいつ……図りやがったな……

「あゝもういいよ、編入すればいいんだろっ！？その代わり部屋はいい所にしろよ……！」

「うむ、そちらのほうも準備は整ってるわい」

なんか嫌な予感しかしねえ

タッタッタッタ

「おや、来たようじゃな」

ドン……！

「学園長先生！！一体どーゆーことなんですか！？」

この気は……アスナか！？

まあ何はともあれ扉を大きな音を立てながら開けた少女は開口一番にそう叫んだ。

「まあまあアスナちゃんや。なるほど修行のために日本で学校の先生を……そりやまた大変な課題をもちろつたのー」

俺は思わずお前らが仕組んだんだろうが！！と言いたくなくなったが、喉まででかかったその言葉を唾と一緒に飲み込んだ。

「は、はい。よろしくお願いします。」

「しかしまずは教育実習とゆーことになるかのう。」

「はあ」

「今日から3月までじゃ」

んー、なんか二つの気配がこの部屋に近づいてきてるな……

「ちょっと待ってくださいってば！！だ、大体子供が先生なんておかしいじゃないですか！？しかもうちの担任だなんて……」

「ネギ君、この修行はおそらく大変じゃ。ダメだったら故郷に帰らねばならん。二度とチャンスはないがその覚悟はあるのじゃな？」

「は、はいっ。やります。やらせてくださいっ」

「……………うむ、わかっ「コンコン」……………誰じゃ？」

二つの気配はいつの間にか学園長室のすぐまん前まで来ていたようだ。

「今日からこの学校に編入することになったネギの義姉です」

「おお、すっかり忘れ取ったわい。入りなさい」

「失礼します」

ガチャ

俺は扉を開けて入ってきた二人を見たときどんな顔をしていただろうか？

たぶん、この世界の誰も見たことの無いような驚きと嬉しさ、そして悲しみと怒りに満ち溢れたなんともいえない顔をしていただろう。

「お前ら……………」

「？学園長、さっきから気になってたんですけどその男の人は？」

「おお、そうじゃった。彼は今日か「そんなことはどうでもいい！……………すまん、この話は後です」……………そうか、では気を取り直して彼は今日から2・Aに編入することになった神崎十夜君だよ」

「え！？男がですか！？」

「うむ、教育委員会の方針だな。なんでも共学にするかもしれないからそのお試しだそうだ」

「そう、ですか」

「もしかしてとうちゃん？」

まさか……認識障害をしてるのに気づかれるとは……

「ああ、久しぶりだな木乃香」

「やっぱりとうちゃんなん！？うち嬉しいわ！！」

俺が眠っている間、分身体の一人が木乃香の幼少の頃の護衛をしていたそうだ。

子供の姿で……

しかも、詠春は俺の存在に気づいていなかったらしい。

「学園長、そろそろいいですか？」

「ああ、彼女はネギ君の義姉でアヤカ・スプリングフィールド君とサキ・スプリングフィールド君じゃよ」

「これからよろしくお願いします」

「よろしく……お願いします……」

「（ジジイ俺は先に出ている。終わったらネギと一緒にクラスに行けばいいな。それと俺の正体は口が裂けても言うなよ）」

「（・・・あいわかった）では、十夜君には悪いがしばらく外で待機していてくれんかのう？」

「わかりました、それでは」

俺はそういつて学園長室を出る。

そして俺は壁に寄りかかり呟く

「何でお前らがここに・・・綾香、咲姫・・・・・・・・・・」

彼女たちは俺の幼なじみ。

一人は前に話したと思うが一ノ瀬彩華。

ネギが好きなクラスのアイドルだった子だ。

そしてもう一人は五十嵐咲姫。

こちらもクラスのアイドル的存在だった。

この二人は二人ともよくもてていた。

それにも関わらず、よく俺と時を過ごしてきた。

そんな彼女たちが何故、この世界に・・・・・・・・・・

それ以前に彼女達は本当に俺の知っている二人なのだろうか？

謎はさらに深まる。

「失礼しました」

ガチャ

そういつて一番最初に出てきたのはアスナだった。

そして、皆次々に出てくる。

「終わったか。それじゃあこれからよろしく、ネギ先生」

「あっ、はいよろしくおねがいます。神崎さん」

「神楽坂さんにこのか。それにアヤカさんとサキさんもよろしくね」

「よ、よろしく」

「よろしくな」

「よろしく……トウヤ……さん」

「よろしく……十夜」

「？それじゃあ、教室へ行きましょう」

いつの間にか背後に立っていた眼鏡の女先生にびっくりしながらも

返事をする。

俺たちは時間まで少し余裕があったのでゆっくりと教室へ向かって
いた。

途中で、アスナとこのかは走って教室へ行ってしまった。

「ハイ、コレ。クラス名簿」

「あ、どうも」

「それよりも授業のほうは大丈夫なの？」

俺はそんな会話が聞こえたときすでに、思考の海へ浸っていた。

(・・・・・・・・・・・・・・・・そんなはずはない。きっと他人の空にだ)

ドン！！ ガラー！！ ガシャン！！

大きな音がして、現実へと思考を戻された俺は情報を把握した。

どうやら、ネギが教室へ入ってクラスの罨に嵌ったらしい。

このクラスは元気だなと心の中で苦笑いをしていると不意に自分達の名前を呼ばれた。

「それじゃあ十夜君、アヤカちゃん、サキちゃん入ってきて」

俺たちは眼鏡の先生　　しずな先生に言われたとおり教室へと入る。

「それじゃあネギ先生から自己紹介をお願いしようかしら」

「ええと……あの……ボク……ボク……今日からこの学校でまほ……英語を教えることになりました。ネギ・スプリングフィールドです。3学期の間だけですけれどよろしくお願いします」

おいおい、今確実に魔法って言おうとしただろ！！ってか魔法教えてどうすんだよ！！

「……………」

一瞬の静寂の後

『きゃあああああ！！かわいいいいいい！！』

などの大歓声が生まれる。

「それじゃあ次は、十夜君お願いできるかしら」

「はい。今日からこのクラスに編入することになった神崎十夜だ。」

男と言うことで近寄りにくいかもしれないが、よろしく頼む」

言い終わると同時に認識阻害を少しはずす。

「「「「「!!」「」「」

「なっ!?!お前今まで何処で!?!」

反応したのは六人。そのうちの一人は思いっきり立ち上がっている。

「あれ?エヴァちゃんとーや君って知り合いなの?」

「まあ、少しな(後で話してやるから今は落ち着け)」

俺は念話でエヴァを促す。

「くっ(絶対だぞ!!)」

「(ああ)」

俺たちの会話は其れで終わった。

「そ、それじゃあアヤカちゃんとサキちゃんも」

「はい。ネギの義姉のアヤカ・スプリングフィールドだよ。皆よろしくね」

「同じくサキ・スプリングフィールド…….…….よろしく」

『よろしく…….…….』

「質問質問!!」

そういつて手を上げたのは赤いパイナップルみたいな髪が特徴的な女の子だった。

「ネギ先生。これじゃあ授業が始まらなさそうなので次の時間は俺たちへの質問の時間へしたらどうですか?」

俺はひとまず案を提示する。

「そうですねネギ先生。コレじゃあ授業になりませんものね」

いがいにもしずな先生が賛成してくれた。

「そ、それじゃあこれから質問タイムにしまーす」

「それじゃあこのあたし、麻帆良のパパラッチこと朝倉和美にお任せあれ」

そういつたのはさっきの赤髪の女の子 朝倉和美だった。

「よっパパラッチ」

などと周りから声援が飛んでいる。

「それじゃあ、まずは神崎君に質問。何で女子校であるこの学校に編入して来たの?」

「あのクソジ……学園長の無茶振りだ」

「あゝ其れは災難だったね」

・・・・・・・・あいつの存在って一体。

皆納得しちゃってるし・・・・・・・・

「それじゃあ、次。身長、体重、趣味、特技を教えて。」

「身長は180くらいで体重は・・・・・・・・分からん。趣味は・・・・・・・・特に無いな。特技は武術全般だ」

「お〜」

そして俺の質問から、いつの間にかネギたちの質問へと移っていた。

【Touya side out】

第十一話 歓迎会

【Akira side】

まさか、あの人が編入してくるとは思っていなかった。

私を助けてくれた……あの人の。

名前は神崎十夜……君。

授業も終わり、ネギ先生、十夜君、アヤカさん、サキさんの歓迎会をやることになり私は十夜君を探していた。

すると、立ち入り禁止のはずの屋上に向かう十夜君を発見した。

私は十夜君を呼ぶ役目があったため、声をかけようかと思ったが十夜君は少し急ぎ足になった。

その為、声をかけるタイミングを失ってしまった。

私は興味本位で十夜君についていった。

【Akira side out】

【Touya side】

何とか、一日の授業を終えた俺は帰り支度をしていた。

すると、机の中に紙が入っているのに気づいた。

内容は“屋上に来て”それだけだった。

しかし俺は気づいたら教室を飛び出していた。

宛名も差出人の名前も書いてない手紙。

しかし、その手紙の最後の文字“て”の下が丸まっていた。

これは俺や彼女に親しい人しか知らない、彼女の癖。

俺は徐々に急ぎ足になっていく。

バン!!

俺は屋上の扉を思いっきり開いた。

そこには案の定、二人の女の子が居た。

「久しぶり十夜」

「久しぶり………十夜」

「………やっぱり、お前らなのか？」

そこに居たのはアヤカ・スプリングフィールドとサキ・スプリングフィールドであった。

「うん。私達ね、十夜君に会いたくてここまで来たんだ」

「この世界へ来たのもシヴァって名乗る優しい神様のおかげ……」

「

「!？」

シヴァだと………

『そう、彼女達はシヴァ様がここに連れてきたのだよ』

「あなたはシヴァの……」

『彼女達は、自ら命を絶ちこの世界へ来たのだよ』

「………てめえ、もう一回言ってみろ」

『？何度も言わせる出ない若造。彼女達は、自ら命を絶ちこの世界に来た。それだけのことだろうが』

「つまり自殺ってコトか」

俺は身構える。

『お前のような若造に何が出来るというのだ。私はおまえのコトは知らんがたかが人間。そんな奴に私が臆する必要はない』

「だったら、姿を現しやがれ」

『其れもそうだな』

そういつて出てきたのは漆黒のマントに身を包んだ老紳士だった。

おそらくどっかの没落貴族かなんかだろう。

「ああ、俺がただの人間だったら何もできねえな。」

『何？』

「俺が何回シヴァのことを殺したか知ってていつてんのか？」

『何？グハツ！』

神官は吹き飛ばす。

間合いを一気に詰め、吹き飛ばしたのだ。

『なるほどなるほど。シヴァ様が気にかけるのも分かる気がする……まあい。その彼女達からは良いサンプルが取れた。彼女達はもう自由だ。君の好きにしたまえ』

くつくつくと笑いながら神官と呼ばれた男は消えていった。

俺は呆然と立っているアヤカとサキの元へ歩いていく。

「と、十夜。ど、どう言うこと!？」

パチン!! パチン!!

俺は二人の頬を叩いた。

「「えっ?」「」

「お前ら……お前らが居なくなったことで哀しんだ奴がどれだけ居ると思う?ましてや自殺?……ふざけんじゃねえ!! この世にはいきたくても生きられない奴らもいるんだぞ!! お前らが寿命で死んで転生してきたのかとも思ったが俺の思い違いだったようだな。お前らと話すことはもう無い」

俺は踵を返して歩き出す。

「まって!!もう……おいてかないでよ!!私達を残しておかないでよ!!」

「笑わせるな。……だがな、お前らがもしこの世界で死なず、ちゃんと生き残り寿命を全うするというのなら考えてやらんことも無い。」

「……………約束する！！私達もう命を粗末になつてしない！！」

「私も……………置いてかれた時の気持ちがよくわかる……………から……………」

俺は二人の目を見る。

その目には少しだが、決意の色が見える。

「フ……………いいよ。二人がそうちゃんと思うなら、別に俺は
どうこう言わない。だが命だけは粗末にするな。他の誰でもない俺
が哀しむ」

俺は二人の下に歩み寄り、頭を撫でてやる。

「それと、そろそろ出てきたらどうだ？大河内さん」

「「えっ？」」

扉の影から出てきたのは昨日、俺に学園長室までの道のりを教えてくれた少女だった。

「今のは一体……………」

「さて、どうするか。まあいいや。大河内さん」

「えっ！？な、何？」

「今のことは口外するな。いづれ話してやるよ」

「……分かった。……あっ、そうだ。歓迎会があるから三人とも来てくれないかな？」

「歓迎会か。わざわざすまん。んじゃ行くとしますか」

俺たちは屋上を後にして、2 - Aの教室へと向かった。

途中で、ネギとアスナと鉢合わせして一緒に教室のドアを開けた。

『ようこそ？ネギ先生、十夜君、アヤカちゃん、サキちゃん!!』

パンパンパパーン

「うおっ！アハハ、ありがとうみんな」

俺はそういった後、タカミチの側まで来た

「ようタカミチ。老けたな」

「あつてそうそう老けたなは酷いじゃないか十夜」

「アスナも元気そうにやっってるじゃないか」

「ああ、昔のことを全部忘れて、だけどね」

どうすべきか。

今、ガトウのことを言うべきかまだ黙っておくべきか……

「なあタカミ……っであらっ？」

少し考え、タカミチの方を向くと、タカミチはネギになにやら魔法を使われているようだ。

「くっくっく、タカミチお前……」

「ハハハハハ……」

「にしてもあのガキ、（魔法を）隠匿するき無いだろ」

「ハハハハハ、正直驚いたよ。ここまでとはね」

俺はその後タカミチと雑談していたが10時に近づいたところでタカミチは立ち上がり。

「それじゃあ、世界中広場に行こうか」

と行った。

……俺は何も聞いてないぞ？

「ハハハ学園長め……………。着いてきてくれ。行けば分かる」
クラスの人も数人、いつの間にか居なくなっていた。

何かあるのだろうか？

俺も立ち上がり、教室を出る。

世界中広場へ行くと魔力の少し高い大人や子供が居た。

おそらく魔法生徒や魔法先生なのだろう。

俺はジジイを見つけると、とりあえず断罪の剣を作り出しジジイの未知の後頭部に突きつける。

「遺言があれば聞くがどうする？」

「なっ！？貴様一体！！」

「……………その、なんていうか……………すまんかった」

ジユウ

「っ！？今、ジユウって言ったよね！！ワシの後頭部落ちちゃっよ
！！！」

「別に構わんだろっ？」

「それくらいにしてくれないかな？十夜」

「……………しゃあねえな。クソジジイ後でタカミチに礼を言っ
ておくんだぞ？」

「わかりました。すみません。今後気をつけます」

組織の頭がコレでいいのかねえ？

「オホンッ。今日集まってもらったのは他でもない皆に十夜殿、ア
ヤカ君、サキ君を紹介するためじゃ。皆、『暗黒』と言う男を知っ
ているかのっ？」

「それはもちろんですが、それが一体」

「それが「それが俺。神崎十夜さ。お前らも噂ぐらいは聞いたこと
があるだろっ？『暗黒』と言う男の名は神崎十夜でその男は真祖の
吸血鬼だと……………ワシの台詞」

「なっ！？暗黒がそんな罪人なわけないだろっ！！！」

「つたく、何処にでも居るよなこっ言う偽の正義を語っている奴。」

正直反吐が出るわ。

「ジジイさつさと進めてくれ」

「うむ。それではアヤカ君とサキ君はみんなの知っている通りナギ・スプリングフィールドの義理の娘じゃ。しかし、魔力量はナギと引けを取らないくらい高い」

「それで、俺は誰と模擬戦をすりゃあいんだ？正直、こんな正義馬鹿に付き合ってる暇は無いだ。」

「貴様！！私が相手だ」

そついつて前に出てきたのはガングロの魔法先生だ。

「……………くつくつく。いいぜ、やりたい奴は全員掛かってきな。お前らなんてどうせ一秒も持たないんだからよ」

「なつ貴様！！」

「静かにせんか！！それでは十夜殿と戦いたいと名乗りを上げるものは前に出よ」

前に出てきたのは大体、三分の一。

……………おっ！？あれ愛衣じゃないか。この学校だったのか

「さて、準備は揃ったかのう？」

『はい（おっ）』

「それでは……始め!!」

ドン!!

パタン!!

ジジイが始めといった瞬間に相手は全て倒れた。

「さっきまでの威勢はどうした？相手の力量も測れない奴は戦場に行ったらすぐに死ぬぞ？」

俺が何をしたのかというと重力魔法で地面に叩き付けたのだ。

「くっ……貴様……!!」

「そこまでじゃ。」

俺は重力魔法を解き、ジジイの元へと行く。

「うむ、顔合わせも出来たことじゃし今日はコレで解散じゃ。十夜殿には言いたいことがあるから残ってくれ」

何だ？部屋のことが？

「ああ、分かった。」

「うむ、それじゃあ解散じゃ」

魔法使い達はそれぞれに散っていった。

「で、十夜殿には頼みたいことが「報酬による」……まだ何も言っていないんじゃが」

俺の予想ではこのかの護衛と夜の警備だろう。

「どうせこのかの護衛と夜の警備だろう？」

「うっ……わかった。報酬は弾もう」

「ならいいか。それで俺の部屋は？」

また影の中なんてのはゴメンだからな。

「もちろん女子寮じゃよ？」

「……おいジイ射殺と刺殺どちらか選べ」

「ひい！？し、しかし女子寮ならばこのかの護衛もしやすいし……」

「………つたく、色々問題があるだろうに………わーったよ。女子寮に住めばいいんだろ？部屋が一番広い部屋な」

「あい、わかった。それと彼女達が話しをしたがっているのじゃが」

「ああ、分かっている。でも、相手にしてたら俺が死にそうな気がする」

だって、神鳴流使いの鳥族のハーフと魔眼持ちの銃使いだぞ？死ぬって………

「十夜さん!!」

「十夜!!」

「……やべ、逃げられなかった

「なんだよアルカナ、“せつちゃん”」

「私の今の名前は龍宮真名だよ。それよりせつちゃんて……
プツ」

「何で今、せつちゃんの所を強調したんですか!! 龍宮も笑うな!
!」

「龍宮……ねえ。あいつは死んだのか?」

「ああ、私を置いて逝っちまったよ」

軽く、刹那をスルー……

「何で無視するんですか!! つか龍宮も笑いを堪えてないで何か
言ってくれ!!」

「……出来なかったのだが、やっぱり刹那はいじられキャラと
言うことだ、」

「はぁ……はぁ……さ、それより十夜さんが魔法使いだな
んて知りませんでしたよ?」

「ああ、言っていないしな」

「……………はあ、十夜はやっぱり十夜だね」

「当たり前だろ。むしろ俺じゃなかったら怖いわ」

「あつ、今日警備が入ってるのすっかり忘れてました」

「そういえばそうだったな」

「どうやら今日は刹那と真名の警備の番らしい。

「ああ、そうか。じゃあがんばってこい」

「はい!!--」

「それじゃあ行って来るよ」

「ああ」

俺たちはそういってそれぞれ歩みを進めた。

【Touya side out】

【Mei side】

まさか、この学園に十夜さんが来るとは思わなかった。

昔、私の事を強くしてくれた・・・鍛えてくれたあの十夜さんが・・・

顔合わせが終わり、話しかけようと思ったが学園長先生に呼ばれてその後は桜咲さんたちと話していたみたいでタイミングを失ってしまった。

少し話がしたかったなー

また今度はなしかけてみよう。

【Mei side out】

第十二話 惚れ薬（前書き）

みなさん、とてもお久しぶりです。

いろいろ事件が多発している今日この頃……

書き溜めしておいた分を投稿しようと思います。

第十二話 惚れ薬

【Touya side】

「なにこの死亡フラグ・・・・・・・・」

俺は今、女子寮の俺の部屋の前に来ているのだが、

「周りが・・・・・・・・ねえ」

そう、周りの部屋がとんでもないことになっているのだ。

右の部屋がアヤカとサキの部屋。

左の部屋が刹那と真名の部屋。

そして前の部屋は鳴滝姉妹と楓の部屋。

楓とは分身体が会っていたらしく、感覚がある。

俺はどうやら楓に稽古をつけていたらしい。

歓迎会するときすんげえ睨んできてたし………

これは偶然か？偶然なのか！？

とりあえず扉を開けて中に入る。

「……………まじねえよ」

とても広い。

普通の部屋の10倍くらいは広い。

魔法でも使っているのだろうか？

そう錯覚してしまうほど広かった。

それに生活必需品や電気器具などがたくさん揃っていた。

「税金の無駄遣い？」

思わずそう嘆いてしまった。

俺はとりあえず備え付けの風呂へ入り、時間も遅いので寝ようと思
った。

しかし、そこで事件は起きてしまった。

「おいおい……………鍵かかってたはずだよな？」

なんとベットの中にはスヤスヤと眠る美少女達
とサキがいたのだ。

アヤカ

「……………はあ」

俺はため息をつき、布団をかけなおしてやりソファで眠ることにした。

P i p p i p p i p p i p p i

俺の朝は早い？

今朝は五時に目覚ましで鳴りソファから起き出した。

「うーん。さてと」

俺はアヤカ達が起きないようにそっと部屋を出る。

「十夜さん？」

部屋を出るとちょうど刹那も部屋を出てきていた。

「ん、刹那おはよう。朝早いんだな」

「おはようございます・・・じゃなくてなんで十夜さんがここに居るんですか？女子寮ですよ？」

「あのクソジジイに聞いてくれ。まあこれから隣同士よろしくな」

「・・・なるほど。わかりました。これからよろしくお願ひします十夜さん」

「で、刹那は何しにいこうとしてたんだ？」

俺は疑問に思っていたことを聞く。

「剣の稽古です。腕が鈍ってはいけませんので」

「そうか・・・なら付き合おうよ」

俺は止水を素子にあげてから全然、剣を握っていない。

腕が鈍っていると言うことは無いのだが、気分転換にだ。

「はあああああ！！！！」

キン！ガキン！！

「踏み込みが甘い。振りが大きい。それじゃあ隙だらけだぞ」

キン！！

俺は刹那の剣を吹き飛ばす。

ドン！！

「刹那死亡」

刹那の首に剣を突きつける。

「ま、まいりました」

「うーん、筋はいいんだけど。経験がね」

俺はそう言って時計に目を向ける。

「そろそろ時間だし寮に戻るか」

「分かりました。今日は付き合っていたいただきありがとうございます
た」

「いって、ただの暇つぶしだったしね」

と、俺は突然思い出す。

（そう言えば……アヤカとサキが部屋に居たけど大丈夫かな
？）

少し心配する俺であった。

「十夜さん!」

一度部屋に戻り、準備を整えて学校へ向かっていると後ろから刹那の声が聞こえた。

俺が刹那の聲がしたほうへ向くと刹那は手を振りながら此方へと走ってきていた。

その後俺らは学校へと向かって歩いていった。

すると正門のところに大きな人だかりが出来ていた。

「……………刹那、あれな」今日こそは勝たせてもらっぞ……！中
武研部長 古菲！」「……………なんだよあれは……………」

「いつものことごとくやるよ」

「げ……………楓……………」

「古は学園の格闘大会で優勝してるからな。ああして毎日挑戦者が後を絶たないでござるよ」

「ふうん」

「弱いアルネ。さあもつと強い奴はいないアルか？」

「つ、強い……………」

襲い掛かって言った猛者どもは地面に倒れ伏せている。

「おつ、十夜に楓に刹那。？早」

「おっす」

「おはようどいぢやね」

「おはよう」

すると倒れていた男の一人が立ち上がり、なぜか俺に襲い掛かってきた。

「まだじゃあ菲部長！！！」

「鬱陶しい」

ドゴン

俺は後ろから襲い掛かってきた大男に裏拳を決めると大男は再び地面にひれ伏した。

「むっ、十夜中々強そうネ。私と勝負するアル！！」

「ああ、また今度な」

「十夜殿、大丈夫でござるか？」

「ああ」

「……………十夜殿後で話があるでいぢやね」

「暇だったらな」

俺は楓の言葉を一蹴して学校サボろうかな？と思いながら教室へと歩を進めた。

教室に入ると、いきなり飛び蹴りが飛んできたので足を掴み肩車の体制に持っていく。

「で、何の用だエヴァ。朝、来て早々飛び蹴りとは」

「十夜！貴様何故昨日私の家に来なかった！！」

「だって来いって言われて無いし？」

「机の中に紙を入れておいただろうが！！」

「は？」

とりあえず自分の机をあさってみる。

すると一枚の紙切れが。

『深夜12時に私の家に来い』

「あつ、マジだ……今日行くから勘弁してくれ」

俺はエヴァをおろしながら言う

「絶対だぞ!!」

そういつたエヴァはさっさと教室を出て行ってしまった。

「き、起立、気をつけ、礼い」

『おはよーございます!』

うつせえな……

朝からなんでこんなに元気なんだ？

「着席」

「じゃあ一時間目をはじめます。テキスト76ページを開いてください。」

俺は言われたとおり教科書を開く。

(あゝねみい)

「The fall of Jason the flower .

Spring came. Jason the flower
as born a branch of a tall
tree. Hundreds of flowers were
born on the tree. They were all
friends.
かなあ
「

今のところ誰かに訳してもらおう

「えっと……」

「じゃあアスナさん」

「なっ……何で私に当てるのよっ」

「え……だっ」

「フツは日付とか出席番号順で当てるでしょ!」

「でもアスナさんア行じゃないですが……」

「アスナは名前じゃん!」あと感謝の意味も込めて……」何
の感謝よっ!」?

(うるせえな……)

「要するにわからないんですわねアスナさん」

「なっ!」?

「では委員長のわたくしが代わりに……」

「わ、わかつたわよ訳すわよ。えーと……ジエイソンが……
・花の上……に落ち春が来た？ジエイソンとその花は……
えと……高い木で食べたランチで……骨……
が百本？」

（意味わかんねえーよ）

「えーと……骨が……木の……」

「アスナさん英語ダメなんですわねえ」

「なっ……!？」

「アスナは英語だけじゃなくて数学もダメですけど」

「国語も……」

「理科社会もネ」

「要するにバカなんですわ。いいのは保健体育くらいで」

『アハハハハハハハハ!』

「うるせえ!!」

「ひっ!？」

「おい薬味!!その発言は先生にあるまじき発言だぞ神楽坂に謝れ。
お前らも悪乗りすんじゃないやねえ!!次俺を怒らせたらアヤカとサキが
黙ってねえぞ!!」

「えー私!？」

「私達?.....」

「ああ、んじゃ俺は寝る」

そして俺は眠りに着く。

「ちよつと.....さいよ.....!!.....ちよつと起きなさいよ!..!」

「んだよ、うるせいな」

「何時まで寝てるつもり?もう授業全部終わっちゃったわよ」

目を開いて視界に入ってきたのはアスナだった。

どうやら俺は一日中寝ていたらしい。

「ねえあんた。ずっと思ってたんだけど.....私と昔にあっ

たことない？・・・ずっと遠い昔に・・・」

「おまえ・・・泣いてんのか？」

「えっ？」

アスナの目にはつつすらと小さな光が見えた。

そしてそれは水滴となってアスナの頬を伝い落ちていった。

「泣いてなんかいいわよ！！」

「ほら」

俺はポケットからハンカチを出し、アスナに渡す。

「・・・・・・・・・・ありがとう」

「・・・・・・・・・・そうだな。昔にあったかもな」

「・・・・・・・・・・もうこの話は終わり！！あっ・・・・・・・・・・十夜ちよつと

口あけてくれない？」

「？こっつか？」

俺は言われたとおりに口をあける。すると口の中に何か液体を入れられた。

「わーアスナさん！！」

なんだ？今度は薬味か？

「がはつがはつ！？なにすんだ神楽坂！！」

「ホラ 何にも起こらないじゃない」

「あれ・・・おかしーなー」

「・・・・・・・・まさか

「何のつもりか知らないけどね、そんなことじゃキゲン直さないわ
」ゆ

「何の話だ？」

「ああ、いいいいの。十夜は関係ないから。悪かったわね変なもん飲ませて」

「とつちゃん・・・・・・・・とつちゃんはやっぱりカッ」いいな〜

「マズッ!？」

「ん?」

「ん~~~~~?」

「このか離れる!抱きしめることくらいあつてやるから

「ホント?」

「ああ」

「それじゃ」

このかが離れた瞬間、俺はチーターもびっくりの速さで逃げた。

俺が走っていると後ろからはたくさんの女子が……まず!?

「十夜さんこっちはです!」

「十夜殿こっちはでござる!」

両脇から楓と刹那が出てきて手招いた

「むっ楓(刹那)」

二人がにらみ合っている間にも後ろから女子が追ってきている。

俺は迷うことなく前進して逃げた。

すると途中で横に引っ張られた。

「やあ十夜じゃないか。こんなところで会つとは奇遇だね」

「げっ、マナ……」

「それじゃあいただくとするか」

そういつてズボンに手を掛けてくるマナ。

「それは冗談でもまずつ「いただきー!!」!？」

俺は誰かに首根っこをつかまれ連れ去られた。

アヤカとサキだ。

「誰も居ないようだね」

「いただきま・・・・・・いない・・・」

俺はアヤカとサキが余所見をしている間にこっそりと逃げ出した。

そろそろ時間切れだな。

ドドドドドドドドドドドドドドドド!

「十夜くん」「十夜くん」「十夜くん」「十夜くん」「十夜くん」「十夜くん」「十夜くん」「十夜くん」

「うわああああ!!もう誰でもいいから助けて~~~~~」

「十夜君?・・・・・・こつち」

俺は途中であつた大河内さんに連れられある部屋に入った。

ガチャツ

「鍵も閉めたからもう大丈夫。それよりなんで皆に追いかけられたの?」

「ああ、色々あつてな・・・・・・それより大河内さんそろそろ離

れてくれないか？」

なぜか俺が座った上に大河内さんが馬乗りしてきたのだ。

さっきの口調からして効力は切れているのだと思ったが……

「大河内さん？」

「……ヤダ」

まさかのヤダ、ですか

大河内さんは俺の頬に手を添えるとそのまま

「&%\$&!?!?&#!?!?」

口付けをされた。

「……クチュツ……!?!?」

どうやらキスの途中で効力が切れたようだ。

「わ、私からした……の？」

「あ、ああ……大丈夫か？」

「……うん//////////」

「あー、なんだ。その、今は事故だ。だからあんま気にするな」

「う、うん／＼／＼／」

大河内さんの顔は誰が見てもわかるほど紅潮していた。

「ほ、本当にゴメン」

「いいよ。事故なんだ。何時まで引きずっても仕方ない。じゃ俺はこれで」

ネギを恨みながらも俺の脚はエヴァ邸へと進む。

途中、魔族の気配を感じたが軽くスルーしておいた。

【Touya side out】

第十二話 惚れ薬（後書き）

感想待っています。

第十三話 解呪（前書き）

二つ目

第十三話 解呪

【Touya side】

「ここか……」

俺は今、ログハウスの前に居る。

何故ならエヴァに來いといわれ、紙を見ると地図が乗っていたので来たわけだ。

コンコン

「エヴァいるか？」

シ〜ン

「誰も居ないのか？」

ガチャ

「神崎十夜さんですね。マスターがお待ちしています」

「絡繰……か？」

「はい。出席番号10番絡繰茶々丸です。それではこちらに」

「お、おう」

(今は……ガイノイドか？エヴァの従者か何か)

そう勝手に結論付ける。

「マスターお連れいたしました」

いつの間にか着いていたようだ。

「むっ……そうか。茶々丸は下がっていいぞ？」

「はい。」

絡繰が去るとエヴァは俺の目の前まで来て抱きついた。

「お、おい……どうした。エヴァ」

「と、十夜が居ない間、わ、わた、私がどれだけ心配したと思っ
ているんだ……ヒッグ……今はこのままにしてくれ……
……ヒッグ」

俺はエヴァの気が済むまで抱きしめていた。

数分するとエヴァは俺の胸に埋めていた顔を持ち上げた。

「すまん。もう大丈夫だ」

「そうか。悪かったな、長い間一人にさせて」

「まったくだ。ったく」

俺はふと思い出したことを言う。

「そついえばチャチャゼロは？」

「ああ、あいつなら奥で寝てるよ。この呪いのせいで私の方から魔力供給が出来んのだ」

「なるへそ。」

「呪い……つは！？十夜貴様！！この呪いナギが三年たったから十夜が解きに来るといつていたのに何故来なかった！！」

「えっ？聞いてないし。……ふむ、エヴァの呪いも後で

解いてやる。まずはチャチャゼロだな」

俺はエヴァの案内でチャチャゼロの居る部屋へと向かった。

「チャチャゼロ！！喜べ！！遂にお前も寝たまま地獄から抜けだせるぞー！！」

「そうね。ナギの息子が来た……ん……十夜！？」

「ようチャチャゼロ久しぶりだったな」

「ええ、そうね。もしかして呪いを解いてくれるって言うのは……」

「ああ、俺だ。」

俺は目を閉じ、神経を集中させる。

そして、チャチャゼロは魔力がなくても動ける孤立人形……つまり完全なる人となった。

「よし、これでおっけいだ」

「お、おお！！動ける！！動けるよ！！」

「よかったな！！チャチャゼロ！！さあ次は私の番だ！！早くやれ！！」

「はいはい、でもその前に約束してもらうことがある」

「なんだ言ってみろ」

俺は一度目を閉じ再び開ける。

「学校にはちゃんと通え。少なくともこの三年間はな」

「わかった。問題はない」

「俺がエヴァの呪いを解いたら後々、面倒なことになる。だから呪いが解けたことを口外するな。あと解けているような素振りも見せるな」

「むっ……わかった。それくらいなら了承しよう」

「よし、エヴァちゃんはいいい子ですね」

俺はエヴァの頭をよしよしと撫でる。

「は、放せ！！！！／／／／（別に撫でられる分にはいいのだが、これは……嬉し恥ずかしくて死ぬる）」

「何か言ったか？」

「いや、な、なんでもないぞ」

「？そうか。それじゃ行くよ」

俺はエヴァの頭に手を置く。

（あの馬鹿、どんな魔力で呪いかけてんだよ）

意識を研ぎ澄ませる。

そして魔力の塊を丁寧に解いていく。

ポワア

エヴァの体が光り輝いて

パチン

そしてはじける様な音が鳴った。

「……………解けた。次は爺や、正義の魔法使いを語るバカどもにはれないように違う呪いをかける」

「むっ、それはどのような呪いだ？」

「んーとね、魔力を隠してくれて、今までかかった呪いを形だけが作り出してくれる」

「ならば私に害はな」ただしな……………」むっ、何かあるのか？」

「ああ、俺に何か降って来る。まあ一回だけだけだな」

「金タライとかか？」

「さあな、それは俺にもわからん。それは神のみぞ知るって奴だ」

まあ実際、俺は神なんだけどね。と心の中で自分の言葉に相槌を打

っ。

俺は再度目を閉じエヴァの頭に手を乗せる。

ガチャッ

何かが繋がるような音がして呪いが完成した。

「んじゃ、くれぐれもばれない様にな」

「ああ。…………フハハハハ今日は気分がいい、十夜付き合え!!」

「おつよ」

エヴァは酒を数本取り出し俺を誘う。

俺は快くその誘いに乗った。

その日は深夜まで宴会騒ぎが続いた。

【Touya side out】

【Other side】

誰もが寝静まった頃、そいつは世界樹の前に居た。

「あいつも難しいことを言う」

そう呟いた声は男のものだった。

彼は世界中に触れそつと呟いた。

「それにしても新しい世界を作る……か。あいつらしいな」

その男はローブから覗かせた顔は何処となく高畑・T・タカミチに似ていた。その男は静かに後ろへ下がった。

そこには元から何もなかったかのように誰一人存在していなかった。

【Other side out】

第十三話 解呪（後書き）

感想待ってます

第十四話 ドッチボール(前書き)

3
3
目
次

第十四話 ドッチボール

【Other side】

とある日、彼女達はバレーボールを楽しんでいた。

「それ」

ホンッ

「はい」

「ねーあの十夜君とネギ君が来てから5日経ったけど、みんな二人の「コト」どう思うっ？」

トッ

そうだったのは佐々木まき絵だった。

「と、十夜君は頼りがいがあるし良いんじゃないかな……
それにカッコいい」

「何か言ったアキラ？」

「な、なんでもない」

「ふうん、じゃあネギ君は？」

「ん……いーんじゃないかな。カワイイし……」

ボンツ

「そだね教育実習生として授業もがんばってるしね」

「でもウチら来年は受験やし子供先生じゃ頼りくない？」

「受験であんた私たち大学までエスカレーターじゃん」

「でもやっぱネギ君10歳だし、大人の高畑先生と違って悩み事な
んで出来ないよねー？年上の女として……」

彼女達はどうかやらネギ先生のことを評価しているようだ。

そしてその評価は年下の子供が先生をやっているという認識しかない
ようだ。

「逆に私たちがセンスの悩みを聞いてあげたりして？ぶぶぶ」

そう変な妄想を抱いているのは明石裕奈だった。

「アハハ経験豊富なお姉サマとしてー？体の悩みとか？」

バシ

「オトト……もーちゃんとトス上げてよねー……！」

「誰が経験豊富なお姉サマですって……？笑わせてくれるわね……」

「なっ!?!」

『あ……あなたたちは……!』

【Other side out】

【Touya side】

俺が屋上で昼寝をしているとバタンツ！！と甲高い音を立てて屋上のドアは開かれた。

「と、十夜君！！」

「大河内……さん？」

ここまで走ってきたみたいで息を切らしている。

「十夜君きて！！高等部の人たちが！！」

「ちよっ！？まずは落ち着いて」

「う、うん」

「何があったの？」

「じ、実は」

話を聞いたところこうらしい

大河内さんたちが使っていた場所に高等部の人たちが来て場所を横取りするために暴力を振るっているらしい。

「なるほど。よしじゃあ行くか」

俺たちが着いた頃にはアスナが高等部の人と言い争っていた。

「とにかく帰ってください。センパイだからって力で追い出すなんてちよつとひどいじゃないですか!？」

「……ふん言うじゃない。ミルクくさい子供のくせに。知ってるわよ神楽坂明日菜と雪広あやかね。中等部くせに色々出しゃばって有名らしいけど……センパイの言うことにはおとなしく従うことね。子供は子供らしく隅で遊んでなさい神楽坂明日菜」

カチンッ

「それにあんたたち、こんなかわいい子をクラスで一人占めするなんてずるいわよね。」

「くすっ」

ちゅっ?

高等部の連中はネギに口付けをして

「私たちにゆずらない?」

ブチッ

「誰がゆずりますかこのババアツ!!」

「今時先輩風吹かせて物事通そうなんて頭悪いでしょあんたたち！」

「なによやる気このガキーツ!!」

中等部の連中と高等部の連中がそれぞれ殴りかかろうとしたときに流石にまずいだらうと思いつめに入った。

「ストロップ!!」

「なによあんた!!」

「十夜止めないで!!」

「まさか……女子中等部に転校してきたって言う噂の男子！」

「どんな噂かは知らんが、神楽坂に委員長戻れ」

「でも(ですが)!!」

「いいから、それと高等部のあんたらちょっと先に生まれたからって図々し過ぎねえか？」

「そうだね。女の子が取っ組み合いのケンカなんてみっともない。君達も中学生相手にちょっと大人気なかったかな？」

「はい……………ふんっ」

「た、高畑先生！？で、でも悪いのはアイツらなんですよー」

「それでも手を出したら君の負けさアスナ君」

「おいタカミチ、何時の間に来たんだ？」

「さっき連絡を受けてね。助かったよ十夜」

「俺は戻るぞ。睡眠の途中だったからな」

「せめて次の授業には出てくれよ」

「気が向いたらな」

俺は再び屋上へと向かった。

【Touya side out】

【Asuna side】

私たちは今、体育の授業のため屋上のコートに来ているのだが・・・

「あら、また会ったわねあんた達。偶然ね？」

「むっ・・・・・・高等部2-D!!」

そう、昼間私たちの邪魔をしてくれたあいつ等がいたの!!

一体どういうこと!?

「私たち自習だからレクリエーションでバレーやるのよあんた達は？」

「わ、私たちもバレーよ!!」

「・・・・・・どうやらダブルブッキングしちゃったようね」

ダブルブッキングも何も・・・

「な、何でこういつもいつも・・・」

まったくよ・・・

「・・・って、あんたは何でそこで捕まってるのよネギ坊主!!」

「い、いえ、その、体育の先生が来れなくなったので代わりに来た
ら、あの……」

手足をバタつかせているネギを押さえているのは高等部の連中……

「とにかく今回は私たちが先よ。お引き取り願おうかし
ら神楽坂明日菜」

「……くつ、あなた達わざとでしょ!!あなた達の後者隣の
隣じゃない!!わざわざ中等部の屋上に来るなんて」

「へー今度は言いがかり?さすがお子ちゃまねー?」

「何ですってーッ!」

「ひびーい」

「高校生のくせにー!!子供みたいな嫌がらせだぞー!!」

「あなた達の方ががきじゃないのよーっ!」

「やる気!?かかって来なさいよこの中坊ー!」

「やっちゃえやっちゃえアスナー!」

「いい加減やめたらどうですか!」

言い争っていた私たちはいきなりの怒声で静かになった。

「高等部の人帰れ．．．．ここは中等部の校舎．．．．．そんなバレーがやりたいなら自分の校舎でやれ．．．．．」

さっきの怒声を振りまいたのはアヤカちゃんだったようだ。

そしてその後に高等部に言い放ったのがサキちゃん

「本当に．．．．．たく、高校生の癖にこんならぬことで．．．．．正直言つてウザインですけど」

「なっ!?!?」

次はアヤカちゃん。

．．．．．ってか二人のキャラが違うような気が．．．．

口調悪すぎ!?!

「お黙りなさい!?!ガキは年上の言つことを聞いていればいいのよ!?!」

高等部の人がそう叫んだ瞬間、違う場所から怒声が聞こえた。

「うるせえんだよ!?!」

と、アヤカちゃんとサキちゃんはあちやーって顔をしている。

それより一体誰が．．．．．

声がしたほうへ振り向くとそこには阿修羅がいた。

【Asuna side out】

【Saki side】

頑張ったがムリだったようだ……

私にしては口数が多かったからみんな驚いている

……十夜が起きてしまった。

彼は無理やり起こされるのが嫌いなのだ……

【Saki side out】

【Touya side】

「うるせえんだよ!!」

俺は今非常に機嫌が悪い。

何故なら気持ちよく寝ていたところを叫び声で起こされたからだ。

「……………またてめえらか……………」

俺が目を向けた先にいたのは昼間の高等部。

原因はまたあいつ等らしい。

「アヤカ、サキ何があった」

「えっと……………実はね」

そう説明しだしたのはアヤカだった。

（説明中）

「つまり高等部の連中が悪いわけだな」

「なっ!?!そつちが言うことを聞かないのが悪いんでしょ!?!」

「……………坊主、どつする?」

「えっ！？ぼ、坊主……で、ではこうしたらどうでしょう？両クラス対抗でスポーツで争って勝負を決めるんです」

「いいわよ。おもしろいじゃない。私たち高等部が負けたらおとなしくこのコートを出ていくし、今後昼休みもあんた達の邪魔はしないわそれでどう？」

「そんなこと言ったって年齢も体格もぜんぜん違うじゃん！！」

「ふん、確かにバレーではちょっと相手にならないわね。じゃあハンドをあげるわ。種目は ドッチボールでどう？こっちは全部で11人そっちは倍の22人でかかってきていいわよ」

「分か「まてまて、こっちも11人じゃなきゃ不公平だろ？」ちょっと十夜！！」

「考えても見ろ、こんな狭いコートに22人もいたって的になるだけだ。」

「あっ……くっ」

「ふん、ただし、私たちが買ったらネギ先生を教生としてゆずってもらうわ。いいわね？」

「な……」

「いいぞ、別に」

ポン ポポン

「ゴーゴーレッツゴー!! 2 - A!!」

「がんばれー!!」

「ってなんであんたが応援席にいるのよー!!」

「だってめんどいじゃん」

「いいから来る」

「……はあ」

試合に出るメンバーはこうだ

俺、アスナ、ネギ、委員長、大河内さん、明石、和泉さん、古菲、超、このか、佐々木さんというメンバーだ。

「試合開始!!」

ゴン

「あいた」

バシッ

「コラーッ」

「ノーバンキャッチセーフ！」

「足引つ張んじやないわよネギ坊主ーッ！ー！」

ビシュッ

ボン

「あたっ」

「アウト！」

アスナがネギに当たったボールをノーバンでキャッチし相手に当たったようだ。

「ナイスアスナー？」

「よろしいですわ！このケンカ絶対勝ちますわよー！」

「OK！ー！」

「あうっケンカじゃないのにーっ」

「……………はぁ……………今日も天気がいいな」

「高等部1名アウト！！内野の残り10名です！！」

「よしっ！このドッチボール勝負絶対勝つわ！年下だからってなめてると痛い目にあうんだから！！」

「ふ．．．やるじゃない．．．．．と言いたいところだけど何もわかってないわねあんた達。やっぱりそこの子供先生は私たちのモノのようね」

「行くよっ女子中学生の底力見せてやる！！えいっ！！」

ドガシィッ ギュルル．．

「えっ．．．」

「バカ力のアスナさんの全力投球を片手で．．．！！？」

「バカ力バカ力うるさいわよっ！！」

「フ．．．バカ力が自慢のようだけど．．．この程度で全力投球とは笑わせるわ」

「．．．．手がヒリヒリしてるように見えるのは俺だけか？」

「そもそもあんた達子ザルの集団が私たちに勝てるわけがないのよ。何せ私たちの正体はドッチボール関東大会優勝チーム麻帆良ドッチ部「黒百合」！！」

バサッと制服を脱ぐとユニフォームになった。

ってかそれ自慢できるのか？

「……………高校生にもなってドッチ部って…………？」

「関東大会あいつ等しか出なかったんじゃない？」

「小学生くらいまでの遊びとちゃうの？」

ヒソヒソ ボソボン

……………さすがにそれは可愛そうだろ……………

「う……うるさい余計なお世話よっ！！子ザルのくせにナマイキな
ビビ！しい！！トライアングルアタックよ！！」

「わかった英子！！」

「トライアングルアタックだって……………」

ぷーっ！！

「ネギ先生、気をつけて。私が受けてたちますわ！！さあ来なさい
おばサマ方。2・Aクラス委員長の雪広あやかがネギ先生をお守り
しますわ！！」

「くくくえっ！！」

ビッ

「キヤツ・・・」

「うりゃっ」

バシッ ビシッ

「あんっ」

バシッ ボンッ

「はい一人アウト」

「あうっ」

「いいんちよー全然ダメやん」

「く・・・パスの軌道が読めませんわ・・・トライアングルアタック・・・一体どんな陣形ですか？」

「だから三角形トライアングルやん」

「・・・これは見てて面白いな」

「わわやっぱり強いよー！！！！」

「残り9対10！！！！」

「・・・あつという間にハンデ分追いつかれてもった」

「っ、このままじゃ。負けちゃう・・・？」

「ふ……………」

「残ったのはほとんどチビとトロそうなのとやる気のなさそうなのばかり…………次の標的は神楽坂明日菜ね。しい！！アレ行くわよ！！」

「OK！」

ボンツ

「必殺　　太陽拳！！」

なっ！？まさかのドラゴン　ールネタ！？

「　　！！しまった！！太陽を背に…………！！？」

バシッ！！　バシィッ！！

「あたっ」

「ア、アスナーっ！！」

「アスナさんっ！？」

ポーン

「もう一撃」

バシンツ！！

「あんっ」

「なっ……二度も当てて!?!」

「何やひきよー者ー!?!」

今は……だめだろ……

「おだまり!どんな汚い手を使ってでも勝つ!?!それが「黒百合」のポリシーなのよっ!?!」

「ア、アスナさん大丈夫!?!」

……俺ら黒き翼でもそんなことはしない。向かってくる奴には容赦なく制裁を加えるが背を向ける奴には決して攻撃をしない。

これは人間として当たり前のことじゃねえのか?

「てて……かすり傷よ」

ゴオオオオッ

魔力!?まずいな

「な……何!?!この風は!?!」

(リック・ラク・ララック・ライラック……)

「コラネギ坊主！！余計なことしないでよ。それじゃあいつらと同じじゃない。あんたでしょスポーツ提案したのは……………」

(……………詠唱放棄)

「スポーツでするして勝つても嬉しくないのよ。正々堂々いきなさいよ……………男の子なんでしょ」

「あ……………アスナさん……………」

「ア……………アスナ……………」

「みんなごめんね後は頼んだ」

「あううううアスナがおらへんくなったらもーダメやー」

「もーオシマイだよー」

「み、みんなあきらめちゃダメですっ！！さっきアスナさんが言ったじゃないですか！！後ろ向いてたら狙われるだけだっ！！前を向けばボールを取れるかもしれないんです！！が……………がんばりましょう！！」

「ネ、ネギ先生……………」

「ネギ坊主……………」

「そ、そーだね負けたらネギ君あいつらに取られちゃうんだもんね」

「う、うんこのままなめられて終われないよ！！」

「よしー!!」

「そーだファイト!2-A!!」

まったく、ちゃんと先生やってるじゃないか

俺も少し力貸すか

「みんな!!いくよ!!」

「うんっ!!」

「フフ・・・往生際が悪いわね。もうあんた達の負けは決まってるのよ。」

「子供先生高等部のテキストはもう用意してあるからねー」

「クスクス・・・そもそも中学生が高校生に立てっこのつというのが・・・」

ピーー

「5秒ルール」

「・・・」

「・・・え?」

「こ、公式ルールブックによると5秒以上ボールを投げずに持って

いると反則ですー!!」

「ボールをこっちに渡してくださいです」

宮崎……あんなでかい声出せたんだな

「なっ……ルールブックも持たずに何言ってるのよ」

「テキストに言ってるんでしょ素人が!!」

「体育のルールブック集なら持ち歩いてますー」

「うっ」

「ほらよーせ」

「十夜君……」

「ちっ、ほら」

ボスッ

俺は高等部の連中が投げたボールをキャッチして、右手で鷲掴みにする。

「ん……そいつでいいか」

俺はショートカットの子目掛けてボールを投げる。

バシィン

「しまった！」

「ナイス十夜君！！！」

俺に続いてみんなそれぞれ相手にボールを当てていく

「くっこの位でいい気になってんじゃ……」

「むむっ！！！」

和泉が……

バン

「えーい」

バキィ ボン

「わっ」

「おおっ！！さすがはサッカー部！弾丸ボレーだ！！！」

ザッ

「私も……」

ダン

明石が……

バシユッ

「 Dank シュートおっ!! ちがつか! 」

ボン

「 あちやっ 」

「 裕奈はバスケット部やもんな! 」

「 ……この… 」

ポーン

「 !? 」

シユルッ

佐々木がリボンで

「 えいっ えいっ えいっ! ! 」

「 キヤ 」

「 あっ 」

「 あん 」

ポコポコポコ

「まき絵もすごいぞ!!さすが新体操部だ!!」

「ちょっとおそれこそ反則でしょ!!さっきルールブックとか言う
といて.....」

確かに.....それは反則じゃねえか?

「チャイナダブルアタック!!」

「ひっ」

「時間です!!試合終了ーッ!!」

「やったーッ」

「勝ったーッ!!」

「バ、バカな.....私たちが負けるなんて.....」

バツ

「まだロスタイムよっ!!」

あいつまだやるつもりか!?

バシッ!!

「危ないアスナさんっ!!」

「え？」

バチツ シュルルル

「危ねえじゃねえか。こればかりは見逃すことはできないな。オラッ!!」

バシイン

「!？」

ギユババババア ズバアッ!!

ボールはキャッチした高校生とほかの高校生の連中を巻き込んで吹き飛ばした。

「すごいじゃん十夜君!!何今の!!？」

「何の魔球アルか十夜!!」

「もっと早く出しなよっ!!」

「ははっ、あんまりこういう強行手段には入りたくなかったんだけどね」

「くっ、お、覚えてなさいよ!!」

高等部の連中はそそくさと逃げ出してしまった。

「あははは」

「やーい？」

「それじゃあ」

「改めて……試合終了ー！ー！ー！」

「やったーッ」

「高等部に勝ったー！」

「ホラ、先生と十夜君胴上げー！」

「俺もか!？」

「ホラホラ」

「あら……何だかうまくいったみたい」

「ハハハ、しかしあれはまだ先生と生徒というより遊び友達ですなあ」

「確かに」

「ひっ!?!と、十夜い、いつの間に」

「……………逃げてきた」

「あー十夜君あんなところにいた!?!」

「待てー!?!」

「やべっ、じゃあなタカミチ」

「ハハハ、がんばれ」

俺は何故か2-Aから逃げることになってしまった。

【Touya side out】

第十四話 ドッチボール（後書き）

感想待ってまゝす

第十五話 期末テスト（前書き）

四つ目

第十五話 期末テスト

【Touya side】

「キヤアアアッ」

「みんなーごめん」

「……………はあ」

俺は今、図書館島にいる。

何故ならば

「5時間ほど前」

「ネギ坊主に最終課題？」

「うむ、2・Aのテスト最下位脱出じゃ」

俺は学園長に呼ばれ、学園長室へ来ていた。

「それで、俺に何をしろと？」

「うむ、彼女たちは図書館島に行くじゃろつから、今日のみ監視してほしいのじゃ」

「嫌だ。何で俺がそんなこと」

「頼む。隠れてでもいいんじゃない」

「……………はあ、仕方ねえか。その代わり金よこせよな」

俺はそれだけ行つて学園長室を出た。

そしてその後、ネギ坊主たちが図書館島に行くのを見てこつそりあ
とつけてていたのだ。

〈回想終了〉

そして現在に至る。

ツイスターゲームでミスって落っこちているのだ。

「……………めんどいが、「眠りの霧」……………リク・ラク・ラック・ライラック 彼のものを守る綿となれ「温もりの綿」」

無詠唱で全員を眠らせ、「温もりの綿」で衝撃を緩和させ静かに地面に下ろす。

「……………はあ帰る……………!?この魔力は……………アルか。ちょっと顔出してくるか」

俺は魔力をたどりながらアルが居るであろう部屋の前に来た。

なんかドラゴンが居たから魔法の射手氷の1矢で凍らせておいた。

ギイイイイ

「よおアル」

「おやおや、まあまあ」

「……………なんだそのリアクションは」

「いえ、気にしないでください。それにしても久しぶりですね十夜。」

「ああ、そうだな。図書館島にきたらアルの魔力を感じてなちよつと来てみた」

「そうですか、それではそこから辺へ腰掛けておいてください。お茶を淹れますので」

「おう」

俺はソファーに腰掛け、アルを待った。

少しするとアルはお茶と何故かケン ツキーを持ってきて俺の向かい側に座った。

「おいアル、何故ケン ツキーなんだ？」

「美味しいじゃないですかケン ツキー。それより十夜、あなた今魔法世界で騒がれている黒き翼の噂を知っていますか？」

「ギクツ……な、何のことだ？」

「……はあ、やっぱりあなたでしたか。」

「……うるせえ文句あつか。俺はなああの腐った連中どもが気に食わねえんだよ」

「……MMの元老院ですか。」

「ああ、そうそれで俺がここに寄ったには実は訳がある。アル、黒き翼に入らないか？」

「……そうですね。しかし私はこの地から離れられない。いわゆる自縛霊みたいなものですが」

「おいおい、俺を誰だと思ってんだ？」

「フフフ、そうでしたね。いいでしょう私も黒き翼に入ることにし

ましよう
「

「そうかそうか。うむ、そう来なくってはな。さて用件は伝えたいし俺は帰るな。あと、学園長があいつらに何かしたら言ってくれ。ちよっと懲らしめるから」

「わかりました。それでは気をつけて」

「誰に物言ってるんだ？」

「（相手が可愛そうだからですよ）ハハハ、それではまた」

「おっ」

俺は扉を開け地上へと駆け戻った。

「え……ええ……ええ……っ!?何ですって!?!?2 - Aが最下

位脱出しないとネギ先生が首に~~~~~!!?ど、どーしてそんな大事な子といわなかったんですの桜子さん!!」

「あぶぶっ!?!?だって先生に口止めされてたから」

「とにかく皆さん!テストまでちゃんと勉強して最下位脱出ですよ!!そのへんの普段マジメにやってない方々も!!」

(朝からうるせえな)

「げ……」

「仕方ないなあ……」

「問題はアスナさんたち五人組ですわね。とりあえずテストに出ていただいて0点さえ取らなければ……」

顎に手を当てうんうんと考える委員長。

ドドドドド バンツ!

大きな足音が聞こえたと思ったら教室のドアが力強く開かれた。

「みんな!大変だよ!!ネギ先生とバカレンジャーが行方不明に……!!」

「え……」

今、クラス全員からやっぱりダメかも……!?!?という心の声が聞こえた気がした。

そしてテスト前日

俺は非常にいらいらしている。

ここ最近、俺にまわりつくのがいるのだ。

そして俺はそのままわりついていてる奴に後ろから抱き疲れているのだ。

「それで？一体何をしているんだ？」

俺は誰にも聞こえないような声で喋りかけた

(ひえ！？わ、私のことが見えるんですか！？)

「ああ、数日前から俺にまわりついてる……自縛霊」

(ひ、ひええええ！？は、恥ずかしいです！！「う、ごめんなさい。ついてつきり気づいていないものだとはかり……」)

「まあ、別にいいけどよ。相坂さよだっけか？話し相手にはなってるから抱きついたりはするな。俺が恥ずしい」

(は、はい……！)

..... はあ、問題が解決してよかったのか悪かったのか.....

そして翌日、期末テスト当日

キーンコーンカーンコーン

「もう予鈴が鳴ってしまいましたわよ！あの五人組はまだ来ませんの！？」

「まあまあ、落ち着きなよ！委員長」

「そうです。彼女たちはそのうち来るでしょうから」

「アヤカさんにサキさん！！あなたたちはネギ先生が首になってもいいって言うんですの！？」

「そんな事いってないけど.....」

アハハと苦笑するアヤカを遠目で見ながら先生が入ってきたのに気

づく

「ほら、君たちテスト始めるから早く席について」

「くっ……このまま5人分全教科が0点扱いとなると……
いくらバカレンジャーとはいえ2・Aの平均点は大幅に下がってしま
いますわね。そうなれば最下位は確実。ネギ先生はクビに……
……みなさん!!今回は一人15点増しでよろしく!!」

「ムリだつて!」

「……はあ、馬鹿馬鹿しい。誰もクビにするなんていつてな
いだろうに。試験内容は最下位脱出したら正式な先生にしてあげる
だろ?ミスったら教育実習生としてまた過ごすだけだろうに……
……はあ、憂鬱だ。」

「あつ見て!!バカレンジャーたちが来たー!!図書館組とネギ先
生も一緒よ!」

まったく、仕方ないテスト本気でやってみるか。

「アスナーっ早く早く~~~~~っ始まっちゃっよ!!」

「コラそこ席に着きなさい」

「では始め。試験時間は50分です」

さてはじめ・・・・・・・・エヴァンジェリン・・・・・・・・やるきねえだろ・・・・・・・・

(おいエヴァ)

(わっ!?!な、なんだいきなり!!)

俺が念話で話しかけるとエヴァは大層驚いたようにして言い返す。

(まじめにやったら今度どこかに連れてってやる)

(なに!?!それは本当か!?!よし今回だけは真面目にやってやる!
!感謝しろ!!)

俺は念話を切って、テストを眺める。

カリカリ

カチツカチツカチツ

そして俺は10分で夢の世界へと飛び立った。

キーンコーンカーンコーン

「終了 筆記用具置いて

」

「ん?終わったか・・・・・・・・フワアア」

俺は大きなあくびをする。

その後、俺はアヤカとサキ、エヴァと絡繰さんと一緒にトトカルチヨをしたりしたり、雑談をしたりした。

何故かエヴァとアヤカとサキが握手をしていたのには驚いたが

ちなみに俺は2 - Aに1000枚の食券をかけた。

俺の感がそう呼びかけていたからだ。俺の感は結構当たるからな、いい意味でも悪い意味でも

そんなこんなでクラス成績発表日

「はぁ眠い」

「十夜、さっきからそれしか言ってないぞ」

「私の記録では23回目です」

「ははは、十夜〱寝てないの？」

「睡眠不足は体に悪い」

「ん？寝る暇がなくなてな」

俺はただいまエヴァ、絡繰さん、アヤカ、サキの5人で食堂にいる。

「あっそうだ絡く「茶々丸です、十夜さん」……え？」

「茶々丸とお呼びください。」

「お、おう。それで茶々丸今週の日曜あいてるか？エヴァと出かけるんだが一緒に来るか？」

「え、えつと「おい十夜！！二人っきりのデートではなかったのか！？」……」

「俺はそれでもいいんだけどいつもエヴァと一緒にいる茶々丸が一人で家にいるって言うのも可愛そうじゃね？」

「え、えつと私はいいので十夜さんとマスターの二人で行ってきてください」

「そうかそうか。茶々丸はえらいぞ」

うんうんと顔を上下に振るエヴァを見て思わずため息が出てしまう。

「わかった。じゃあ週末は二人で遊びに行くか。それとアヤカ、サキ何故そんな目で俺を見つめる……」

「エヴァちゃんだけずるい！！私も十夜と遊びに行きたい！！」

「アヤカに同意……」

「ハハハ、また今度な」

俺は二人を軽くあしらい飲み物に口をつける

「最下位確定……………！！？」

「ぶうううー……ゴホツゴホツ！な、何だ一体！？」

俺は思わず飲んでいるものを出してしまいアヤカにかけてしまった。

「うう……十夜のバカ……………」

「ああ！？わ、悪い。ほらこれ羽織って」

俺は着てた制服をアヤカに掛ける。

「あゝ十夜の匂いだ」

ん？俺ってそんなに匂いを放っているか？

「まあいいか。それより悪かったなアヤカ。今度何か奢るよ」

「うん。うん。ありがとう」

『学園長のミスにより点数再計算・・・2 - A平均点81 -
0点。なんとトップは2 - Aです!!』

「・・・マジか・・・」

「十夜、貴様食券何枚掛けた？」

「・・・1000枚」

「・・・」

「すごいね・・・」

「・・・どうしよう?一生あっても使い切らない気が
・・・」

そんなしまらない終わり方で期末テストは幕を閉じた。

【Touya inside out】

「本にまかせよう」

第十五話 期末テスト（後書き）

感想待ってます

第十六話 デート！？（前書き）

五つ目

第十六話 デート!?

【E v a n g e l i n e s i d e】

うふふ、明日は十夜との……………デートだ!!

自分でもわかるくらいに頬が緩んでいる。

さあどんな服を着ていこうか？

「マスター今まで以上に楽しそうです」

「むっ、茶々丸か……………そうだ、茶々丸明日はどんな服を着ていけばいいと思う?」

「そうですね」

私は明日のために茶々丸に服を見繕ってもらうことにした。

【E v a n g e l i n e s i d e o u t】

【T y a t y a m a r u s i d e 】

マスターは明日、十夜さんと出かけるそうです。

今日のマスターはいつも以上に楽しそうでした。

着る服を選んでいろいろです。

マスターフォルダーに保存しておきましょう。ロックを何十にも掛けておきましょう。

【T y a t y a m a r u s i d e o u t】

【Touya side】

今日はエヴァと二人で出かける。つまりはデートという奴だ。

「さてと、そろそろ行くか」

俺が玄関へ向かい、外へ出ようとしたときに携帯がなった。

pipipipipi

「はい、もしもし」

『ああ、俺だ。今、麻帆良に来てんだが悪魔が出た。それも三体。全員公爵級だ。俺も追跡するが気をつけるよ』

「ああ、サンキューな。お前も正体ばれないようにしろよ」

『わかっている。じゃあな』

「おっ」

pi

そういつて電話は切れた。

「さて、今度こそいくか」

俺は今度こそドアを開け、待ち合わせの場所へ向かった。

俺がつくとすでにエヴァはその場所にいた。

「エヴァ悪い。待ったか？」

「い、いや今来たところだ」

「そっか、そりゃ良かった。さて行くか。あっ、それとエヴァ」

「な、なんだ？」

「その服似合ってるぞ」

「ほ、本当か!？」

「あ、ああ。可愛いぞ」

「そ、そうか。そうかそうか。可愛いか……」

俺はエヴァの前で手を振る。反応がないただの屍のようだ……
じゃなくて

「行くぞエヴァ」

俺はエヴァの手を引いて歩き出す

「あ………//////」

エヴァの顔が赤くなっているように見えたが気のせいということに
しておこう。

俺達が今日行く場所は近くに新しくできた遊園地だ。

さて、張り切っていきましょうか。

「キヤアアアアア！！は、早いぞ！！早いぞ十夜！！」

「お、おう」

「おおー学園が一望できるぞ！！」

「そーだな」

一通り遊び、そろそろ日も落ちてくるといふこともあったので帰路へついた。

エヴァはというと俺の背中でグツスリだ。

なんだかんだで楽しんでくれたようで良かった。

そして俺は油断していた。朝に聞いたあいつの言葉も忘れて。

「クツクツク、やっと見つけたぞ神崎十夜」

「なっ!?!」

いつの間にか三体の悪魔に周囲を囲まれていたのだ。

「焦るなジユドウ。今日の私たちの目的は敵の戦闘能力の計測だ」

「……………」

「わーってるよセラス。さてランも準備はいいか？」

「……………」(コクッ)

「じゃあ行く」やっと見つけたぞ!!」…………ちっ」

上から黒い表面に白い糸で刺繍をしたローブを被った者たちが数人飛んできた。

「よお、あいつらか? もぐりこんで来たって言うのは?」

俺はある一人に問いかける。

その者はローブから顔を覗かせる。その顔は何処となくタカミチに似ていた。

そうガトウ・カグラ・ヴァンテンバークだ。朝、電話をしてきたのもこいつだ。

「ああ、あいつ等全員、公爵級だ。このメンバーならやれん事もないが些か時間がかかる」

「……………ふむ。ならエヴァを頼む」

「こいつは『闇の福音』!？」

「おいおい、俺の昔のこと忘れたのか？」

「……………そうだったな。福音は俺たちが全力で守る」

「頼むぜ。さーて、待たせたな。どっからでも来いよ」

俺は挑発するように悪魔三体に向けていった。

【Touya side out】

【Serassu side】

一体何が起こったのだろうか？

「さーて、待たせたな。どっからでも来いよ」

私たちはその挑発に乗り、標的（神崎十夜）に襲い掛かった。

しかし、いつの間にか何が起こったかわからないうちに吹き飛ばされていった。

これでは致し方ない。ほとんど何もわからなかったが一つだけ分かったことがある。

こいつは“バケモノ”だと言うこと。

このままではやられるのも時間の問題。

「ジユドウ！！ラン！！撤退だ」

「ちっ……しかたねえ」

「……」(コクッ)

私たちが逃げる間、彼は何もしてこなかった。

【Serasu saide out】

【Touya side】

「さて、行っちまったな。」

「ああ、だがまあここで追いかけたら俺たちの信条に反する」

「その割にはさっき追いかけていたじゃねえか」

「いや、アレは追跡だ。別にあいつらが逃げ帰ろうとしていたわけじゃねえからな」

「そうか？まあいいや。んじゃ、俺は帰るよ………あつ！
？そうだ、お前あの計画は？」

「ああ、順調だよ。もうすぐでゲートが完成する」

「そうか。早く助けてやらないとな」

「ああ」

俺たちはそれだけ行って逆方向へと歩みだした。

メンバーの数人には会釈をされた。

【Touya side out】

【Other side】

「様。奴はバケモノです！！やはりこの計画は不可能な
では……」

『セラスよ。私はこの計画を遂行させなければならない。すべての
悪魔のために』

「でもよ。マジであいつはバケモンだぜ。俺らが知らず知らずのうちに吹き飛ばされていたんだからな」

「・・・・・・・・・・強い」

『お前たちがそこまで言うんだ。さぞかし強いんだろうな。私が出なくてはならんかも知れん』

三人の悪魔は画面の中に移る男に報告をしているようだ。

そして画面の中に移っているのは・・・・・・・・・・子供だった。

【Other side out】

第十六話 デート！？（後書き）

感想待ってます

第十七話 終了式（前書き）

ラスト

第十七話 終了式

【Touya side】

陽あたり良好！

さてはて、このネタを知っているのは何人いただろうか？

ともかく今日は終了式なのである。

「うーん。いい天気」

「終了式日和だなー」

俺は珍しくネギたちと一緒に登校している。

それにしても……………走る事はないんじゃないか？

「おはよーネギ君」

「?早!」

「おはよーございます」

「ネギ君おっはよー?」

「おはよー桜子さん」

そんなこんなで人数が増えてくる。

「おはよーございます。えーと……長谷川さん!」

「……」

「おはよー長谷……ちうちゃん」

「てめえ言い直してんじゃねえ!!ってか何で知ってるんだよ!!」

「いや、まさか本当だとは……」

実は昨日、まほネットへ入った後、ネットサーフィンしてたらちうちのHPなる物を見つけて入ったらどこか知り合いに似ているような顔があり眼鏡とにきびを付け足したら

「長谷川さんの顔になったから」

「どっしたんだよいきなり!!」

「ん?なんでもない。それでちうちゃんは何で素顔隠してんの?」

「……………千雨だ。」

「ああ、わりい。千雨な、千雨。よし、それで？」

「私は上がりしようなんだ。眼鏡がないとどうも人前には出られない」

「そっか、ふうん。じゃ俺は遅れる前に行くわ。んじゃ」

「お、おい！！待てよ」

〈終了式〉

「フオフオフオみなにも一応紹介しておこう
新年度から正式に本校の英語科教員となるネギ・スプリングフィールド先生じゃ。
ネギ先生には4月から「3・A」を担任してもらおう予定じゃ」

マイクで学園長が話し、盛大な拍手が巻き起こった。

「とうわけで2・Aの皆さん。3年になってからもよろしくお願
いします!!」

ぺん

「よろしくネギ先生ーっ?」

「先生こっち向いてこっちッ」

はあ、うるせえな………寝るかな。

「ほら見て~~~~っ学年トップのトロフィー!」

「おお~~~~っみんなネギ先生のおかげだねーっ」

「ネギ先生がいれば中間テストもトップ確実だーっ?」

「………何故?」

「それは私も思った」

「私も………」

いつの間にか後ろにいたアヤカとサキから同意の声が上がった。

エヴァはいつものとおり屋上でサボっている。

「そのとおりですわ先生&皆さん。万年ビリの2 Aがネギ先生を中心に固い団結力でまとまったのが期末の勝因！クラス委員長としても鼻が高いですわ」

「そつえば十夜って何点だったの？」

「私も気になる」

「俺？五教科で500点。順位は1位」

「……聞かなければよかった」

「同じく……」

「今後とも私たちクラス一同よろしくお願いします。ネギ先生委員長はネギの手に口づけをする。」

「は、はい。こちらこそ」

「はあ、このクラスのテンションにはついて行けん」

「あはは、確かに疲れるよね」

「同意……」

「ハイッ！先生ちよつと意見がー」

「はい鳴滝さん」

「先生は10歳なのに先生だなんてやっぱり普通じゃないと思います！」

むっ、認識障害が聞いてないのか？

「アヤカ、サキまさか……………」

「うっ、違う気がするんだよね」

「えーと……………」

「それでふみかと考えたんですけど、今日、これから全員で「学年トップおめでとパーティー」やりませんか?！」

「おーそりゃいいねー」

「やるーやるー?」

「じゃヒマな人、寮の芝生に集合！」

ズドォ!! ゴツツ!

俺、アヤカ、サキと誰かもう一人が同時にズッコケタ。

「いてて、前振り何にも関係ねえじゃねえか……………」

「あはは……………」

「・・・・・・・・・・バカばっか」

「それよりも・・・・・・・・」

俺はもう一人のズッコケた人のほうを向く。

長谷川千雨。あまりクラスでも目立たないほうだが実は超人気ネットアイドルと言う裏の顔を持つ少女だ。

「なあ、アヤカ。千雨は認識障害が効いてないのか？」

「・・・・・・・・・・えっとね、とつても言いにくい事なんだけどね、ずつといつ言おうか悩んでたんだけどね、原作知識殆どと消されちつたばいんだよね」

「・・・・・・・・・・使えねえ」

「あああ！？そ、そんな〜見捨てないでよ〜！！ち、千雨ちゃんは認識障害が効いてなかったと思うよ！！そ、そこは覚えてるから！！」

「よーし、偉いぞ」

俺は軽く流し、アヤカの頭をなでる。いつの間にか千雨は教室を出て行っていたようで居なかった。ついでにネギ坊主も居なかった。

「さて、俺たちも帰るか」

「うーん、パーティーには出席しなくてもいいの？」

「ああ、めんど」突撃!!」「です」「!?!」

トン

俺は危険を感じて、後ろへ飛びのいた。

すると、俺が今までいた場所には鳴滝姉妹が突っ込んできていた。

「十夜兄いも行くよ!?!」

「いくです〜!?!」

俺はジト目で鳴滝姉妹の発射口を見る。

そこにいたのは大河内さんで、明後日の方向を向いている。

「わーった、わーった。行くから。その前に屋上に行かせる。俺だけ行くんじゃない不公平だ」

「わかったよ〜」

「早く言ってくるですよ〜」

俺は屋上へと歩を進めた。その後ろにアヤカとサキが勝手についてきたことを記述しておこう。

ガチャッ

俺が屋上の扉を開けると当たり前のように茶々丸に膝枕されているエヴァ。

俺は気持ちよさそうに寝ているエヴァの首を掴むと屋上から下に落とされた。

「ん？うわっ！？お前何をする！！」

「茶々丸、寮前の芝生でパーティーするそうだから先言つてくれ。エヴァは俺が責任もって（痛めつけてから）連れて行くから」

「はい、わかりました。それではまたあとで」

ガチャッ

茶々丸は静かに屋上を出て行った。

「十夜！！貴様、私でなかったら死んでるところだぞ！！」

早急に上に上がってきたエヴァは文句をたれている。

「俺が珍しくHRに出たって言うのにお前は何だ？屋上で昼寝か。いいご身分じゃないか」

「なっ！？そんなところを掴むな！！っ！？そ、その関節はそっ
ちには……………」

「いいだろ？どうせすぐに戻るのだから」

「ぎゃあああああああ!!??.?」

その日の屋上に絶叫が木霊したと言つ。

「あつ、十夜兄いだ!!」

「本当です」

「よっ、お前ら」

俺は仕方なく、仕方なく寮前の芝生に来ていた。
で二回言いました。

大事なことなの

「ねえねえ、その背中に乗ってるのってエヴァちゃん？」

「ん？ああ、屋上で寝てたから無理やり連れて来た」

いつの間にか後ろに回っていた明石が言う。

「遅れてスイマセン」

ん？ネギが来たかってアレは！？

「十夜……あれ……」

「ああ、間違いない。100%千雨だ。」

「やっぱりか」

「……少し同情する」

「あはは」

俺は先の答えに苦笑するしかなかった。

「遅いよ先生」

「アレー？誰そのカワイイ子は」

「わーホントにカワイイー？」

「へへへ」

「まさか先生の秘密の恋人とかー？」

「バニーだ」

「バニー」

「てゆうーかコスプレ？なんか隠し芸でも見せてくれるの？」

これだけ人が多いとどれが誰だかわからんな……

上から風香、椎名、和泉、ネギ、釘宮、風香、史伽、早乙女の順だ。

そして何故、ネギが照れてる？そして千雨の精神が不安定にならんか心配だ。

「な……ちよ……」

「ちよつとネギ、その子もしかして……」

ん？アスナは気づいたのか？

「ちよつと先生や、やっぱり返してよメガネ！」

「あつ」

「ん？」

「は……は……」

マズッ!?

俺は千雨の前に神力で不可視の盾を瞬時に作る。

「はくしゅんっ!!」

ネギがくしゃみをしたと同時に強烈な風が吹き荒れる。

それと同時にスカートも捲れ上がる眼福眼福

「・・・・・・・・何とか間に合ったね」

「・・・・・・・・」

「な、何今の風!？」

「すごい風だったなあ」

「って、アレ?あんだ長谷川じゃ・・・・・・・・?」

「ち、ちがっ」

「ホントだ千雨ちゃんだーっ」

ありゃりゃ完璧にばれてるよ

「違っっ!!長谷川なんて女は知らねーっ!!一切関係ないっば

」

はあ、そろそろ助け舟でも出すか。

「よう、ちうどうしたんだ？ああ、みんな紹介するよ。こちら谷川ちう。俺の知り合いなんだ。千雨に似てると思って話しかけたらまったくの別人でさー」

俺は千雨に目で話を合わせると訴えかける。

「…………ちうです。それじゃあ私はこれで」

そついうと千雨は走って帰っていった…………というより逃げた。

「そついえば千雨の姿が見えないな。俺ちよつと呼んでくるよ」

「十夜兄いお願いするです」

その後、俺は制服に着替えた千雨を連れてきてパーティーを楽しんだ。

【Touya side out】

第十七話 終了式（後書き）

感想待ってます

第十八話 黒幕・・・・・・・・・・そしてどぴんロケットー！

【Touya side】

今日、俺はとある場所を訪れていた。

入り口もなく、出口もない。

ましてや窓なんてもってのほか。

ここはそういう場所だ。

俺たちが秘密裏に動くための・・・・・・・・

そう、ここは黒き翼本拠地。選ばれたものしかここに入ることはいかない。

今日ここに来たのはゲートと俺の作った世界をつなげるためだ。

ちなみに黒き翼の人数は全部で300人近くいる。

ある意味、ひとつの組織として成り立っている。

「ガトウ、ゲートは何処だ？」

「そう焦るな、こつちだ。ついて来い」

「ああ」

俺はガトウに促されるまま、ついて行つた。

案内されてついたのは、警備が通常の何倍にもなっている部屋だつた。

真っ白な部屋に魔方陣が書かれており、その真ん中にスロットマシンのような機械が置いてある。

「これか………」

「ああ、苦勞したぜ。まさか世界を作るだなんて言い出すとは……
……な」

「ああ、俺も疲れたぜ。今の世界の状況は植物は存在しているが動物は存在していない状態だ。川の流れもちゃんとあるし雲だって流れている。風もある。こちらとなんら変わりない世界だ。ただ、作られた世界だと言うことを除いては」

俺の言葉にガトウは間髪いれずに返答してくる。

「おいおい、この世界も最初からあつたわけじゃないんだぜ。誰か

が作ったからここに存在しているんだ。」

「ふっ……それもそうだな。さて作業を始めるか」

「ああ、待て、今起動するか『ブウウウウウウウウ侵入者！！侵入者！！全員戦闘体制へ！！気を抜くな！！ここへ入ってきたからには強敵だぞ！！』………残念ながら問題のようだ」

「ああ、まさかここに入ってくるとはな………」

俺らは壁についているモニターを見た。

そこには慌しく動くメンバーの様子が……

ここは俺が魔法の力と神の力の両方を使い作った場所。美琴たちが前にいた学園都市の統括理事長アレキスター・クロウリーが居た、通称窓のないビルを基本に作っている。そのため強度も申し分なく侵入者対策もばっちりな筈。その網を掻い潜ってきてるこいつは相当のやり手だろう。

それに、先ほどから鳴り響いて止むことを知らないブザー。

ドガンー！！

突如、後方から大きな音がした。

俺らが振り向くとゲートは粉々に粉碎されていた。

「やあ、始めましてかな？神崎十夜」

「ガトウ、あいつらを非難させる。ここは破棄だ。お前……
何者だ？」

俺はガトウにそう伝えた後、突如現れた謎の男に問いかけた。

「何者……か。私はあなたの敵であり、セラス達のボス。黒幕
と言ったところかな」

「で、その黒幕さんとやらは俺に何の用かな？」

「ああ、君に計画を手伝ってもらいたくてね」

「計画？その計画とは何だ？」

「それは悪魔や魔物たちがこの世界で安心して生きていけるように
する計画さ」

「人間との共存、もしくは人間の虐殺。前者であってほしいもんだ
ね。まあ答えはどっちにしるN.Oだ。」

「そうか、それは残念だよ。それではまた日を改めさせてもらおう
か」

そういうと悪魔は自らの影に入って消えた。

「ちっ、逃がしたか」

「十夜！！総員退避完了したぞ」

「そうか……これじゃあ、このゲートは使い物にならないな」

「……仕方がない……か」

「十夜……これからどうする？黒き翼の名前ではまたいつ何時、襲撃されるかわからないぞ。さっきの悪魔のこともあるしな」

「ああ……我ら黒き翼は漆黒の月夜と名を変えて活動することにする。黒き翼は壊滅、全ての者が死んだ。漆黒の月夜は構成不明、無所属の傭兵団として活動することにする！そして我らの本拠地は……別世界。無の神殿だ」

無の神殿とは俺が昔、神界を旅している時に見つけた場所。その技術はすば抜けていて周りとはまったく違う。あそこなら安全だ。だがその反対に危険だ。あの場所にたどり着くにはいろいろな罠がある。一度あそこにゲートを作れば転移で移動できるが無の神殿には少人数で行ったほうがいだろう。多くて俺とガトウを入れた10人。負傷者を出さないためにも俺が確実にあの場所へ案内しなくてはならない。あそこ周りには結界が張ってあり迷い込んだら二度と出られない。いわば伝説の聖地である。

「御意に。すべては我らがリーダー、神崎十夜に……無の神殿か、お前が大戦時代一回だけ俺らに話してくれたことがあったな。その周りは自然で溢れ返っておりドラゴンや龍種など様々な絶滅危惧種が大量に存在しておりいろいろな世界の生物が人間に邪魔されることなくのびのびと生きていると。精霊もいるとか言っていたな、そして神殿内はまさに聖地……自分で言うのもなんだが俺たちをそんなところに連れて行ってもいいのか？」

「……ああ、一度行くだけだ。お前たちじゃ二度と行けないよ。まあ俺が行くときに一緒に行く事はあるかもしれないがな。それに何より俺はお前たちのことを信じている。ゲートも繋げたら

すぐに術式を組んで転移魔法に取り入れ、そのまま帰る。だからお前らがあの神殿を見られるのは一回だけだ。よく見ておくんだぞ？言葉に表せないくらい綺麗だからな」

麻帆良学園に帰ってきた俺は一人、世界樹広場まで来ていた。時間はすでに夜の11時を超えている。

俺は影の中からスタンド二本とエレキギター、エレキアコースティックギター、エレキベース。それとアンプ、エフェクター、ピックを取り出した。

長年、ほったらかしにしていたから絃が錆びていると思ったが、さ

すが影の中。時間と言う概念がないので入れたときのままであった。

俺はまずアコギを手を取った。

アンプにアコギを繋ぐ。そして慣らし始める。

(あいつは一体何者なのだろうか？原作に登場していたのだろうか？それともシヴァの仲間……はたまたイレギュラーか……)

そんなことを考えながら慣らししていく。

「……………やるか。」

俺が弾く曲はGirls Dead MonsterのMy songだ。

ジャンジャカジャンジャカジャンジャカジャンジャン〜ジャンジャカジャンジャカジャン〜

「苛立ちを何処にぶつけるか 探してる間に終わる日

空は灰色をしてその先は何も見えない

常識ぶってる奴が笑ってる 次はどんな嘘を言う？

それで得られたもの大事に飾っておけるの」

夜、静かなこの場所に曲が響く。

「でも明日へと進まなきゃならない

だからこう歌うよ」

俺はすでに襲撃者のことなんて忘れていた。音楽は人を変える力がある。

「泣いてる君こそ孤独な君こそ

正しいよ人間らしいよ

落とした涙がこう言うよ

こんなにも美しい嘘じゃない本当の僕らをありがとう」

すでに自分だけの世界に入っていた。

間奏を弾き終える

「かなえたい夢や届かない夢があることそれ自体が

夢になり希望になり人は生きて生きるだろう

扉はあるそこで待っている

だから手を伸ばすよ

挫けた君には

もう一度戦える強さと自信とこの歌を

落とした涙がこつこつよ

こんなにも汚れて醜い世界で出会えた奇跡にありがとう

ジャ〜ンジャジャンジャンジャンジャジャンジャ〜ン

パチパチパチパチ

「えっ？」

俺は弾き終わつたと同時に聞こえた複数の拍手に驚いた。

周りを見渡すといつの間に集まったのか2-Aのメンバーが集まっていた。

「い、いつの間に……………」

「お上手でしたわ十夜さん。今のは何と言う曲ですの?」

委員長の問いかけに少しまどろみになりながら答える。

「あ、ああ。今のはMy Songと言う曲だ」

「これは黙ってられないね桜子、円、亜子準備はできてる?」

「OKだよ美砂」

「うちもOKや」

「私も大丈夫だよ」

四人のほうを向くといつの間にかそれぞれ楽器を持っていた。

寮から離れているとはいえこんな時間にそんなに騒いでいいのか？
まあギター弾いてた俺が言えることでもないけど……

柿崎と釘宮がギター、和泉がベースで、椎名がドラムだ。

四人は演奏を始める曲は………God knowsだ。

「ほら、十夜君も」

ぼーっと眺めている俺に柿崎が声を掛けていた。

俺は顔を緩めてベースを取った。

ボンボンポボンボン

ベース特有の重低音が流れる。

そしてサビに入る。

「私ついていくよ

どんな辛い世界の闇の中でさえ

きつとあなたは輝いて

越える未来の果て

弱さ故に魂壊されぬように

my way 重なるよ

いまふたりにGod bless . . .

ボ〜ン

ジャジャン

演奏が終わる。

「いや〜十夜君上手すぎやわ〜。うちの音あんまり聞こえへんやっ
たやろ」

「そんなことないよ和泉さんのベースの音も綺麗だったよ」

「和泉さんなんていややわ。うちのことは亜子でいいです」

「ああ、わかったよ亜子」

「皆さんすごいです!!とっってもお上手でした」

ネギが話に割り込んでくる。

「おうネギ。でもいいのか?こんなことしている俺たちが言つのも
なんだけどこんな夜中に騒いでるのを注意しないで」

「あつ！？そ、そうでした！！みなさん寮に戻ってください！！神崎さんも早く寮に戻ってくださいね」

「おーっす」

俺は片付けを始める。

それにしてもどうしようか・・・途中まで運んで人がいなくなったら影の中に入れるか。

「十夜君！！物は相談なんだけど・・・」

「ん？どうした柿崎」

「・・・私と付き合わない？」

「・・・遠慮しておく」

「あ〜ん、そんなつれない事言わないで〜」

「違うだろ！！」

釘宮からの強烈な突込みが柿崎に入った。

「で？本当は？」

「でこぴんロケット・・・私たちのバンドの名前なんだけど・・・入らない？」

「うまい人が一人でもいてくれたらさ私たちももつと上手くなれると思うんだ」

「十夜君お願い!!」

「うちからもお願いや」

「うくん、いいよ。でも俺、活動に出られないときもあると思うがそこは許してやってくれ」

俺はでこびんロケットに入ることを了承する。

「くくく やった〜」

四人は飛び上がって喜ぶ。

「そんなに嬉しいことでもないと思うけどな？」

「そんなことないよ。あつ、それと彼氏の件ちゃんと考えておいてね」

「あれ、本気だったのか……まあ、これからよろしくな柿崎、椎名、亜子……くぎみ」

「くぎみー言うな!!」

「くくく アハハハ」

「それじゃあ私たちは行くね」

第十八話 黒幕・・・・・・・・・・そしてでじびんロケットー!! (後書き)

感想まっています

第十九話 お見合い・・・・・・・・誓約

【Touya side】

〜新学期前日〜

俺は学園長にメールで呼び出されていた。

内容はこうだ

今日はお日柄もよく・・・・・・・・まあこんな前置きは置いておいてじやな、これから正装をして学園長室まできてくれんかのう？とつても大事な話があるんでの

学園長より

こんな感じだ。俺はいつもとは違うメールに若干戸惑いを覚えていた。だがしかし行かないに越したことはないと思いきや正装をして学園長室へ向かっていった。

そこで俺は曲がり角を曲がってきた女性にぶつかってしまった。俺は大丈夫だった。が女性のほうがぐらついてしまい倒れかけていた。

俺は女性の手をとってバランスを取らせる。

「大丈夫ですか？」

「すみません。うちが前を見てなかったばかり……ってなんや、とうちゃんやないか。びっくりしたわ」

「びっくりしたのはこっちだよ。綺麗じゃないかこのか」

「いややわ、とうちゃんもカッ」ええで

「ありがとう。それよりそのとうちゃんて如何にかならんのか？せめて十夜にしてくれ」

「む」

このかは顔を膨らませてこっちを見てくる。

「木乃香さまー!？」

「どこですか!？」

遠くのほうから男の声がする。

「あっ、アカン。じゃあうちを逃がしてくれたら呼び方、十夜君にしてあげるわ」

「んんんんしゃーなしだな。よしっ、ちよつと失礼」

俺はこのかをお姫様抱っこして塀の上に上り屋根に飛び移り掛け抜ける。

そして最終的に2-Aの教室に落ち着いた。

そして俺はこのかからとんでもない事を聞いた

「え？お見合い？」

「そーなんよ。おじーちゃんがお見合い趣味でな〜いつも無理矢理すすめられるんよ。ウチ中2やのにフィアンセとか言ってるな〜。今日はお見合い用の写真撮らされる所やったんけど途中で逃げてきてもーた。お見合いする人が一人来る予定やったらしいけど」

「……………まさか！？あのジジイ……………」

俺はある事に気がついて顔を歪める。

「どうしたん？十夜君」

「ああ、俺なさっきあのジジイに正装して来いっつわれてな……………このかとお見合いさせる予定だったらしい」

「ああ、相手は十夜君だったんか……………ほんなら良かったのに」

「ん？何か言ったか？」

「う、ううん。な、なんでもないで」

「そっか」

「……まだウチ子供やのに……将来のパートナー決めるなんて早すぎると思わへん？」

俺は考える。どうやってあのクソジジイに報復するか

「そーだな。まだ早いよな。……そうだ。俺がジジ……学園長に言ってもうお見合いはさせなくしてもいいが……このかがそれで良いならな」

「ほんま！？ウチ嬉しいわー。ありがとう。十夜君」

「おう、任せろ。それとこのかいつまでもその姿じゃ風邪引くだろう寮に戻って着替えて来い」

「うん、ほなよろしくな」

「ああ」

俺はこのかが去っていく後姿を見送って呟いた。

「さーてあのクソジジイ……どうやって料理しようか？俺の幼馴染お見合いに勝手に出すとはいいい度胸してんじゃねえか……クックック」

ズシヤズシヤ

「ひっ！？な、何じゃ！？」

ズシヤズシヤ

見えない斬撃が学園長室の机を襲つ。

カチッ

学園長の首下に2mほどの長い刀が突きつけられる。

「さて学園長・・・いや、近衛近右衛門・・・聞かせてもらおうか？なぐに簡単なことだ。このかの見合いを今後一切このかの意味以外でやらないことを誓う。もしくはここで俺に切り刻まれる・・・
・・・さあどちらが良い？」

カチッ

学園長の首から少量の血が流れる

「ひっ！？ぜ、前者じゃ！！こ、このかにムリなお見合いはさせん！！じゃからどうか命だけは！！」

「言ったな？ではこの誓約の書にサインしてもらおう」

「う、うむ」

スラスラスラ

「確かに見届けた。それじゃあ俺は帰るぜ」

俺は影にもぐってその場を去った。

十夜が去った後の学園長

「し、死ぬかと思ったワイ」

完全に脱力しきっていた。

【Touya side out】

第十九話 お見合い・・・・・・・・誓約（後書き）

感想待ってます

第二十話 エヴァンジェリンさん！？ B Yネギ・スプリングフィールド

【Touya side】

「ふわあああゝ眠い」

『三年！A組！！ネギ先生ーっ?!?!』

「はあ、本当にこのクラスはのりが良いな」

「今更だよね」

「……今更」

「はあ、バカばっか……」

めでたくして？俺たちの新学期は始まったのである。

「えと……改めまして3年A組担任になりましたネギ・スプリングフィールドです。これから来年の3月までの一年間よろしく願います。」

『はいー!!よろしくー?』

「……………はあ」

エヴァめ…………魔力回復のためネギを狙うつもりか…………さつきから熱っぽい視線がネギに…………

「ネギ先生、今日は身体測定ですよ。3-Aのみんなもすぐ準備してくださいね。十夜君は保健室ですよ」

「ういーっす」

「あ、そうでした!!ここですか!?わかりました、しずな先生」

あゝなんかやりそうだな…………

「で、では皆さん身体測定ですので……………えと、あのっ、今すぐ脱いで準備してください!!」

俺は目を手で覆う

「バカが……………」

「ネギって大胆だね〜それより十夜、見ていく?」

「……………遠慮しておく。まだ死にたくないんでね」

「残念」

『ネギ先生のエツチ~~~~ツツ?』

「うわ~~~~ん、間違えました~~~~!!」

俺はすでに退避済みだ。

俺は別教室のため、少し待たなくてはならない。

「先生~~~~っ!!大変や~~~~っ!!まき絵が~~~~まき絵が~~~~
~~~~!!」

「何!?!」

「まき絵が~~~~したの!?!」

「わあ~~~~!!?」

「~~~~はあ」

今日はやけにため息が多い一日になりそうだ。

「ど~~~~ど~~~~したんですかまき絵さん!?!」

「何か桜通りで寝ているところを見つけたらしいのよ~~~~  
~~~~」

「なんだ大したことないじゃん」

「甘酒飲んで寝てたんじゃないかなー？」

「昨日暑かったし涼んでたら気を失ったとか・・・」

俺はまき絵に近づき、腕に手を当て脈拍を測り首の傷も確認する。

「ただの貧血だな。少し寝れば元に戻る。」

「ネギ・・・ネギ・・・ちよつとネギなに黙っちゃってるのよ」

どうやらネギは考え事をしていたようでアスナの声が届いていなかったらしい。

「あ、はいはい。すいませんアスナさん。まき絵さんは心配ありませんただの貧血かと・・・」

「いや、それはさつき十夜言ってたし」

「あ、アレ？そ、それとアスナさん。僕今日帰りが遅くなりますので晩ご飯いりませんから」

「え・・・？う、うん」

「ええの？ごはん」

こいつは・・・自分の力を過信しすぎている・・・戦場に行ったら最も先に死ぬタイプだな

まき絵からは残留魔力が感じられる。それにネギは気づいたのだから。そしてどうせネギのことだから桜通りを見張って敵を討つ。こんなところだろ

夜、魔力を感じた。

(これは・・・エヴァの魔力とネギの魔力？まさか戦っているのか？)

俺はできるだけ加速して飛んだ。

「フフ・・・新学期に入ったことだし改めて歓迎の挨拶と行くところか先生・・・いや、ネギ・スプリングフィールド。10歳にしてこの力・・・さすがに奴の息子だけはある」

俺が来たとき、エヴァはネギと対峙していた

「な・・・何者なんですかあなたはっ！！僕と同じ魔法使いのく

せに何故こんなことを!？」

そんなの闇の福音。悪の魔法使いエヴァンジェリン・A・K・マクダウエルとしか言いようがないだろ。ってか教科書に載るほどの大悪党を何故知らない!!

「この世には……いい魔法使いと悪い魔法使いがいるんだよ
ネギ先生 『フリーゲランエクサルマティオー』
『氷結・武装解除!』!』」

あのままじゃ宮崎が危ないか……

俺は影から仮面とフードを取り出しつける。

『フランス エクスアルマティオー
風化・武装解除!』!』

「むっ!?!お前来ていたのか……」

「まあな、エヴァ今のは宮崎を巻き込んでいただろ確実に。女の子
なんだから裸で外にいるのはさすがに嫌だろ」

「むっ……確かに嫌だな」

「あ、あなたは一体!?!」

俺はネギのほうを向き直る

「ん?俺は……お前の敵、エヴァの味方」

「なんでそんな何や今の音!?!」……!?!」

「あつネギ!!」

「あつっ!?!」

「さてエヴァ殺すなよ? まあ一応見張ってるからな。人を殺させるために力を戻したんじゃないからな」

「ああ、わかっている」

ほんとかねえ? まあエヴァの信条に反するから殺さないとは思っけど……女子供は殺さないそれがエヴァの信条貫き通している信条だ。

俺は空に飛び上がり光学迷彩ステルスの魔法で姿を消す。

「あんたそれ……!?!」

「ネ、ネギ君が吸血鬼やつたんか……!?!」

「ち、違います!! 誤解です!!……あつ待て!!」

どうやらエヴァは引くようだ……それともネギを誘き出す罠か?

「え……今のは……?」

「ア、アスナさんこのかさん!! 宮崎さんを頼みます。身体に別状はありませんから。僕はこれから事件の犯人を追いますので。心配ないですから先に帰っててください」

「え、ちよつとネギ君……………」

「じゃあー！」

ネギは追いかけるのか……………ん？何か近づいてくるな、この気配は……………」

「ネギく……………うわっ、はや！？？」

「ちよつとネギーーツー！！！」

俺は気配のほうを向く。

「こつやつて話すのは久しぶりですね。立派な魔法使い（マギステル・マギ）十夜」

「俺は立派な魔法使い（マギステル・マギ）なんかじゃねえよ。そんなもん欲しくもねえしな……………でも話すのは本当に久しぶりだなザジ・レイニーデイ。姉は元気か」

そう、その人物は魔族、ザジ・レイニーデイだった。

「はい。それよりも追わなくて良いのですか？」

「ああ、そうだった。すまんあんまり話ができなくて」

「いえ、こつして話せただけでもよかったです。それでは」

俺はネギを追って、ザジは寮のほうへとそれぞれ飛んでいった。

「追いつめた！これで終わりです！！」
『フランス エクサルマティオー
風化・武装解除』

バアッ

「……」

おうちよつど良い所にこれたな眼福、眼福。

「……やるじゃないか先生」

ふむ、悪くはない

「こ……これで僕の勝ちですね。約束どおり教えてもらいますよ。何でこんなことしたのか。それと……お父さんのことも」

「お前の親父……すなわち……「サウザントマスター」のことか、ふふ……」

「と……とにかく魔力もなくマントも触媒もないあなたに勝ち目はないですよ！！素直に……」

悪くはない……悪くはないが……甘すぎる。こんなじゃ向こうに行ったらすぐに死ぬ。

「……これで勝ったつもりなのか？」

シャツ

「さあお前の得意な呪文を唱えてみるがいい」

『風の精霊11人縛鎖となれウンデキム・スピリトゥス・アエリアーレス（ウインクルム・ファクティ）敵を捕まえる（イニミクム・カプテント）』

「ふ……」

ネギが呪文を唱えている間に茶々丸が接近して……

「サギ……あたっ」

……デコピンをした

「あたた？えっ、あれ！？き、君はウチのクラスの……」

「紹介しよう私のパートナー。3-A出席番号10番”魔法使いのミニステル・マキ従者”絡繰茶々丸だ」

「え……なっ……！？ええ……！？茶々丸さんがあなたのパートナー！？」

「たくいっつも一緒に行動していることから考えて憶測くらい立てておけよな……」

「そうだ。パートナーのいないお前では私には勝てんぞ」

「な……パ、パートナーくらいいいなかつて。風の精霊11人……！？あううううう」

今度は頬を引つ張った……はあ帰ろつかない？

「風の（ウンデキ）……」

バチン

良い音鳴ったな〜

「驚いたか。元々「魔法使いの従者」ミニステル・マキとは戦いのための道具だ。我々魔法使いは呪文詠唱中完全に無防備となり攻撃を受ければ呪文は完成できない。そこを盾となり剣となつて守護するのが従者の本来の使命だ。つまり……パートナーのいないお前は我々二人には勝てないということさ」

違つたら……俺は余裕で勝てるぞ？つていうか呪文詠唱中よけたりしろよな……

「茶々丸」

「申し訳ありませんネギ先生」

「うぐっ」

「マスターの命令ですので」

「うぐぐぐー」

茶々丸はネギの首に手を回して持ち上げる。首を絞める形で……

さすがにまずいか？

「……ふふふ。ようやくこの日が来たか。お前がこの学園に着てから今日と言う日を待ちわびていたぞ……。お前が学園にくると聞いてから半年間。ひよっこ魔法使いのお前に対抗できる力をつけるために危険を冒してまで学園生徒を襲い血を集めた甲斐があった。これで奴が私に掛けた呪いも解ける」

「え……。の、呪い……。!?」

「そつだ真祖にして最強の魔法使い闇の世界でも恐れられたこの私
がなめた苦汁……。私はお前の父。つまりサウザントマスタ
ーに敗れて以来魔力も極限まで封じられ、も……。15年間も
あの教室で日本のノー天気な女子中学生と一緒に勉強させられて
るんだよ!!」

「え……。そんな……。僕、知らな……」

「この呪いの殆どはある人物が解いてくれたが、この馬鹿げた呪いを完全に解くには……。奴の血縁たるお前の血が大量に必要なんだ。……。悪いが死ぬまで吸わせてもらう……。」

「うわあ……。誰か助けて……」

うん、エヴァ。吸うのはいいがその格好じゃネギを襲っているようにしか見えないぞ？

カプッ

「ん……。?」

「うあっ！うっ……あっ……」

「コラッこの変質者どもーっ！っ！」

……この声は……

「……ん？」

「ウチの居候に何すんのよーっ！っ！」

ガンッ！！

「はぶうっ！」

あっ……

「あぶぶぶぶーっ」

「！？か、神楽坂明日菜！！」

「あっ、あれー？あんた達ウチのクラスの……ちょっとゆーことよ！？、ま……まさかあんた達が今回の事件の犯人なの！？しかも二人がかりで子供をイジめるような真似して……答えによってはタダじゃすまないわよ！」

「タダじゃすまないのはどっちだ？神楽坂明日菜」

「なっ！？」

俺はアスナの後ろへ気配を消し降り立ち言う。

そしてアスナが振り向いたと同時にアスナの頭に人差し指を当てる。

「こつちの世界にはな年齢なんて関係ないんだよ。大体このことに関わったお前らが悪い。関わらなければエヴァはお前らに危害を加えることはなかったんじゃないか……。それにしても……。あの闇の福音と恐れられたエヴァンジェリン・A・K・マクダウエルがねえ……。女子中学生に足蹴にされるとはねえ……。クツクツク」

「わ、笑うんじゃない!! くっ、よくも私の顔を足蹴にしてくれたな神楽坂明日菜……。お、覚えておけよ〜〜」

俺は一瞬でエヴァの横まで移動しエヴァと一緒に飛ぶ

「あ……。ちよつと!……。こころFよ……。?」

「エヴァ……。くっくっく」

「い、いい加減笑うな!!」

「悪い悪い。その格好じゃ寒いだろ。これでも羽織っておけ。」

俺は影からコートを取り出す。

「ん……ありがとう」

「んじゃ、俺は寮に戻るわ。」

「ああ、くそつ、神楽坂明日菜め……………」

「……………はあ、まったく。ハイハイ、エヴァちゃんはよくできましたよ〜」

結局俺は帰ることができず、エヴァを慰めるのに労力を費やすことになった。

【Touya side out】

第二十話 エヴァンジェリンさん!?! B.Y.ネギ・スプリングフィールド(後書)

感想待ってます

第二十一話 で、でも相手はあのブラックスターだよ！！ B Yまき絵

【T o u y a s i d e】

「あ〜〜ん。ま、まだ心の準備が……………」

「みんな！！おはよーっ！！」

ん？どうやらアスナとこのか、ネギが教室へ入ってきたようだ。

にしても朝から騒がしいな。こっちは警備の仕事で眠いんだよ。

「あ？ネギ君アスナー」

「おはよー！！ん？ネギ君どうしたの？」

「まきちゃんもう平気？」

「すっかり」

「何も覚えてないらしいぞ」

当たり前だろ。俺が回復系の呪文を掛けておいたんだからな。これで直ってなかったら今までの人生何してきたんだってことになる。

「あ……………いない……………エヴァンジェリンさん……………」

「マスターは学校には来ています。すなわちサボタージュです」

「わ……………わあっ!?!?」

何故そんなに驚く?茶々丸はエヴァと違って心の優しい子だぞ?ネギはひどいなあ

「……………お呼びしますか先生?」

「い、いやとんでもない。いいです、いいですう」

目の前で手をぶんぶん振るネギ……………その発言は先生としてどうかと思うぞ?先生がサボリの許可を出しているようなもんだからな

キーンコーンカーン

心の中で相槌を打っていたらいつの間にか授業の時間になったようだ。

「ふう・・・」

今は英語の時間。和泉に英文を読めとっておいて自分は考え事ですか・・・

「ハア・・・」

「な・・・何かネギ先生の様子がおかしいよ・・・?」

「う、うんボーツとした目で私達を見て・・・」

「あんなため息ばかり・・・」

「せ、センサー読み終わりましたー」

「えっ!? は、はいご苦労様です和泉さん!!」

「ご苦労様って・・・そんな苦労することか?・・・にしてもなんでそんなに?」

「えーと・・・あの、つかぬことをお伺いしますが・・・和泉さんはパ、パートナーを選ぶとして10歳の年下の男の子なんてイヤですよねー」

「・・・バカばっか・・・」

「なっ・・・!?」

「えええ!? そ、そんなセンセややわ急に・・・ウ、ウチ困ります。まだ中3になっただっかやし・・・」

そして和泉まともに答えるなや

「でも、あのその……今は特にその……そういう特定の男子はいないっていうか……」

わたわた

「はあ……」

くっくっく、だんだん面白くなってきた

「宮崎さ「ブルルンブルルン」……」

「なんだなんだ？」

俺は外を見る。するとバイクに乗った連中が広場に集結していた。

ブルルンブルルン！！

「ぼ、暴走族！？」

『神崎十夜！！大河内あきら！！出て来いよ！！うちのもんが世話になつたみてえじゃねえか！！わざわざ調べてまで来てやったんだ。ありがたく思え！！それと、落とし前はちゃんとつけてくれんだろうな？』

その集団の中にはいつか大河内さんに絡んでいた男達がいた。

「あいつら……」

俺は肘をつき手に頬をつける。

「ど、どうしよう。私のせいで」

俺は立ち大河内さんの前まで行く。

「はあ、大河内さんのせいじゃないよ。あいつらが絡んできたのが悪いんだ」

そう言つて、大河内さんの頭を撫でる。

「で、でもどうすんのさ!! あいつらブラックスターって言つ今話題になつてる極悪暴走族だぞ!! いくら十夜兄いでも!!」

「そ、そうですよ!! 警察も手を焼いてるみたいですし!!」

「こ、こうなつたら雪広財閥の力を使って……」

「なんか……俺が行くみたいな雰囲気になつちまったな……
・仕方ねえか」

俺は窓を開け、窓に脚をかける。

『十夜（十夜殿）（十夜さん）（手伝つか？）（手伝うアルか？）（手伝うでござるか？）（手伝いましょうか？）（）（）』

俺に話しかけてきたのは武道四天王だった。

「まあ、気持ちだけ受け取っとくよ。お前らは一応、こいつら非難

させておいてくれ」

タッタッタッタ

「と、十夜！！また問題を抱えてきてくれたねえ」

「タカミチか。大丈夫だ、俺がケリつけるからよ」

「いや、そうじゃなくて学園長から手紙を預かってるんだ」

「ん？ジジイから？」

なになに

十夜殿。ブラックスターの殲滅を命じる。殺さないようにね

「らじゃ。んじゃ行ってくる」

俺は足を掛けていた場所を蹴り、跳んだ。

シュー ドン！！

「よう、また懲りずにやられに来たのか？言っとくが今回は手加減しないぞ？三下」

「はん、強がりだな。この数相手に何が出来んだ？それにな今、こっちに向かってバイクを走らせてきてる連中もいるんだ。お前はこ

「ここで終わりだよ」

「・・・・・・・・・・なら来いよ」

俺は手をクイッククイックとして挑発をする。

ブルンブルンブルン！！

「死ねえ！！！！！！」

俺が下した男の一人がバイクで突っ込んでくる。

ガンッ！！ バギン！！

吹き飛んだのはもちろんバイクの方だった。

「弱いな。たかが暴力集団か・・・・・・・・・・」

【Touya side out】

【Asuna side】

「十夜君大丈夫かな〜?」

「大丈夫よ、あいつなら……………」

私は何故だかそういう確信が持てた。何故だかは分からないけれど……………絶対に十夜は勝つ。

「で、でもでも相手はあのブラックスターだよ!?!」

「あっ!?!?危ない!?!」

ブルンブルンブルン!!

「死ねえ!?!?!?!?!」

男の一人が十夜に向かっていった。私は思わず目を瞑ってしまった。

ガンツ!! バキーン!!

しかし、目を開けたとき宙に浮いていたのはバイクのほうだった。

「弱いな。たかが暴力集団か……………」

「す、すごいアル!! さすが当夜アルね!?!」

「そつでいぢるな。拙者にはあんな真似出来ないでいぢる。」

出来たらむしろ困るけど……………」

「ほら、時間の無駄だ。全員でかかって来い」

十夜が挑発すると鉄パイプや金属バットなどを持ったブラックスタ
ーの連中が十夜に襲い掛かった。

しかし十夜はそれが必要なものだけ避けたり止めたりして確実に一
人ずつ気絶させていく。右、左、屈んでアッパーカット。素人の私
が見ても綺麗だと思えるくらいに身体が動いていた。

私は祈った。十夜の無事を……

【Asuna side out】

【Touya side】

数は確実に減っている。あと少しだ。しかし、そんな時、俺の疲労
感をさらに増すような音が聞こえた。

ブルンブルンブルン

バイクの音だ。これはまだ良い。援軍が来るとは聞いていたからな。だが、この後聞こえた声に俺は疲労感を増やした。

「何ですか？あなた達！！麻帆良学園に乗り込むなどいい度胸ですわね！！」

「お、お姉さま〜」

ブラックスターをビシッと指差す高音・D・グッドマンとその後を半泣きになりながら付いて行く佐倉愛衣だ。

「……………」

ゴスツ！！

俺はついイラツとしてブラックスターの一人を結構マジで殴り、援軍だと思われるバイクに乗った男達の先頭の奴のところまで飛ばし当ててしまった。

「あつ、やべ……………まあいいか。それよりてめえら！！邪魔だから引ッ込んでろ！！」

「なっ！？せつかく助太刀に来たというのに！！」

「お、お姉さま〜ここは十夜さんの言うとおりにして〜」

「愛衣は黙ってなさい！！」

高音の後ろにはいつの間にか一人の男が鉄パイプを振りかぶって

た。

「危ねえ!!」

俺は高音を突き飛ばした。しかし魔法を使えない俺には致命的なミスだった。俺は頭にモロに攻撃を受けてしまった。

バゴンッ!!

「ぐっ!.....」

「なっ!?!何故かばったんですか!!」

「あつたりめえだろ!!女は引つ込んでやがれ.....ここは人間界なんだ。男が強くて女が弱い。大人が強くて子供が弱い。そういう世界なんだよ!!」

俺は血が出る頭を押さえて立ち上がる。そして近くにあった鉄パイプを拾う。

「さ、さて手加減は.....もう終わりだぜ?.....ちっ、血が足りねえ。愛衣!!終わったら吸わせろ」

「は、はい!!」

「そしてその馬鹿女を連れて下がってる。巻き込まれなくなかったらな!!」

俺は走り出す。そして吹き飛ばす。

俺の速度はだんだん速くなっていく。

ザシユツ!! ザン!!

「はあああああ!!」

ガンツ!! グシャツ!!

俺がトップスピードになった頃には既に音速を超えていた。

見える奴には見える程度の速度だが。

「な、なんだあいつ……ば、バケモノが!!」

「バケモノで結構つと」

ダンツ!!

「はぁ………終わったか」

周りには人の山、山、山。

フラッ

「おっとつと………」

「大丈夫ですか？十夜さん」

倒れかけた俺を支えてくれたのは愛衣だった。

「ああ、悪いな」

「いえ、あの、その、どうぞ」

愛衣は右腕を俺のほうに向ける。

「悪いな。『麻酔術』」

俺は麻酔を掛けて愛衣の腕にかぶり付く。

チュウウウウツ

「……………チュウウ……………プハツ……………サンキユ。愛衣」

「い、いえ。そ、それでは私はこれで」

「ああ、すまん」

愛衣は高音が居るであろう方へ走っていった。

「はあ、学園長室行く……………侵入者？まあエヴァが対処する
だろ」

俺は侵入者を感知したが、スルーして学園長室へと向かった。

【T o u y a
s i d d e
o u t
t】

第二十一話 で、でも相手はあのブラックスターだよ!! B Yまき絵(後書き

感想待ってます

第二十二話 私の気持ち・・・・・・・・・・ B Y 佐倉愛衣

【M e i s i d e】

私が彼にあつたのはアメリカのジョンソン魔法学校に留学していた時だった。

その頃の私は魔法が怖く、使うことを躊躇っていた。何故なら、以前に魔法の練習の時、母を死に至らしめるほどの怪我をさせてしまった。今では後遺症も残らずとも元気に過ごしているが・・・・・・・・
・私が魔法を全力で使うのを拒んだのはこの時からでした。

ある日、私が留学しているジョンソン魔法学校に編入してきた人が居ました。名前を神崎十夜さん。軽く紹介がされて、席は一番後ろの私の席の隣になりました。このクラスの席順は、魔法の成績がいい順番に前から座って行きます。そのため聞いて分かったと思いますが、私の魔法の成績は一番下。自分の魔法を隠している・・・・・・・・
と言うより使わないので先生からも諦められ、生徒からは素質がないなど、悪口を言われたり、暴力を振るわれたり魔法の実験に使われたり、いじめられている日々でした。

休み時間になると神崎さんはクラスのみんなに囲まれていました。私はしつしと追いやられてしまいました。神崎さんはそんな私のことを目を細めながら見て再び視線をクラスの人に戻しました。囲まれた中からは「得意な魔法系統は？」や「趣味は何？」などの質問が飛び交っているが神崎さんは表情をまったく変えず沈黙を守っている。クラスの人々は興味が失せたのか、それぞれ思い思いの場所へと散っていった。

神崎さんが編入した日の授業は、外で魔法の実戦形式の授業でした。そのため、私は腰に刺さってる杖を確認し、教室を出ようとした。

「ちょっと、待ってくれ」

私は制止の声に足を止めたあまり聞きなれない声だ。私は誰だろうと思ひ、後ろを向いた。すると編入してきたばかりの神崎さんが居た。

「今日は外での授業だろ？場所が分からないので案内してくれないか？」

「えっ・・・あ、はい」

私が彼とはじめて話した瞬間だった。

私は外に行くまで、十夜さん（そう呼べといわれた）といろいろな話をした。十夜さんはよく見ると銀髪的美形で整った顔立ちをしている。名前は日本人なのに何故、銀髪なのだろうと思ひ聞いてみたらハーフなんだそうだ。

外に着くと大半の人は揃っていた。

そして授業が始まった。先生の説明が終わり、誰かとペアを組み、2対2のダブルス試合をするそうです。

私がペアを探していると後ろから声がかかった。

「なあ愛衣、空いてたら俺と組んでくれないか？」

「あ、はい……お願いします」

こうして私は神崎さんとペアを組むことになった。

「デイゾア・ラゾア・ルスターク 水の精霊3頭、集い来たりて敵を切り裂け。」

私は詠唱を聞き、神崎さんの前に立ち杖を握った。

しかし、あの時の光景が頭に蘇ってきて魔法を使うことを躊躇った。そして……

「魔法の射手・連弾・水の3矢!!」

私は目を瞑った。

「魔法の射手・光の1矢」

小さな声でそう誰かが呟いた。それと同時に私は後ろに引つ張られるような浮遊感を感じた。

ばんっ!!

二つの魔法が反発し合い、小さな爆発が起こる。

「…………ふっふっふ、佐倉。お前に試合を申し込む」

そこにいたのは嫌らしい笑みを向ける、私をいつも苛めている人たちのリーダー格の男女二人だった。

また、あの笑みだ。私はあの笑みが嫌いだ。いつも私を見下し、苛める目だ。あの二人のせいで何度挫折そうになったことが……………何度怪我を負ったことが……………

「くっ……………」

仕返ししようと思っても、杖を持つと毎回のごとく炎で焼ける母を思い出す。

私には魔法の力と才能がある。でもそれをコントロールする技量がない。いや、今はあるかもしれない。ただたんに、怖いだけかもしれない。

(愛衣……………悔しいか?)

(えっ!?)

突然の念話に吃驚してしまった。相手は十夜さんだ。

(悔しいか？悔しくないか？)

(悔しいに……決まってるじゃないですか)

(そうか、ならここらでちょっと仕返しをしてやってもいいんじゃないか？)

十夜さんは優しくそうな声で言った。

(で、でも……)

(……ここからは独り言だ。昔、ある一人の少女が魔法の練習中に母親のことを怪我させてしまった。それもいつ死んでもおかしくないような怪我をな)

えっ？……それって……

(俺はその時、現場に居合わせた。少女は怖さで気絶してしまった。俺はその少女の母親を治療魔法で治していった。そして、先に目覚めた母親は俺に感謝しながらもある心配事をしていた。娘がこれで魔法を恐れ使えなくなるか……)

私は黙って聞いてた。

(確か……その少女の名前は佐倉……愛衣だったかな？)

私は目を瞑った。

(十夜さん……私、もう一度魔法を使います)

(そうか)

「その試合……受けます」

「くっくっく……後悔するなよ？」

私はしっかりと相手を見据えて答えた。

そしてお互い杖を抜いた。

「メイプル・ネイプル・アラモード 目醒め現れよ燃え出づる火蜥蜴、火を以ってして敵を覆わん。「紫炎の捕らえ手」」

私は束縛魔法を唱え、相手の動きを止める。

「なっ!?!くっ……」

私は構わず詠唱を続ける。

「メイプル・ネイプル・アラモード ものみな焼き尽くす浄化の炎、破壊の主にして再生の徴よ、我が手に宿りて敵を喰らえ。「紅き焰」

」

私が打った魔法は中級魔法。赤き翼のナギ・スプリングフィールド

が愛用して使った「白き雷」と同種の呪文だ。

その魔法は相手の男の前で止まり、消えた。

「降参してください」

「くっ……お前等！！何をポーっとしている！！あいつを殺しちまえ！！」

『あ……うおおおお！！』

周りにいた生徒達は一気に魔法を唱え始める。

「ふん、貴様ら人間の片隅にも置けんな」

不意にそのような声が聞こえた。そこにいたのは十夜さんだった。十夜さんは口調が変わり、体から殺気なるものを発している。

魔法が一斉に、十夜さんに飛び掛る。

「あ、危ない！！」

私は前に駆け出そうとした。

「邪魔だ。怪我をしたくなかったら下がっている」

十夜さんのその声で私は足を止めた。いや、止めざるを得なかった。

十夜さんの体から垂れ流すように膨大な魔力があふれ出ている。

「少し頭を冷やせ。『リク・ラク・ララク・ライラク 契約に従い、我に従え、氷の女王。来れ、とこしえのやみ、えいえんのひょうが！』」

魔法を放った生徒は顔より下は氷付けになっており身動きが出来ていない。

「い、今は……氷系統の高等呪文……」

これが私と十夜さんの初めての出会いでした。

その後、私は十夜さんに弟子入りし、そして鍛えてもらった。

そして卒業式、彼と別れる際に彼は本当の姿となって卒業式場に現れた。

赤き翼……ナギ・スプリングフィールドを軽く超える魔力を持ち、魔法世界……いや全土最強の男。闇の帝王。

卒業式が終わった後、彼は身に着けていた仮面をとり、私に本当の正体を明かしてくれた。

昔は、真祖の吸血鬼として名前を轟かせていたこと、『闇の福音』ことエヴァンジェリン・A・K・マクダウエルと世界を回っていたことや……

あの『闇の帝王』と『闇の死者』が同一人物だったことには驚いたが、それでも十夜さんは十夜さんだ。

私はその後、日本に渡り十夜さんとはそこで別れた。

そして、十夜さんと次に会ったのは日本のひなた荘と言う女子寮だ。

私がひなた荘に行ったのは成瀬川なるさんが東大に合格したと聞いて、ひなた荘へと向かったのだ。

ひなた荘へ着きインターホンを鳴らすと以外にも十夜さんが出てきた。

どうやら合格祝いの宴会をしているらしい。十夜さんは数年前からここに居座っていたらしい……。一体どういうことだろう？
時間が合わない……………

でも、そのような些細なことは気にしないで私も宴会に混ざった。

私は気づいていた。私が十夜さんに寄せるこの思いが何なのかを。

最初は憧れだと思っていた。でも今は違うこれは“憧れ”ではなく
“好き”なのだ

【M e i s i d e o u t】

第二十二話 私の気持ち・・・・・・・・ B Y 佐倉愛衣（後書き）

感想待ってます

第二十三話 マスター、十夜さんネコの世話は・・・・・・・・・BY茶々丸

【Touya side】

ブラックスター襲撃から数日、俺はエヴァと茶々丸に誘われ茶道部へ来ていた。

「・・・・・・・・結構なお手前で」

ペコペコ

はあくいいね〜癒されるね〜日本の味って感じだよね〜

「ネギ・スプリングフィールドに助言者が付いたかも知れん。しばらく私のそばを離れるなよ」

「……………はい、マスター」

今、茶道部の活動も終わりエヴァの家に行こうとしていた。

「おーいエヴァ」

「……………何か用か？仕事はしてるぞ」

「学園長が呼びだ。一人で来いだつてさ」

「わかった。すぐ行くと伝える。茶々丸、すぐ戻る。必ず人目のある所を歩くんだぞ」

「ん〜じゃあ俺は茶々丸送つてって帰るかな。じゃあなエヴァ」

「ああ。」

「何の話だよ？また悪さじゃないだろーな？」

「うるさい。貴様には関係のないことだ」

エヴァとタカミチは話をしながらいつてしまった。

「……………お気をつけてマスター」

「……………どうしたんだ？茶々丸。ポーっとしてるぞ？」

「……………そう、でしょうか？」

「んんんん……まあいいか。行くうか」

「はい」

ガサツ

「………もっ少し上手く尾行出来ないかね？ものすごい
分かりやすいぞ？」

俺は後ろで隠れながら尾行しているネギ、アスナ、下等生物に若干
イラついていた。

「うえーん、うえーん。あたしのフーセン、あたしのフーセン！」

「………」

バシヤツ ドドドドドドド
ゴチツ

茶々丸は無言で飛び上がり風船を取る

「わー！お姉ちゃんありがとー」

「茶々丸、大丈夫か？頭ぶつけてたみたいけど」

「問題ありません。心配ありがとうございます」

「そっか、ならいいんだ。んじゃ行くか」

にしても茶々丸は人気者で、しかもとても良い子だ。

歩道橋を上るのに苦労しているおばあちゃんを背負って上ろうとしたり（もちろん俺が背負いましたよ？）川に流されている猫を助けようとしたり（もちろん俺が助けましたよ？女の子をあんな汚いところにはやれませんかからねえ）まあ、とってもいい奴ということだ。

そして今はちょっとした広場に来ている。そこには野良猫がたくさん居て茶々丸は猫に餌をやっていた。

「茶々丸。俺はちょっと自販機で飲み物買って来るな。」

「わかりました。お気をつけて」

「おっ」

俺は自販機目指して歩き出した。

【Touya side】

【Tyat Yamaru side】

一体どうしたのでしょうか？今日の私は少しおかしいようです。

何かボーっとしているようですし。十夜さんの事を見ると何故だか心臓部のモーター回転数が上昇します。

これは感情というものなのでしょう？いえ、私はガイノイドです。感情などというものはないはずです。でも、もしも私に感情があるのだとしたらこの胸の高鳴りは何なのでしょう？

私はふと後ろに気配を感じました。

「……………こんにちは。ネギ先生、神楽坂さん……………油断しました。でも、お相手はします……………」

「茶々丸さん、あの……………僕を狙うのはやめていただけませんか？」

「……………申し訳ありませんネギ先生。私にとってマスターの命令は絶対ですので」

ですが最近、十夜さんの言葉のほづが絶対になってきているような気がしなくもありません。

「ううっ……………仕方ないです……………では茶々丸さん」

「……………ごめんね」

「はい。神楽坂明日菜さん……………いいパートナーを見つけましたね」

「行きます!!!」シス・メア・バルス 契約執行10秒間!!!ベル・デケム・セクンダス ネギの従者「神楽坂明日菜」

「……………」

ドンッ

神楽坂さんが私に迫ってきます。

「ラス・テルマ・スキル・マギステル」

パシンッ

私は神楽坂さんの攻撃をはじきますがさらに追撃が来ました。

「えいつ」

ビッ すっ……

「はい！素人は思えない動き……！？」

『光の精霊11柱……集い来たりて……』

これはきついですね。

『魔法の射手連弾・光の11矢！！』
サギタ・ミサキオス ルーキス

「……！！追尾型魔法至近弾多数……よけません。すいませんマスター、十夜さん……もし、私が動かなくなったらネコのエサを……」

バサッ

その時、私の目に移ったのは黒い服と飛び散る新血だった。

【Tyat yamaru side out】

【Touya side】

何を思ったのだろうか？

俺は自販機に行つて、二人分の飲み物を買つと茶々丸が居る場所に戻つた。

すると、ネギが茶々丸に魔法を撃ち、絶対に避けられるような数ではなかった。

俺は咄嗟に駆け出していた。

障壁を張ることも忘れて、茶々丸の前に飛び出した。

俺ならどうにでも出来たものを。

俺は脇腹の辺りに、激痛を感じた。

脇腹の辺りを見るとぽっかりと大きな穴が開いていた。

ああ、死んじまったな。死ぬのは何億年ぶりだ？などと思いつつも俺の意識は闇へと沈んでいった。

最後に見たのは泣きそうになりながら駆け寄ってくる茶々丸の姿だった。

【Tyatamaru side】

「あ……え？……ううあ……」

私は声が出なかった。

私をかばって十夜さんが倒れた。いや、死んだ。

「あ……ああ……あああああああああ……！！！！十夜さん！！！！！！！！！！あああああああああ……！！！！」

私は我を忘れた。ロボットなりに在った理性を殆ど失った。

私は十夜さんに近づき、抱きかかえ、すぐさま背中中のジェットを出し飛び立った。

そして真っ先に思いついたのはマスターだった。長年生きているマスターならあるいは

【Tyatamaru side out】

【Touya side】

結果的に俺は助かった。

それもそうだろう。元々俺は不老不死なのだから。消滅でもしない限り死にはしない。いや、魂は生きているがな。

それで、目を覚ましたのは茶々丸の腕の中。しかも空中。

起きたとき丁度下を向いていたから思わず、条件反射で茶々丸に抱きついてしまった。いやはや恥ずかしい。

そして茶々丸は俺が不老不死だということをすっかり忘れていたようだ。

まあいいんだがな。

俺はとりあえず、一日、体が完全に治るまで、エヴァの家で休ませてもらうことにした。ちなみに、茶々丸はネギ・・・・・・・・・・もう、茶々丸を襲おうとして俺を殺したから野菜で良いか・・・・・・・・・・ネギ、もとい野菜にとてもご立腹のようだ。

そして俺は少しの間眠ることにした。

コンコン

俺はノックの音で目を覚ました。時計を見ると寝始めてから三十分もたっていない。

「どうぞ」

ガチャッ

扉を開けて入ってきたのは野菜とアスナだった。

俺は入るように促すと、野菜は俺のそばまで来て頭を下げた。アスナもソレに習って頭を下げた。

「僕のせいで、十夜さんにこんな怪我を負わせてしまって……
……本当にすいませんでした。」

「……ふむ、少しは成長しているようだな。相手を怪我させたことにちゃんと責任を持っている。」

「いや、俺は必死で何が起こったかわからないけどそう思ってくれているならいいよ」

少し、居座った野菜たちだったが静かに部屋を出て行った。

コンコン

「どうぞ……ってアスナか。どうした？忘れ物か？」

俺がそういうとアスナは泣きながら抱きついてきたっておい！！

「ど、どうした。何で泣いてんだよ。ほら、泣くな」

アスナは泣きながらも俺に何度も謝ってくれた。

うん、アスナは良い子に育ってくれてお兄さんは嬉しいよってこんな場合じゃなかった。俺はアスナを泣き止ませるのに骨を折り、アスナが泣き止んだのは小一時間たった頃だった

そして、アスナは俺の正体まで見破りやがった。“魔法使い”アスナはそう言ったんだ。俺もびっくりした。だが、すぐに納得が言った。俺の使っている認識障害の魔法は王族のアスナの魔力で打ち消されてしまっていたのだ。はぁ、盲点だったな。

そして、最後には自らの内に秘めてる思いを伝えてくれた。……ずいぶん遠まわしな言い方だったがアスナに告白されたのだ。これには目が白黒してしまったよ。俺の見立てではアスナはタカミチに思いを寄せているものだとばかり思っていたからな。

その事と、歓迎会の時タカミチにネギが読心術で聞いていたことを聞いてみた。

「あ、あれね……お、覚えてたんだ。えつとね、高畑先生と十

夜って仲がよさそうだったから、十夜の事を聞いてもらったの。それと高畑先生はお父さんみたいな感じだから……」

つまり、あれだ。たまに聞く一目惚れという奴らしい。

俺は不老不死。彼女は普通の人間だ。

果たして、俺が彼女を愛して彼女が死んだ後どのような行動に移るのだろうか？

だから……

「今はまだ答えを出せそうにない。だから、まだ待ってくれないか」

アスナは笑顔で頷くと部屋を出ていった。

【Touya side out】

第二十三話 マスター、十夜さんネコの世話は……………BY茶々丸（後書き）

感想待ってます

第二十四話 ターゲットを確認 BY???(前書き)

修学旅行から帰ってきました~~~~!!!!

この小説も早く修学旅行までもって行きたいな~~~~~
HHHHH
H O) < > (O) O < > (O H H H H H H H H H H H H H H H H

第二十四話 ターゲットを確認 BY???

【Touya side】

茶々丸襲撃事件から数日がたった。

その数日間の間、ネギが逃亡したそう。

「おはようございますっ!! エヴァンジェリンさんいますかっ!？」

「おお、野菜坊主。エヴァな「ネギ先生」学園長が呼びですよ。最近言葉をかぶせられるのがやけに多いような気がする。」

俺は机に顔をつけて眠る。まあ寝はしないが表現としてだ。

数分するとネギが帰ってきた。

「えっと……みなさん。今日はまた転入生が来ます。」

ん？転入生か………興味ないな

俺は一瞬だけ顔を上げてまた伏せる。

「えっと……どうぞ入ってきてください」

ガラガラ

「始めまして。貝塚海かいすかづみです。どうぞよろし……ッ!」

(避けてください!!)

俺は声に従い、一瞬で後ろに飛びのいた。

ドオン!!

(今のは念話………いや、今はそれよりも)

俺は顔を上げる。

そこに居たのは、赤色の長い髪を後ろでポニーテールにした、小柄な女の子だった。

「やっと………見つけた………」

少女は構えを取る。

「なっ!?!それは………」

これには俺も驚きの声を上げるしかなかった。

その構えは以前、シヴァが使っていた構えと同じ構え

ウォルフオー
「海龍殺………」

「なっ！？海龍殺アルか！？」

声を上げたのは古だった。

「古ちゃん。その海龍殺って何？」

「私もよくは知らないアルが。はるか昔に在ったとされる幻の構えアルよ」

中国の文献などにはそう載っているがそれは違う。これはシヴァ自身が生み出した構えだ

「はあああああ！！」

海といったか、彼女は俺に拳を放ってくる。

(逃げて！！)

またか……

「ふん」

俺はその拳をはじき、手首を掴み引き寄せ、のど元に指を突きつけ

る。

「何のつもりかは知らんがみんなが困ってる。さっさと席に着いたらどうだ？」

「くっ！？離せー！」

（よかつた〜）

この声………目の前にいるやつと同じ声なのだが………
・どういうことだ？

俺は海を開放して、席に着く。

「先生。HRを続けてくれ」

「ちっ、せいぜい後ろから刺されないようにするんだな」

「ああ、忠告どうも」

「ちっ」

HRも終わり、俺はサボるために屋上へ行こうとする。

「あ、あの神崎さん!!」

「ん？野菜か。どうした？」

「あ、はい。エヴァンジェリンさんにこれを渡していただだけませんか？」

果たし状………って、野菜って言ったことには反応しないんだな

「やだよ。自分で渡せ。俺が渡したんじゃない気が伝わらんだろう」

「………そう、そうですね!!僕、渡してきますね!!」

ダダダダダ

ネギは走り出した。

「おい、野菜………もう居ないか。さて、俺も行くかな」

俺も屋上へと向かった。

俺が屋上へ付くと、寝ているエヴァと杖を持って寝ている野菜が居た。

「こいつ……『夢の精霊よ（ニユンファ・ソムニー）女王メイヴよ、（レーギーナ・メイヴ）扉を開けて（ポルターム・アペリエンス）夢へと（アド・セー・メー）いざなえ（アリキアット）』」

俺は少し離れたところで夢見の魔法を唱える。

ザアア……

着いたのは砂浜のようなところだった。

アレは……

髪の毛の長い女性とフードを被った男が対峙している。

これは……エヴァがナギに封印された時のことか……

ザアア……

「ついに追いつめたぞ『千の呪文の男』この極東の島国でな。今日こそ貴様を打ち倒し……あいつの居場所を吐かせてやる」

「『人形使い（ドールマスター）』『闇の福音』ダーク・エヴァンジェル『不死の魔法使い（マガ・ノスエラトウ）』『エヴァンジェリン……恐るべき吸血鬼よ。己が力と美貌、愛しの人物の糧に何百人を毒牙にかけた？その上俺を狙い何をたくらむかは知らぬが……あきらめろ。何度挑んでも俺には勝てんぞ』」

「魔法学校中退がよく言っぜ

「パートナーもない魔法使いに何ができる!?行くぞチャチャゼ
口!」

「OK、早くあいつに会いたいもの。あんたに恨みはないけどおと
なしく倒されなさい!」

エヴァとチャチャゼロが加速する。

「えーと、この辺だっけ……」

ナギは少し移動をする。

「フ……遅いわ若造!私の勝ちだ!」

ポッ

エヴァの右手に魔力が……ズボッ……えっ?

「!?!」

ドパーン

「うわあっ!?!」

「……って落とし穴かよ!!突っ込みどころ満載だなゴリア

「アブッ!?!なっ……これは!?!」

「落とし穴よ御主人！！あーんもう気持ち悪い」

「見りゃわかるッ！！」

「ふははは」

ドザザザザザ

ナギが何処から出したのか大きな袋を開け、中身を落とし穴に落とす。

ドボン ドボン

「なアッ！？ひっ……ひいひい！？私の嫌いなんにくやネギ
~~~~~！？いつ……いやあ〜っや、やめるお〜っ！？」

「フフ……お前の苦手なものはすでに調査済みよ」

ませませませませ

「あッ、ああッダメー」

「おちつきなよ御主人！！」

なんというか………幼稚すぎて笑えねえ

「あつっっ」

ボンッ

「あつ！？ご主人の幻術解けちゃったじゃない」

「わはははは噂の吸血鬼の正体がチビのガキだと知ったら、みんなと言っかな。ほれほれ」

「やめろーバカーツ！！ああ~~~~」

バシャバシャ

「ひつ……ひきよう者ー！？うぶつ……き、貴様は『千の呪文の男』サウザント・マスターだろー！！魔法使いなら魔法で勝負しろーっ！！」

「やなこつた。俺は本当は5、6個しか魔法知らねーんだよ。勉強苦手だな。魔法学校も中退だ。恐れ入ったかコラ」

どん

つて威張るとこじゃないって……もうヤダ……赤き翼の恥だよこれはもう……

「なっ……」

「お、おいサウザントマスターー！何故だ、何故十夜の居場所を教えたくない！！」

「だ〜か〜ら俺も知らねえって言うてんだろ？死んだことにはなってるがどっかで行きてるって」

「う~~~~うがああああ！！」

エヴァ……俺の事探してたのか……後で構ってやら  
なきゃな

「なあそろそろ十夜を追うのはあきらめて悪事からも足を洗ったら  
どうだ？」

「やだっ」

「そーかそーか。それじゃ仕方ない。変な呪いをかけて二度と悪さ  
のできない体にしてやるぜ」

「うっ……何だこの強大な魔力は!？」

「確か、麻帆良のじじいが警備員を欲しがってたんだよな。えーと  
マンマンテロテロ……長いこの呪文」

「ば……バカやめろ!! そんな力でテキトーな呪文を使うな!  
! たっ……助けて!! 誰か助けてーっ!!」

「御主人アレはまずいわ!!」

そりやまずいだろっな〜魔力が渦巻いて見えるもんな〜」

「あっやめっ……ひどいぞ!! サウザントマスター! あっ!!  
いやッ!」

インフェルナス・スコラスティクス  
『登校地獄!』』

「いやーん。まだ十夜に告白もしてないのに〜うわあああ!」

ガバツ

俺は強制的に現実に戻される。どうやらエヴァが起きたようだ。

「ハアハア、ま……またこの夢か……ん？」

「う……あ……あ、あのは、果たし状です。そ、それでは僕はこれで」

「……待て、貴様……私の夢を覗いたな……！」  
「？」

「うわぁーんごめんさーい」

野菜は走って屋上を出る。

俺はエヴァの前に飛び降りる。

「まったく、この可愛いやつめ」

「なっ！？まさか十夜まで見てたのか！？／／／／／」

「ああ、まったく悪かったな、会いにいけなくて」

「本当だ。お詫びとして私の婿になれ」

「何でだよ……それより、この前じいになんて呼ばれたの？」



「（ちつ話をそらされたか）ああ、あの坊やに稽古をつけてやってくれと“お願い”された。」

「ほおー、なるほど。そういうあれか……………まあ、がんばれ」

「ああ……………はあ」

「？」

なぜ、こんなに盛大なため息をエヴァが吐いているのかわからずじまいで一日が終わった。

【Touya side out】

第二十四話 ターゲットを確認 BY???? (後書き)

感想待ってます

なかなか来ないけど・・・シクシク

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3601q/>

---

とある世界の異世界目録? 魔法のある世界

2011年4月28日00時03分発行